

七飯町

大 中 山 13 遺 跡

—一般国道5号函館新道(自専道)工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 3 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

七飯町

大 中 山 13 遺 跡

—一般国道5号函館新道(自専道)工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成3年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡遠景 (セスナ：北から)



土塁跡全景（北から）



調査風景（北から）



第VI層出土の土器

例 言

1. 本書は、1991(平成3)年度に実施した一般国道5号函館新道(自専道)工事用地内の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。
2. 調査は、財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施し、本書は調査を担当した調査部第4課が作成した。編集は、遺物図版は熊谷仁志、写真図版は森岡健治、遺構その他の図版を和泉田毅が行い、全体の編集・構成は和泉田毅が担当した。また各遺構事実記載については、調査担当者がそれぞれ分担執筆した。なお整理にあたっては、土器は熊谷仁志、石器・写真は森岡健治が担当した。各章または節などの執筆は以下のとおりである。
I-1・2・3・4・6 II-1・2・3 III IV-1・1-(1)・2・3-(1) V-1 和泉田毅
I-5(土器) IV-1-(2)(土器)・2-(1)(土器)・3-(2) (土器) V-2 (土器) 熊谷仁志
I-5(石器) IV-1-(1)・(2)(石器)・2-(1)(石器)・3-(2)(石器) V-3(石器) 森岡健治
3. 現地の写真撮影、室内整理の遺物撮影は森岡健治が担当した。
4. 石材鑑定、火山灰分析、V-4の執筆は調査部第2課の花岡正光が行った。
5. 遺構図等の整理、作成、トレースは和泉田毅が担当した。
6. 遺物分布図、集計表等の整理・作成は熊谷仁志が担当し、トレース、図版作成は小杉絨子、田川幸子が行った。
7. 土器の接合、復元、拓本と石器の接合等は尾美里子、貝田和子、田川幸子、種市伊津子、山木良子が行った。また土器、石器の実測、トレースは森ひとみ、小林晴美、山下かず子が担当した。
8. 室内整理後の出土遺物、諸記録類は、北海道教育委員会の指示により七飯町教育委員会が保管する。
9. 調査にあたっては、下記の機関および人びとの指導ならびに協力を得た(順不同、敬省略)。

文化庁、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、七飯町教育委員会、函館市教育委員会、上磯町教育委員会、函館市立博物館、函館市立図書館、函館市北方民族資料館、南渡島消防事務組合

石本省三(七飯町教育委員会)、中村公宣・佐藤智雄(函館市教育委員会)、森裕裕・落合治彦・松野儀一・大矢内愛史・野辺地初雄(上磯町教育委員会)、高橋豊彦(知内町教育委員会)、畑中義和(亀田中学校)、平川善祥・小林幸雄(北海道開拓記念館)、田原良信(函館市立博物館)、長谷部一弘(函館市北方民族資料館)、古屋敷則雄(戸井町教育委員会)、阿部千春(南茅部町教育委員会)、寺崎康史(今金町教育委員会)、藤田登(森町教育委員会)、三浦孝一・柴田信一(八雲町教育委員会)、鈴木正語・菅野文二(木古内町教育委員会)、久保泰(松前町教育委員会)、藤島一己(江差町教育委員会)、森広樹(乙部町教育委員会)、松崎水穂・斎藤邦典(上ノ国町教育委員会)、百々幸雄・大島直行(札幌医科大学)、原田豊(函館中部高校)

千代肇、横山英介、小松平力雄、木村キヤ

凡 例

1. 遺構の表記は以下に示す記号を用い、原則として発掘調査順に番号を付した。
F：焼土 SP：小ピット S：遺構扱いとした礎
2. 遺構図中の方位は平面直角座標の北、レベルは標高(単位m)を示す。
3. 遺構、遺物の図は、基本的に以下の縮尺に統一してあるが、分布図、出土状況図、集成図などは任意の縮尺であるため、その都度スケールを付している。
焼土、小ピット：1/20 土器実測図：1/3 土器拓影：1/3 台石、石皿類：1/3
剥片石器ほか：1/2
4. 遺物分布図では以下の記号を使用した。
土器：△ 石器：●
5. 遺構実測図、出土状況図の焼土、各種の遺物については、その都度表示した。
6. 遺構の規模は、確認面での長軸長×短軸長、確認面からの最大深を表示した。

目 次

口絵 (カラー)

例言

凡例

目次・挿図目次・表目次・図版目次

I 調査の概要	1～18
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	1
4 調査の概要	2～5
発掘区の設定	2
調査の方法	3
整理の方法	4
土層	4
5 遺物の分類	6～13
(1)土器	6
(2)石器	6
6 遺跡の概要	14
II 遺跡の位置と環境	19～30
1 七飯町の遺跡	19
2 遺跡の位置、周辺の遺跡と歴史的環境	26
3 遺跡周辺の地形と地質の概要	30
III 土塁跡の調査	31～34
IV 縄文時代・統縄文時代の調査	35～79
1 第VI層の調査	35～59
(1)遺構と遺構出土の遺物	35～47
焼土	35
一括出土遺物	36～43
礫出土状況	43
フレイク集中	46
(2)第VI層出土の遺物	48～59
土器	48
石器	53
2 第VIII層の調査	60～65
(1)第VIII層出土の遺物	60～65
土器	60
石器	65
3 第I層～第IV層、第IX層・第X層の調査	66～79

(1)遺構	66
焼土	66
(2)第I層～第IV層出土の遺物	66～79
土器	66
石器	74
遺物一覧表	81
引用、参考文献	87
V まとめ	89～100
1 土塁跡について	89
2 土器等について	96
3 石器等について	98
4 大中山13遺跡の火山灰	99
写真図版	101～125

挿 図 目 次

図 I-1	発掘区設定図	2	図 IV-14	礫出土位置図	44
図 I-2	グリッドの呼称図	3	図 IV-15	礫出土状況 出土の石皿, 台石, 礫	45
図 I-3	発掘区の呼称図	3	図 IV-16	フレイク集中 位置図	46
図 I-4	調査区と周辺の現況図	4	図 IV-17	フレイク集中 出土の石器と 剥片接合資料	47
図 I-5	土層柱状模式図	5	図 IV-18	第VI層出土の遺物分布図	49
図 I-6	発掘区別出土遺物点数	7	図 IV-19	第VI層出土の掲載石器分布図	51
図 I-7	発掘区別出土石器点数(1)	8	図 IV-20	第VI層出土の土器(1)	54
図 I-8	発掘区別出土石器点数(2)と 発掘区別石器器種別点数(1)	9	図 IV-21	第VI層出土の土器(2)	55
図 I-9	発掘区別石器器種別点数(2)	10	図 IV-22	第VI層出土の土器(3)	56
図 I-10	発掘区別石器器種別点数(3)	11	図 IV-23	第VI層出土の掲載石器分布図	57
図 I-11	発掘区別石器器種別点数(4)	12	図 IV-24	第VI層出土の石器	59
図 I-12	発掘区別石器器種別点数(5)	13	図 IV-25	第VII層出土の遺物分布図	61
図 I-13	最終面地形図と遺構位置図	15	図 IV-26	第VII層出土の掲載遺物分布図	63
図 I-14	メインセクション図	17	図 IV-27	第VII層出土の遺物	65
図 II-1	七飯町の遺跡	20	図 IV-28	F-1 実測図	66
図 II-2	七飯町と周辺の遺跡(1)	24	図 IV-29	第I層～第IV層の掲載石器 出土分布図	67
図 II-3	七飯町と周辺の遺跡(2)	25	図 IV-30	第I層～第IV層の掲載石器 出土分布図	69
図 II-4	遺跡の範囲と周辺の地形図	27	図 IV-31	第I層～第IV層出土の土器(1)	72
図 II-5	遺跡周辺の地質	29	図 IV-32	第I層～第IV層出土の土器(2)	73
図 III-1	SP-1 実測図	31	図 IV-33	第I層～第IV層出土の石器(1)	75
図 III-2	土塁跡 実測図	32	図 IV-34	第I層～第IV層出土の石器(2)	76
図 III-3	小トレンチ断面実測図(1)	33	図 IV-35	第I層～第IV層出土の石器(3)	77
図 III-4	小トレンチ断面実測図(2)	34	図 IV-36	第I層～第IV層出土の石器(4)	78
図 IV-1	F-2 実測図	35	図 V-1	開拓使勸業七重試験場全区	90
図 IV-2	一括出土遺物 1 実測図	36	図 V-2	開拓使勸業試験場馬地 桔梗村牧羊場全区	90
図 IV-3	一括出土遺物 1 出土の土器	36	図 V-3	桔梗野牧羊場全区	91
図 IV-4	一括出土遺物 2 実測図	37	図 V-4	明治29年 遺跡周辺の地形図	92
図 IV-5	一括出土遺物 2 出土の遺物	38	図 V-5	昭和20年 遺跡周辺の地形図	93
図 IV-6	一括出土遺物 3 実測図	39	図 V-6	昭和34年 遺跡周辺の地形図	94
図 IV-7	一括出土遺物 3 出土の遺物	40	図 V-7	現況の土塁跡測量図	95
図 IV-8	一括出土遺物 4 実測図(1)	40	図 V-8	各層毎の出土土器の分類別内訳図	97
図 IV-9	一括出土遺物 4 実測図(2)と 出土の土器	41	図 V-9	M-43における火山灰層序	99
図 IV-10	一括出土遺物 5 実測図	41	図 V-10	火山ガラスのスケッチと火山ガラス型	100
図 IV-11	一括出土遺物 5 出土の遺物	42			
図 IV-12	一括出土遺物 6 実測図	42			
図 IV-13	一括出土遺物 6 出土の土器	43			

表 目 次

表II-1 周辺の遺跡一覧(1).....21	表-7 第VI層出土掲載実測土器一覧.....82
表II-1 周辺の遺跡一覧(2).....22	表-8 第VI層出土掲載拓本一覧.....83
表IV-1 遺物集中地区出土掲載石皿等一覧.....44	表-9 第VI層出土掲載石器一覧.....83
表-1 出土遺物一覧.....81	表-10 第VII層出土掲載拓本一覧.....83
表-2 一括出土遺物実測土器一覧.....81	表-11 第VIII層出土掲載石器一覧.....84
表-3 一括出土遺物掲載拓本一覧.....82	表-12 第I~IV層出土掲載実測土器一覧.....84
表-4 一括出土遺物掲載石器一覧.....82	表-13 第I~IV層出土掲載拓本一覧.....84
表-5 遺物集中地区出土掲載石皿等一覧.....82	表-14 第I~IV層出土掲載石器一覧.....85
表-6 フレイク集中出土掲載石器・接合資料等一覧.....82	表V-1 火山灰の鉱物組成100

図版目次

図版1 遺跡遠景と赤松並木103	4. 一括出土遺物2の土器(図IV-5-2)
1. 遺跡遠景(セスナ:北から)	5. 一括出土遺物2の土器(図IV-5-3)
2. 赤松並木(一般国道5号:北西から)	6. 一括出土遺物4の土器(図IV-9)
図版2 遺跡周辺の航空写真105	図版11 第VI層の調査(3)114
図版3 明治初期の緬羊放牧場106	1. 一括出土遺物3の出土状況
1. 桔梗緬羊放牧場の牧帯	2. 一括出土遺物3の土器(IV-7-2)
2. 桔梗緬羊放牧場	3. 一括出土遺物3の遺物
図版4 調査区外の土塁跡107	(図IV-7-3・4)
図版5 調査区内の土塁跡108	図版12 第VI層の調査(4)115
1. 地形測量風景(北東から)	1. 一括出土遺物5の出土状況(南西から)
2. トレンチ調査(南西から)	2. 一括出土遺物5・6の土器
3. 小トレンチ4の土層断面(北から)	(図IV-11-1, 図IV-13-1・2)
図版6 土塁跡全景109	3. 一括出土遺物2(図IV-5-4)・5(図IV-11-2), 第VI層出土の礫石器(図IV-15)
図版7 土塁跡の調査110	図版13 第VI層の調査(5):フレイク集中①116
1. 地形測量風景(北から)	1. 出土状況(南から)
2. SP-1 土層断面(北から)	2. 石鏃(図IV-17-1・2)
3. SP-1 完掘(北から)	3. 剥片・石核接合資料
4. 溝跡確認(北から)	(図IV-17-3・4・5)
5. 溝跡の調査風景(北から)	図版14 第VI層の調査(6):フレイク集中②117
図版8 包含層調査111	出土剥片(図IV-17)
1. 25%調査風景(北西から)	図版15 第VI層出土の遺物(1)118
2. 包含層調査(北から)	図版16 第VI層出土の遺物(2)119
図版9 第VI層の調査(1)112	図版17 第VII層の調査120
1. 調査風景(南から)	1. J-41遺物出土状況(北から)
2. F-2 土層断面	図版18 第I層~第IV層, 第X層の調査121
3. 一括出土遺物1の出土状況①(北東から)	1. F-1 確認(北西から)
4. 一括出土遺物1の出土状況②(北東から)	2. 第I層の調査風景(北から)
5. 一括出土遺物1の土器(図IV-3)	図版19 第I層~第IV層出土遺物(1)122
図版10 第VI層の調査(2)113	図版20 第I層~第IV層出土遺物(2)123
1. 一括出土遺物2の出土状況①(南東から)	図版21 第I層~第IV層出土遺物(3)124
2. 一括出土遺物2の出土状況②(北東から)	図版22 第I層~第IV層出土遺物(4)125
3. 一括出土遺物2の土器(図IV-5-1)	

I 調査の概要

1 調査要項

事業名：一般国道5号函館新道(自専道)工事用地内埋蔵文化財発掘調査
 委託者：北海道開発局函館開発建設部
 受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター
 遺跡名：大中山13道跡(北海道教育委員会登録番号：B-08-24)
 所在地：亀田郡七飯町字大川403ほか
 調査面積：2,850㎡
 調査期間：平成3年4月15日～平成4年3月27日(発掘期間5月10日～8月10日)

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター 理事長 寺山敏保
 専務理事 永田春男
 常務理事 中村福彦(平成3年6月1日から)
 業務部長 伊藤庄吉
 調査部長 森田知忠
 調査第4課 課長 高橋和樹
 主任 和泉田毅(発掘担当者)
 主任 熊谷仁志
 文化財保護専事 森岡健治

3 調査にいたる経緯

大沼トンネルをくぐり抜け、左に大きくカーブしつつ峠を下ると眼前に函館平野が広がってくる。七飯町峠下に入ると一般国道5号はほぼ直線道路となり、その沿道には腰を折り曲げたような赤松が立ち並んでいる。赤松、その樹間に見え隠れする青々とした海、そして点在する瓦屋根を目にする時、一瞬、一足飛びに海を渡ってしまったのではないかという錯覚にとらわれる。道南を代表する名所の一つ“赤松街道”である。

1872(明治5)年、北海道の開発推進のため、その根幹路線として道路工事が開始され、同年10月亀田から峠下を経て森までの新道が開通した。現一般国道5号である。この沿道に赤松が植樹されたのは1876(明治9)年であると伝えられている。1876年10月、明治天皇が当地を巡行したのを記念して、開拓使が同年から翌年にかけて植樹したものであるという。現在、この赤松は一般国道5号のうち函館市桔梗町～七飯町峠下間約13kmの沿道に約1,400本あり、この地を訪れる多くの人びとの目を和ませてくれている。この赤松並木は1972(昭和47)年、北海道自然保護条例に基づく環境緑地保護地区に指定され、保護されるようになっている。しかしながら環境の変化が著しく、損傷、立ち枯れが目立ちはじめている。これは交通量の増加によって引き起こされる環境破壊が最大の要因であると指摘されている。

一般国道5号は札幌と函館を結ぶ主要幹線道路の一つであり、また道南、函館圏の道路網の中で重要な位置を占めている。ところが函館市北部から七飯町峠下にかけては有効な代替道がなく、車社会

の急激な進行により、その交通容量をはるかに凌ぐ状態となっている。その結果、交通渋滞と環境の悪化は目に余る状況となっていると言えよう。

一般国道5号の交通量は著しく増しており、交通容量(8000台/日)を大巾に上回っている。交通量は1980(昭和55)年10,270台、1985(昭和60)年11,540台、1990(平成2)年14,580台、と急増している。これは交通渋滞の慢性化(混雑度1.5前後)をもたらし、急増する排気ガスの影響により、1972(昭和47)年には1,711本あった赤松は、1974(昭和49)年には1,525本、1985(昭和60)年には、1,408本と減少している(北海道開発局函館開発建設部作成「函館新道整備効果(事前)の事例紹介」による)。

このような状況の中で1980年代初めに北海道開発局函館開発建設部(以下「函館開建」と記す)は、一般国道5号の交通渋滞の緩和、歴史的赤松並木の保存、道路・交通環境の改善、更に観光交通の増加、函館圏の生活領域の拡大という巨視的な面からの道路整備を目的に函館新道の建設を計画し、1982(昭和57)年、具体的な施工に着手した。ところが藤沢川流域とその周辺に桔梗遺跡、大中山遺跡などが近接しており、埋蔵文化財包蔵地の所在が予想されることから、1983(昭和58)年以降北海道教育委員会(以下「道教委」と記す)との間でその取り扱いについて協議が行われた。この協議を受けて道教委は、1990(平成2)年10月、範囲確認調査を行った。その結果大中山13遺跡は発掘調査が必要であるとの結論が出された。本遺跡は1991(平成3)年年度に発掘調査が実施されたものである。なお町道大川1号線の東側については、用地問題未解決のため、範囲確認調査がおこなわれていない部分もあり、調査は行われなかった。

函館新道改良工事に伴い、函館市内の工事区域では1985(昭和60)年から1987(昭和62)年には石川1遺跡、1987年には桔梗2遺跡の発掘調査が当センターによって実施されている。

4 調査の概要

発掘区の設定 発掘区は、アルファベットの大字と数字の組み合わせで表示し、5m×5m規格の基準グリッドを設定した。設定の基準は、道路予定路線内の中心線SP-4800、SP-4900を結ぶ直線を南北の基準線とし(Mライン)、その線に直交しSP-4800を通る直線を東西の基準線(44ライ

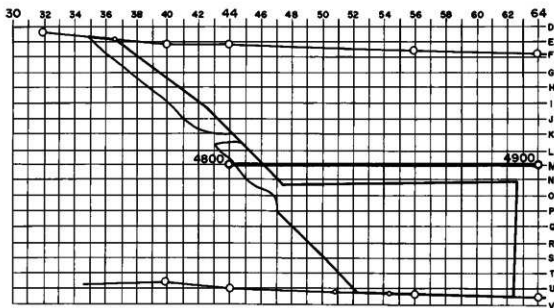


図 I-1 発掘区設定図

ン)とする。また予定路線内の遺跡が西側に広がっていることから、それを包括できるように、Mラインの延長線上で、44ラインより西側へ70mの地点を30ラインとした。なおSP-4800, SP-4900の測量成果は下記のとおりである。

SP-4800 X=-237,923.355m Y=40,543.036m

SP-4900 X=-237,841.749m Y=40,485.240m

(平面直角座標第XI系)

発掘区の呼称は、5mグリッドの南東隅、南北と東西ラインの交点で表示した。例えばMラインと44ラインの交点の北西側がM-44グリッドということになる。

また地形測量、各遺構、遺物取り上げの標高の測定にあたっては、本遺跡のほぼ西方1kmの七飯町字大川11番地に位置する一等水準点7077(H=36.788m)を利用した。

調査の方法 事務所棟、作業員棟の設置場所(プレハブを調査区の北西側に設置したため、調査区内に通路を設けなければならなくなった)と排土場所確保の都合上、次のような3地区に分けて調査を行った。Qラインより北側をA地区、N~Qライン間をB地区、Nラインより南側の町道部分を土塁地区とする。

A地区は、全体の25%を掘開したのち、遺物が多く出土した区域から順次包含層調査を実施した。B地区は、通路用の敷鉄板を移設した後、包含層調査を行った。なおN~Pラインの耕作土は重機で除去し、遺構確認調査を行った。調査は包含層調査(漸移層および地山直上まで耕作によって削平・攪乱されている部分が多かった)、遺構調査、旧石器確認調査の手順で進めた。土塁地区は現土盛部分の地形測量の後、4か所にトレンチを設定し、その断面観察から土塁の有無などを確認した。表土等を重機で除去し、土塁跡検出作業を行った。写真撮影、平面実測等を行った後、土塁跡の調査、包

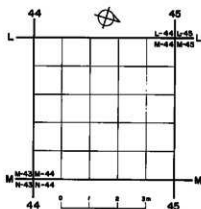


図 I-2 グリッドの呼称図

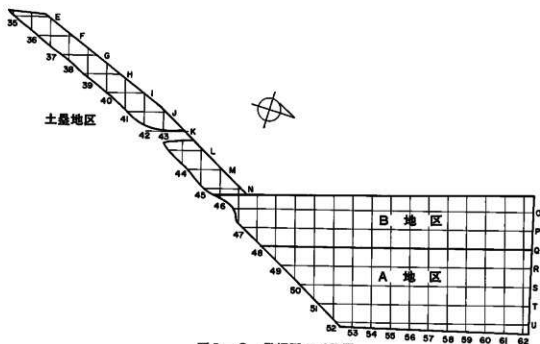


図 I-3 発掘区の呼称図

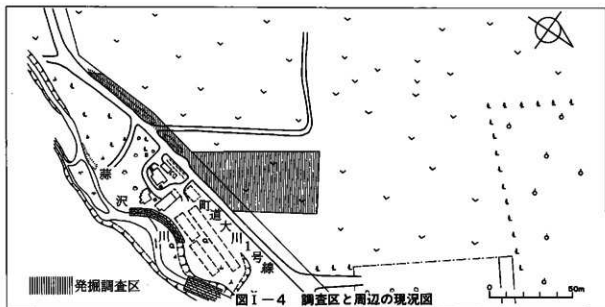


図 I-4 調査区と周辺の現況図

合層調査を行った。第Ⅰ層～第Ⅴ層の遺物は、5m×5mの発掘区の単位で取り上げた。また第Ⅵ層～第Ⅷ層の出土遺物は、基本的にすべて5m×5mの発掘区内での座標値(北と西からの距離とレベル)を記録し、発掘区グリッド単位で遺物番号を付けて取り上げた。しかし微小な破片などについては発掘区グリッド単位で取り上げ、更に剣片、破片の集中部分については土壌ごと取り上げて、水洗処理を行った。

整理の方法 出土した遺物の水洗、注記作業は、発掘調査と並行して現地で行った。小片あるいは微細なものを除いて、遺跡名、発掘区、遺物番号、土層を注記している。更に遺物の分類を行うとともに、遺物台帳を作成し、遺物出土分布図も作成する。遺物の接合、復元、実測、製図、遺物集計およびその他の記録類の整理は札幌のセンターで行った。

遺物は、遺構別、発掘区別、分類別にプラスチックコンテナ(縦59cm 横39cm 深さ9cm・15cm・25cmの3種類)に納め、遺物収納台帳、遺物台帳等の諸記録とともに保管される。なお遺物および諸記録類は道教委の指示により、七飯町教育委員会において保管される。

土層 土塁地区以外は、畑の耕作によって深く削平・攪乱されており、基本的な土層関係は確認できなかった。土塁地区は遺物包含層の堆積状態は良好であり、これを検討し、更に道教委の試掘調査の成果をも加味し、以下のように遺跡の土層および層厚などを整理した。

第Ⅰ層 表土・盛土・耕作土：盛土は土塁地区で見られ、層厚は50cm～90cmである。耕作土は

A、B地区全域にわたっており、層厚は30cm～50cmである。

第Ⅱ層 黒色腐植土：土塁地区で若干確認されている。黒ボク状のものである。上方が削平されており、層厚ははっきりしない。

第Ⅲ層 灰白色火山灰：極細粒砂質降下火山灰。長石と重鉱物を含まない火山ガラスからなる灰白色火山灰で、七飯-函館近辺では「ko-d」とされているものである。層厚は3cm～5cmだが、面的な広がりはなく、斑点状に堆積している。

第Ⅳ層 暗褐色土層：砂質状のもので、第Ⅲ層下の2cm～3cmは黒褐色を呈している部分が認められる。層厚10cm～14cmである。

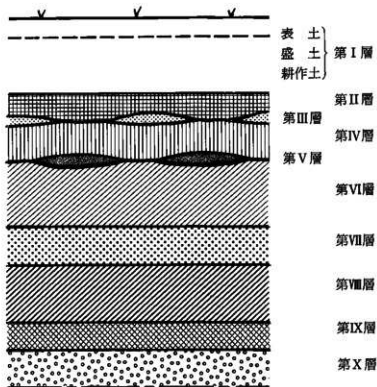


図 I-5 土層柱状模式図

- 第V層 黄橙色火山灰：細粒シルト質降下火山灰。重鉱物をほとんど含まず、火山ガラスがきわめて多く含む黄色の火山灰で、「白頭山-苦小牧火山灰」(B-Tm)に對比されるものである。七飯-函館近辺では「Ko-e」とされるものであろう。層厚は5cm~10cmで、面的な広がりは認められない。
- 第VI層 黒褐色土層：全体に粘質土であるが、上層はややボロボロした感じの土である。層厚は10cm~20cmである。縄文時代早期、前期、後期、続縄文時代の遺物包含層である。
- 第VII層 暗黄茶色土層：粘土質砂で、砂大の結晶単粒から細礫大の岩片まで含んでいる。比較的粗粒な岩片には粒子が円磨されているものがあり、第X層の二次堆積物、あるいは河川の溢流による水成堆積物と考えられる。層厚は15cm~20cmである。
- 第VIII層 黒茶色土層：やや粘質味を帯びている。層厚は20cm前後である。縄文時代早期の遺物包含層である。
- 第IX層 暗黄褐色土層：漸移層。層厚は5cm~10cmである。
- 第X層 暗黄色ローム層：粘土質で大小様々な礫を多量に混入している。

5 遺物の分類

今回の調査で9,662点の遺物が出土している。その内訳は土器等4,720点、石器等4,942点である。遺物には縄文時代、統縄文時代、近・現代のものがある。このほかに自然遺物として獣骨片が少量出土している。

なお、近・現代のものは、陶磁器・鉄器・古銭等がある。これらは明治期から昭和期のもので、主に土庫地区の盛土中と第Ⅰ層から出土している。これらについては分類記号を与えず個別に記載した。

(1) 土器

土器は4,551点出土している。土器には縄文時代・統縄文時代のものがある。便宜的に縄文時代早期をⅠ群、前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、統縄文時代をⅤ群とし、二・三の類を設け記載する。

Ⅰ群土器 早期末葉の土器で、薄手で羽状捺糸文や自縄自巻的な原体による羽状縄文を主要文様要素とするもの。東剣路Ⅳ式に比定される。

Ⅱ群土器 前期末葉の円筒土器下層d式に相当する。体部に単軸捺糸回転文が施されている。

Ⅲ群土器 中期中葉の土器群で、体部に斜行縄文・沈線文が施され、覆林式に比定されるものと思われる。

Ⅳ群土器 後期の土器群で、前葉と後葉のものがあり、a類とb類に分けられる。

a類 前葉のもので、余市式、涌元式(ニセコ式)、トリサキ式、大津式等がある。

b類 後葉のもので、堂林式がある。

Ⅴ群 統縄文時代前期の恵山式土器である。瀬棚町南川遺跡Ⅲ群土器と南川遺跡Ⅳ群土器に相当する。

(2) 石器

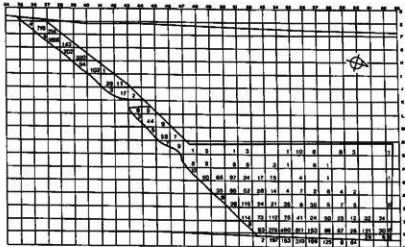
石器等は4,942点出土した。このうち剥片石器の器種は石鏃、石槍、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー、楔形石器があり、礫石器では石斧、たたき石、くぼみ石、すり石、台石、石皿、砥石がある。それ以外には、石核、Uフレイク、Rフレイク、フレイク・チップ、礫・礫片が出土した。しかし、全体の約90%はフレイク・チップであったため、本書では特に分類記号を設けず、先に記した器種名を用いて本文中で形態的特徴などを記載する。ただし礫・礫片のうち、石器とは断定できないが礫石器片と思われるものや円礫およびその破片については、「礫△」で表示し、通常の礫・礫片とは分離した。

石材に関しても略字を使用せず、以下の石材名で表示した。

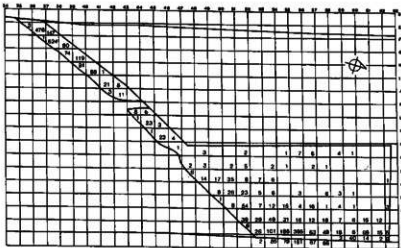
めのう・めのう質頁岩・珪質頁岩・硬質頁岩

安山岩・砂岩・緑色泥岩

包含層遺物総計
 包含層 8,427点
 一括集中 564点
 トレンチ 26点
 表 採 645点
 計 9,622点

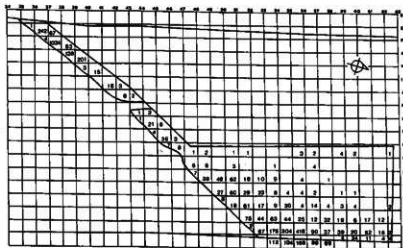


包含層石器等総計
 包含層 3,831点
 一括集中 542点
 トレンチ 18点
 表 採 329点
 計 4,720点



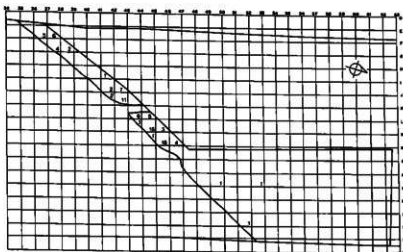
凡例
 □ 2 (点)

包含層石器等総計
 包含層 4,596点
 一括集中 22点
 トレンチ 9点
 表 採 316点
 計 4,942点



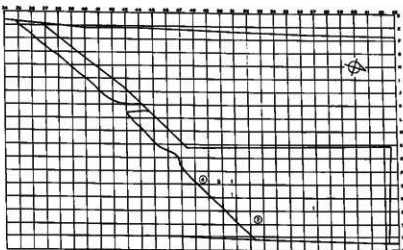
図I-6 発掘区別出土遺物点数

I 群土器
 第 I ~ IV 層 25 点
 第 IV 層 15 点
 第 VII 層 58 点
 計 97 点



II 群土器
 第 I ~ IV 層 10 点
 計 10 点

III B (○印)
 第 I ~ IV 層 6 点
 計 6 点



凡 例

□ 2 (点)

IV 群土器
 第 I ~ IV 層 166 点
 第 IV 層 61 点
 第 VII 層 5 点
 計 398 点

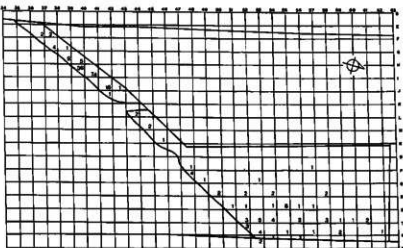
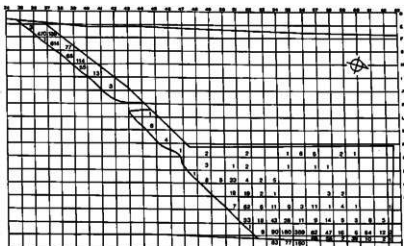
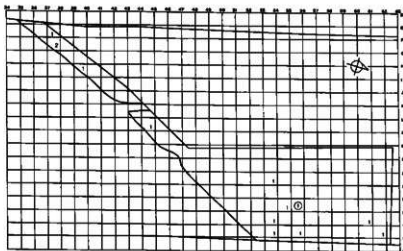


图 I - 7 発掘区別出土土器点数(1)


V群土器
 第I～IV層 3,274点
 第IV層 392点
 第VII層 3点
 一括集中 542点
 計 4,211点

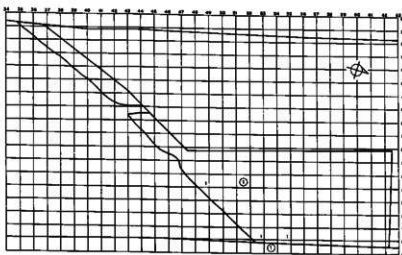


石鏃
 包含層 12点
 計 12点
 石鏃(○印)
 包含層 1点
 計 1点



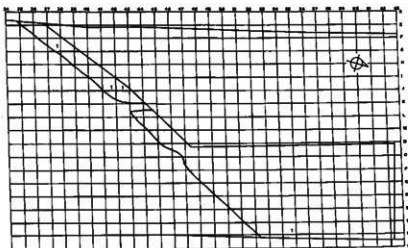
凡例

 (点)
 石鏃
 包含層 3点
 表採 1点
 計 4点
 楔形石器(○印)
 包含層 2点
 計 2点

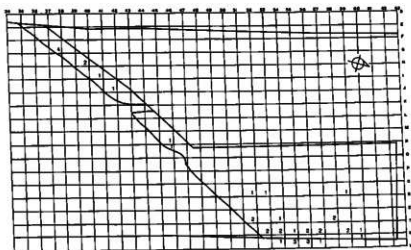


図I-8 発掘区別出土土器点数(2)と発掘区別石器器種別点数(1)

つまみ付ナイフ
 包含層 4点
 計 4点



スクレイパー
 包含層 38点
 一括集中 5点
 表採 1点
 計 44点



凡例

□ 2 (点)

石核 70点
 包含層 18点
 表採 88点

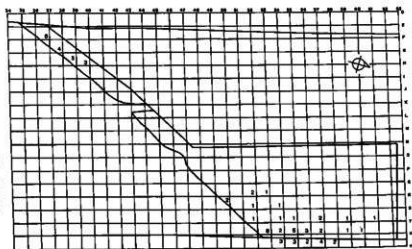
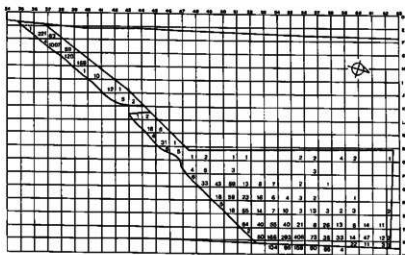
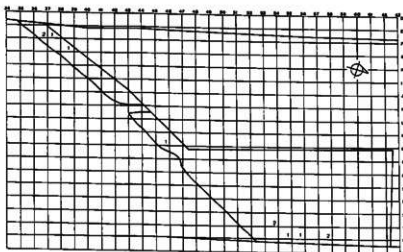


図 I - 9 発掘区別石器器種別点数(2)

フレイク・チップ
 包含層 4,191点
 一括集中 16点
 トレンチ 7点
 表探 16点
 計 4,470点



Rフレイク
 包含層 11点
 表探 5点
 計 16点



凡例

2 (点)

Uフレイク

包含層 56点
 表探 5点
 計 61点

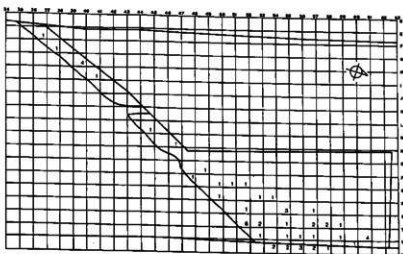


図 I-10 発掘区別石器器種別点数(3)

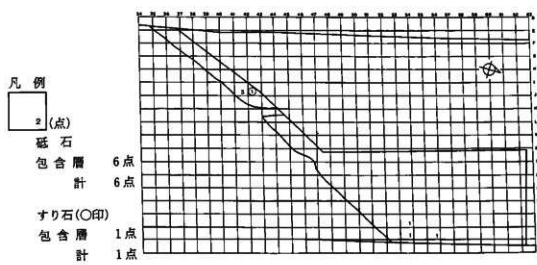
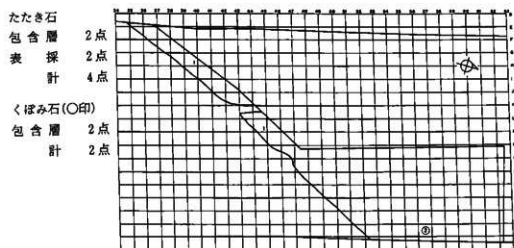
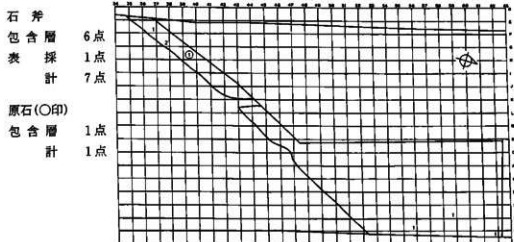


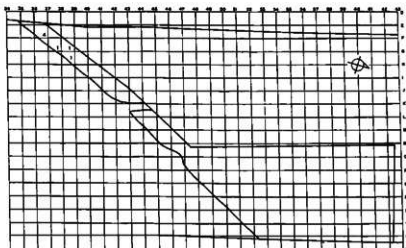
図 I-11 発掘区別石器器種別点数(4)

石皿・台石

包含層 5点

一括集中 2点

計 7点



礫△

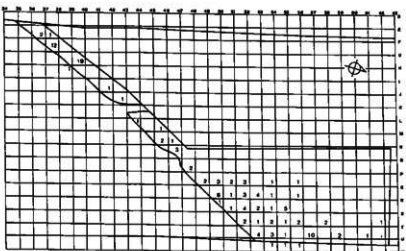
包含層 125点

一括集中 2点

トレンチ 1点

表採 21点

計 149点



凡例



2 (点)

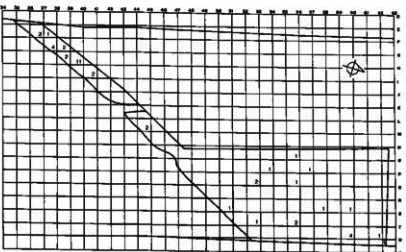
礫・礫片

包含層 45点

一括集中 1点

表採 2点

計 48点



図I-12 発掘区別石器器種別点数(5)

6 遺跡の概要

検出された遺構は、図1-13に示したとおり、焼土2か所と土塁跡である。焼土は検出面、周辺からの出土遺物などから考えて縄文時代(恵山式土器期)のものと思われる。土塁跡は、1975(明治8)年に来道した米国人エドウィン・ダンが羊牧場を開設し、牧棚を巡らした時に構築したものとされている。今回の発掘調査で確認されたものは、位置、規模、方向、更に歴史資料などから考えて、ほぼその一部に該当するものと思われる。

このほかに、第VI層上層から一括出土の遺物が6か所、礫出土が6か所、フレイク集中が1か所検出されている。出土層位、出土遺物から見て縄文時代(恵山式土器期)のものである。

出土遺物総数は9,662点(表採645点を含む)で、その内訳は土器など4,720点、石器など4,942点である。

土器の時期別総数は、縄文時代早期98点、同前期10点、同中期6点、同後期226点、縄文時代4,211点、その他(陶器類)169点である。縄文時代の土器が全体の約89%を占め、圧倒的に多い。土層の項で触れたように、第VI層が縄文時代早期、前期、後期、縄文時代の遺物包含層である。基本的に同層上面～上層中から縄文時代の遺物が出土しており、同層中～下層から縄文時代後期、前期、早期の遺物が出土している。ただ盛土中から縄文時代中期の土器片が出土しているけれども、本来第VI層に包含されていたものと思われる。なお調査時に第IV層出土遺物として取り上げているが、これは第V層(黄褐色火山灰)が第VI層上全体に堆積していなかったため、調査担当者の誤認によるものである。また第VII層出土として取り上げた遺物は、第VII層が水成二次堆積であるとする、流移による二次堆積のものと考えられる。なお第VII層出土として取り上げた遺物については、表では第VI層出土の遺物として表示してある。遺物説明では、第VII層上層出土の遺物は第VI層の項で、第VII層下層出土の遺物は第VII層の項で取り扱っている。

出土した土器の大半は縄文時代の恵山式土器であるが、ほかに縄文時代早期の東刺路IV式土器、同前期の円筒土器下層式土器、同中期の榎林式土器、同後期のトリサキ式土器、入江式土器、堂林式土器などが出土している。

石器は石鏃、石槍、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー、楔形石器、石核、石斧、たたき石、くぼみ石、すり石、砥石、石皿、台石などが出土している。剥片石器のほとんどが、めのう、めのう質頁岩、硬質頁岩で、同質の石核も多数出土している。

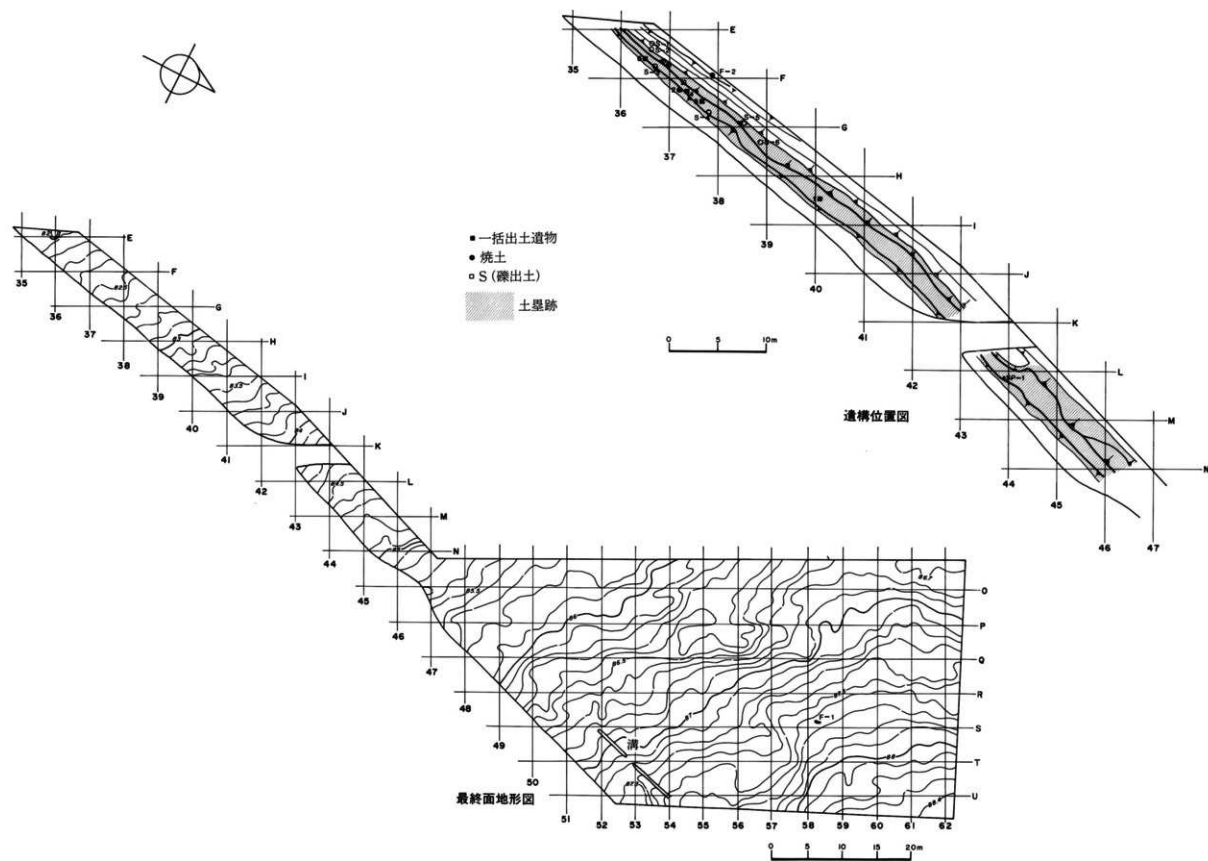


図 I-13 最終面地形図と遺構位置図

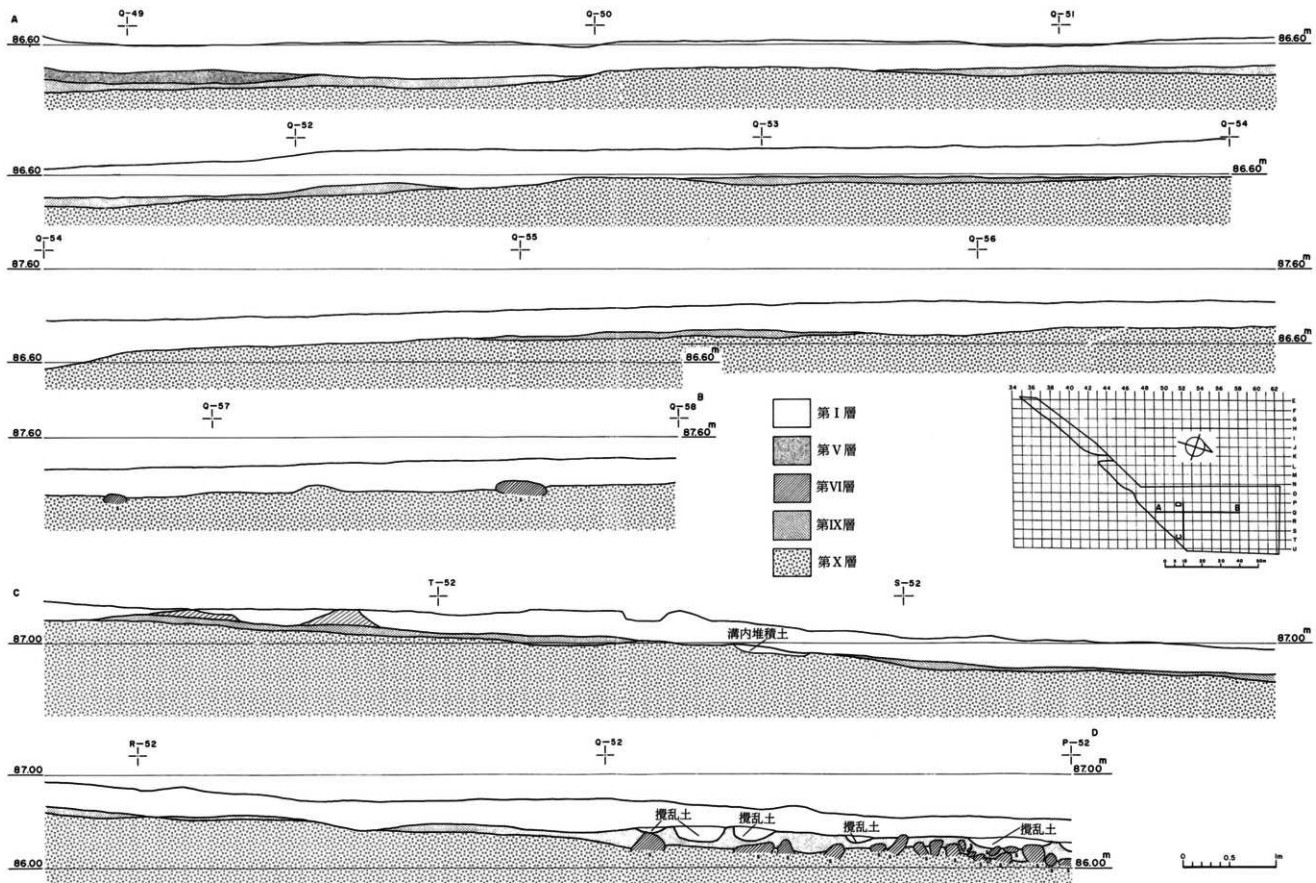


図1-14 メインセクション図

II 遺跡の位置と環境

1 七飯町の遺跡

道教委作成の埋蔵文化財分布図によれば、七飯町には本遺跡を含めて68か所の遺物包含地などの遺跡が記載されている。遺跡は、函館平野と横津岳山系山岳地域の間約2kmにわたって緩斜面(標高15m~140m)をなす台地状地形上と、峠下の鞍部で隔てられる大沼、小沼、菓菜沼等の湖沼地域(標高130m~140m)の小沼西岸に広がっている。後者には縄文時代中期の遺跡が4か所知られている。なお小沼2遺跡では縄文時代後期、晩期の遺物も採集されているが、現在は沼底部になっており、湧水時のみ確認が可能であるという。七飯町の遺跡の大半(64か所)は前者に立地している。とくに台地を解析し、北東から南西に流れ、平野部を流れる久根別川に合流する小河川(南から蒜沢川、大川、武佐川、湯出川、長方川)の兩岸や合流点付近などに遺跡のまとまりが見られる。以下時期別に概観する。

縄文時代早期の遺跡は5か所記載されている。これらは標高50m~60m(大中山8・上藤城3遺跡)と標高130m付近(鳴川1・武佐川・上藤城1遺跡)の小河川の縁辺と扇状地上に立地している。大中山8遺跡は縄文時代早期の梁川町式と呼称される土器が出土している。また縄文時代晩期、統縄文時代の遺物も出土している。武佐川遺跡は縄文時代後期、晩期、統縄文時代、鳴川1・上藤城3遺跡は統縄文時代との複合遺跡である。なお本遺跡でも縄文時代早期の東銘路IV式土器が出土している。また本年度(平成3年)、道教委によって実施された国立療養所裏遺跡(標高130m、鳴川左岸扇状地上)の試掘調査で縄文時代早期の貝殻尖底式土器が出土している。七飯町における縄文時代早期の遺跡は概して小河川の兩岸、扇状地の高位置に立地すると言えるだろう。

縄文時代前期の遺跡は2か所記載されている。藤城7遺跡は標高120mの緩斜面上にあり、周辺には縄文時代中期、晩期、統縄文時代の遺跡がある。七飯本町2遺跡は鳴川と久根別川が合流する標高41mの扇状地上にある。1985(昭和60)年に七飯町教育委員会(以下「七飯町教委」とする)により発掘調査が実施され、縄文時代のものと思われる焼土跡が1か所検出され、縄文時代中期、後期の遺物も出土している(石本 1986)。

縄文時代中期の遺跡は27か所記載されている。これらのほとんどは標高130mの高位置にある(ただ聖山・峠下・七飯本町1遺跡は標高30m~80mの低位置にある)。小沼西岸付近の4遺跡(古小沼・大沼学院・古小沼2・小沼遺跡は標高130m~140mの高位置にある)と前記の低位置に立地する遺跡以外は、横津岳山大系山麓の標高100m~130mの緩斜面台地上で、蒜沢川、大川、武佐川、湯出川、長方川などの小河川の兩岸や扇状地上に立地している。峠下遺跡は1979(昭和54)年、七飯町教委によって発掘調査が実施され、縄文時代中期の竪穴住居跡10軒と土塊、焼土が発見されている。また縄文時代中葉から後期前葉にかけての遺物も出土している(高橋ほか 1979)。七飯本町1遺跡は1985(昭和60)年、七飯町教委によって発掘調査が実施され、縄文時代中期から後期にかけての竪穴住居跡18軒と竪穴状遺構、土塊、焼土などが発見されている(石本 1986)。上藤城7遺跡は1990(平成2)年、七飯町教委によって発掘調査が実施され、縄文時代中期後半の竪穴住居跡7軒と土塊、焼土が発見されている。また縄文時代前期末葉から中期にかけての遺物と縄文時代後期初頭の遺物も出土している(石本 1991)。桜町2遺跡は縄文時代後期、大中山19・23遺跡は縄文時代晩期、古小沼2遺跡は縄文時代後期、晩期、大中山11・13・24遺跡は統縄文時代の遺物もそれぞれ出土している。

縄文時代後期の遺跡は7か所記載されている。標高80m前後に位置するもの(聖山・峠下・藤城



図II-1 七領町の遺跡 (この地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「大沼公園」を利用したものである。)

№	名 称	登録番号	所 在 地	時 代
1	大中山3遺跡	B-08-1	亀田郡七飯町字大川343,346,347	縄文(晩期)
2	上久根別遺跡	B-08-2	亀田郡七飯町字峠下 ^{124-1・2, 425, 426-1・2, 427-1・2, 128, 443, 1-4, 445-1-3,}	
3	大中山6遺跡	B-08-3	亀田郡七飯町字大川415,416	縄文(中期)
4	藤城1遺跡	B-08-4	亀田郡七飯町字藤城486	縄文(中期)
5	大中山8遺跡	B-08-5	亀田郡七飯町字大川245	縄文(早・晩期)続縄文(恵山式)
6	大中山9遺跡	B-08-6	亀田郡七飯町字中野203,204,205-1・3・4,	縄文(晩期)
7	大中山10遺跡	B-08-7	亀田郡七飯町字中島 ^{12-1-3, 13-1・2, 14-1・2, 15, 16, 17-1・7-11}	縄文(晩期)
8	聖山遺跡	B-08-8	亀田郡七飯町字峠下 ^{480-2, 483, 485, 496, 700, 701, 703, 704, 705, 706, 707, 708, 709}	縄文(中・後・晩期)続縄文(恵山式)
9	長万川遺跡	B-08-9	亀田郡七飯町字峠下713-2,	続縄文(恵山式)
10	大中山5遺跡	B-08-10	亀田郡七飯町字大中山316,	続縄文(恵山式)
11	大中山4遺跡	B-08-11	亀田郡七飯町字中野8-1,	縄文(晩期)
12	大中山7遺跡	B-08-12	亀田郡七飯町字大中山846,	縄文(中期)
13	武佐川遺跡	B-08-13	亀田郡七飯町字大中山809,812	縄文(早・後・晩期)続縄文(恵山式)
14	大中山1道跡	B-08-14	亀田郡七飯町字大中山804,	縄文(中期)
15	古小沼遺跡	B-08-15	亀田郡七飯町字西大沼 河川敷	縄文(中期)
16	国立療養所浜遺跡	B-08-16	亀田郡七飯町字本町683	縄文(早・中期)
17	大沼学苑遺跡	B-08-17	亀田郡七飯町字西大沼8-1,	縄文(中期)
18	桜町遺跡	B-08-18	亀田郡七飯町字桜町513,514,683,	続縄文(恵山式・江別式)
19	鳴川1遺跡	B-08-19	亀田郡七飯町字鳴川265,349,	縄文(早期)続縄文(恵山式)
20	峠下遺跡	B-08-20	亀田郡七飯町字峠下225	縄文(中・後・晩期)
21	七飯台場跡	B-08-21	亀田郡七飯町字峠下 国有林内	
22	大中山11遺跡	B-08-22	亀田郡七飯町字大川421	縄文(中期)続縄文(恵山式)
23	大中山12遺跡	B-08-23	亀田郡七飯町字大川421	縄文(中期)
24	大中山13遺跡	B-08-24	亀田郡七飯町字大川403,405~407,409,410,413,418,	縄文(早・前・中・後期)続縄文(恵山式)
25	大中山14遺跡	B-08-25	亀田郡七飯町字大川273,275,	縄文 続縄文(恵山式)
26	大中山15遺跡	B-08-26	亀田郡七飯町字大川272,273,275,	縄文 続文
27	大中山16遺跡	B-08-27	亀田郡七飯町字大川269,271,275,	縄文
28	大中山17遺跡	B-08-28	亀田郡七飯町字大川375,	続縄文(恵山式)
29	大中山18遺跡	B-08-29	亀田郡七飯町字大川363,	縄文(晩期)
30	大中山19遺跡	B-08-30	亀田郡七飯町字大川355,	縄文(中・後期)
31	大中山20遺跡	B-08-31	亀田郡七飯町字大川338,	縄文(晩期)
32	大中山21遺跡	B-08-32	亀田郡七飯町字大川429,430,	続縄文
33	大中山22遺跡	B-08-33	亀田郡七飯町字大中山738,	縄文(晩期)
34	大中山23遺跡	B-08-34	亀田郡七飯町字大中山736,764,	縄文(中期・晩期)
35	大中山24遺跡	B-08-35	亀田郡七飯町字大中山684~687,694,701,	縄文(中期)続縄文(江別式)
36	大中山25遺跡	B-08-36	亀田郡七飯町字大中山679,680,683,	縄文(中・晩期)
37	鳴川2遺跡	B-08-37	亀田郡七飯町字本町683,	続縄文(恵山式)
38	桜町2遺跡	B-08-38	亀田郡七飯町字桜町685,	縄文(中期)
39	桜町3遺跡	B-08-39	亀田郡七飯町字桜町686,	縄文
40	上藤城遺跡	B-08-40	亀田郡七飯町字上藤城366-3,	縄文(早期)
41	上藤城2遺跡	B-08-41	亀田郡七飯町字藤城519,520,523,524,527,	縄文(晩期)
42	上藤城3遺跡	B-08-42	亀田郡七飯町字上藤城276,277,	縄文(早期)続縄文(恵山式・江別式)
43	上藤城4遺跡	B-08-43	亀田郡七飯町字上藤城381,382,	続縄文(江別式)
44	上藤城5遺跡	B-08-44	亀田郡七飯町字上藤城158,267,	続縄文(恵山式)
45	藤城2遺跡	B-08-45	亀田郡七飯町字上藤城414,	縄文
46	藤城3遺跡	B-08-46	亀田郡七飯町字上藤城414,	続縄文(江別式)
47	藤城4遺跡	B-08-47	亀田郡七飯町字藤城406,	続縄文(恵山式)

表II-1 周辺の遺跡一覧(1)

No	名 称	登録番号	所 在 地	時 代
48	藤城 5 遺跡	B-08-48	亀田郡七飯町字藤城414, 415,	統縄文(恵山式)
49	藤城 6 遺跡	B-08-49	亀田郡七飯町字藤城479, 480,	縄文(中期)
50	藤城 7 遺跡	B-08-50	亀田郡七飯町字上藤城424, 428-1, 429,	縄文(前期)
51	藤城 8 遺跡	B-08-51	亀田郡七飯町字藤城452, 453, 467, 469, 489,	縄文(後・晩期)
52	大中山 26 遺跡	B-08-52	亀田郡七飯町字大中山711, 712, 714,	縄文(中・晩期)
53	七飯本町 1 遺跡	B-08-53	亀田郡七飯町字本町159,	縄文(中期)
54	緑町 1 遺跡	B-08-54	亀田郡七飯町字緑町129, 166,	縄文(晩期)
55	藤城 9 遺跡	B-08-55	亀田郡七飯町字藤城487, 489, 492,	縄文
56	鳴川 3 遺跡	B-08-56	亀田郡七飯町字鳴川341-1~4, 342-1~4, 348-1,	統縄文(恵山式)
57	大中山 27 遺跡	B-08-57	亀田郡七飯町字中野117, 118-1~5, 119-1~4,	統縄文(恵山式)
58	緑町 2 遺跡	B-08-58	亀田郡七飯町字緑町244-1~2, 247-2・7・9・11・16・17	
59	古小沼 2 遺跡	B-08-59	亀田郡七飯町字西大沼 河川敷	縄文(中・後・晩期)
60	小沼 遺跡	B-08-60	亀田郡七飯町字西大沼 国有林内	縄文(中期)
61	七飯本町 2 遺跡	B-08-61	亀田郡七飯町字本町168-1, 169, 170,	縄文(前期)
62	上藤城 6 遺跡	B-08-62	亀田郡七飯町字上藤城427-4,	縄文(中期)
63	古峠 1 遺跡	B-08-63	亀田郡七飯町字峠下714, 715, 716-1・4,	縄文(中期)
64	古峠 2 遺跡	B-08-64	亀田郡七飯町字峠下743, 746, 747, 748-1,	縄文(中期)
65	古峠 炭窯跡	B-08-65	亀田郡七飯町字峠下753	近代
66	峠下土塁跡	B-08-66	亀田郡七飯町字峠下631-2, 632, 638, 639-1・2,	近代
67	上軍川 1 遺跡	B-08-67	亀田郡七飯町字上軍川1109, 1110, 1112, 1125, 1095,	縄文(中期)
68	上藤城 7 遺跡	B-08-68	亀田郡七飯町字上藤城428-1,	縄文(中期)
69	桔梗 6 遺跡	B-01-114	函館市桔梗町440-14・15・31,	縄文
70	桔梗 5 遺跡	B-01-113	函館市桔梗町528-1,	縄文
71	桔梗 4 遺跡	B-01-112	函館市桔梗町435-130・131・62,	縄文(早・晩期)統縄文
72	桔梗 1 遺跡	B-01-105	函館市桔梗町44の1,	縄文(中期)
73	西桔梗 N-6 遺跡	B-01-90	函館市西桔梗町39-3, 41-1,	統縄文
74	サイベ沢 B 遺跡	B-01-85	函館市西桔梗町614, 640-1・2,	縄文(前・中期)
75	サイベ沢 C 遺跡	B-01-100	函館市西桔梗町615-1ほか	統縄文(恵山式)
76	西桔梗 N-3 遺跡	B-01-88	函館市西桔梗町622ほか	縄文(早・晩期)
77	西桔梗 N-2 遺跡	B-01-87	函館市西桔梗町503-1ほか	縄文(早・前・中期)
78	西桔梗 N-1 遺跡	B-01-86	函館市西桔梗町246-24ほか	縄文(早・前・中期)
79	西桔梗 A 遺跡	B-01-92	函館市西桔梗町607-1・7・12ほか	縄文(早・前期)
80	西桔梗 F 遺跡	B-01-99	函館市西桔梗町607-12,	縄文(中期)
81	西桔梗 B2 遺跡	B-01-94	函館市西桔梗町598-4・6・9,	統縄文(恵山式)
82	西桔梗 B1 遺跡	B-01-93	函館市西桔梗町604-6・9, 605-7・8・9,	縄文(前・中期)
83	西桔梗 E1 遺跡	B-01-97	函館市西桔梗町598-13・14・18・19・35,	縄文(早・前・中・晩期)
84	西桔梗 E2 遺跡	B-01-98	函館市西桔梗町598-19,	縄文(中・晩期)統縄文(恵山式)
85	西桔梗 C 遺跡	B-01-95	函館市西桔梗町597-1・2・5,	縄文(中・後期)
86	西桔梗 N-7 遺跡	B-01-91	函館市西桔梗町10-3,	室町中期
87	西桔梗 D 遺跡	B-01-96	函館市西桔梗町10-2,	縄文(中・後・晩期)続文
88	石川野 遺跡	B-01-84	函館市西桔梗町555-8・9, 558, 559, 563, 567, 574, 575,	縄文(早・前期)
89	西桔梗 N-5 遺跡	B-01-89	函館市西桔梗町36-1,	縄文(晩期)
90	桔梗 2 遺跡	B-01-110	函館市桔梗町408-6,	旧石器 縄文(早~晩期)統縄文
91	石川 1 遺跡	B-01-109	函館市石川町172-2, 169-8,	旧石器 縄文(早~晩期)統縄文
92	桔梗 3 遺跡	B-01-111	函館市桔梗町418-16・17・35	縄文(中期)
93	サイベ沢 遺跡	B-01-82	函館市桔梗町149, 150-1・2・6, 函館市西桔梗町26-1・3・4・5・6・27, 610-27~24-38, 611-3-3-6-16,	縄文(前・中期)

表II-2 周辺の遺跡一覧(2)

8・桜町2遺跡)と標高130m付近に位置するもの(武佐川・古小沼2遺跡)がある。長万川・鳴川・武佐川付近の段丘上および扇状地上に立地している。ほぼ七飯町の北西部に広がっている。

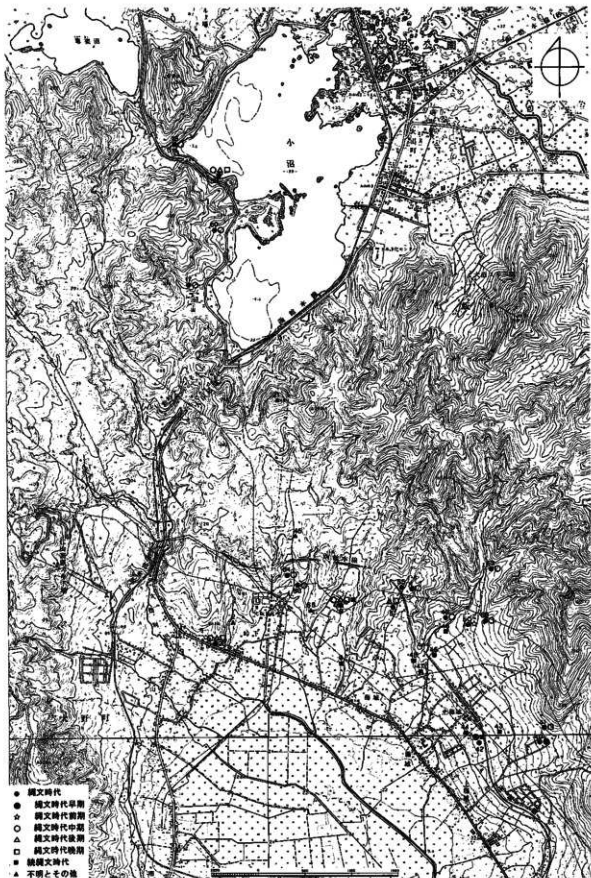
縄文時代晩期の遺跡は18か所記載されている。これらは藤沢川、大川、湯出川の流域および藤城付近の藤城扇状地上にあり、標高25mから170mまでの広範囲に立地している。ほぼ七飯町の南東部に広がっている。聖山遺跡は1974(昭和49)年から1977(昭和52)年の4年間にわたり発掘調査が実施されている。縄文時代晩期(大洞C₂式土器期)の石囲い炉を伴う遺物廃棄場所が発見されている。また縄文時代中期末葉の竪穴住居跡、縄文時代の焼土なども発見されている(古崎ほか 1979: 芹沢1979)。緑町1遺跡は1988(昭和63)年、七飯町教委によって発掘調査が実施され、縄文時代晩期の竪穴状遺構と焼土が発見されている。また縄文時代後期の土壌、焼土も発見されている(石本 1989)。

縄文時代の遺跡は22か所記載されている。これらのほとんどが横津岳山系山麓の緩斜面台地上、標高60mから90mの藤沢川、大川、鳴川の両岸および藤城付近の藤城扇状地上にある。ほぼ七飯町の全域に広がって立地している。長万川遺跡は1990(平成2)年、七飯町教委によって発掘調査が実施され、縄文時代の遺物、縄文時代中期後半の竪穴住居跡2軒とTピットが発見されている(石本1991)。縄文時代の遺跡から出土する遺物は恵山式期のものが大半であるが、聖山・大中山24・上藤城3・4・藤城3遺跡では江別式土器も採集されている。

このほか縄文時代の大中山15遺跡や明治時代の峠下土壘跡、古峠炭窯跡の遺跡が記載されている。古峠炭窯跡は1989(平成元)年、七飯町教委によって調査され、明治後期から大正期内までの幅をもつと推定される炭窯跡が発見されている(石本 1990)。

七飯町では旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代早期から遺跡は確認されているが、遺跡数から見ると縄文時代中期、晩期、縄文時代に比較的增加する傾向がみられる。以下遺跡の立地から概観する。

縄文時代早期の遺跡は標高50m～60m付近と100m～130m付近に点在し、縄文時代前期になると2か所に減少する。ところが縄文時代中期になると遺跡数は増加する。その大半は標高100mから130m、小河川流域の広い範囲に認められる。しかも竪穴住居跡も多く発見されているように、安定した生活の場となっていたようである。縄文時代後期には再び遺跡数は減少し、しかも七飯町の北西部に偏在する。縄文時代晩期には遺跡数は増加し、七飯町の南東域にまとまりをもつ傾向が見られる。更に縄文時代になると遺跡数は増加し、七飯町全体に広がっている。



図II-2 七飯町と周辺の遺跡(1) (この地形図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「大沼公園」「七飯」を利用したものである。)



図II-3 七飯町と周辺の遺跡(2) (この地形図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「七飯」(函館)を利用したものである。)

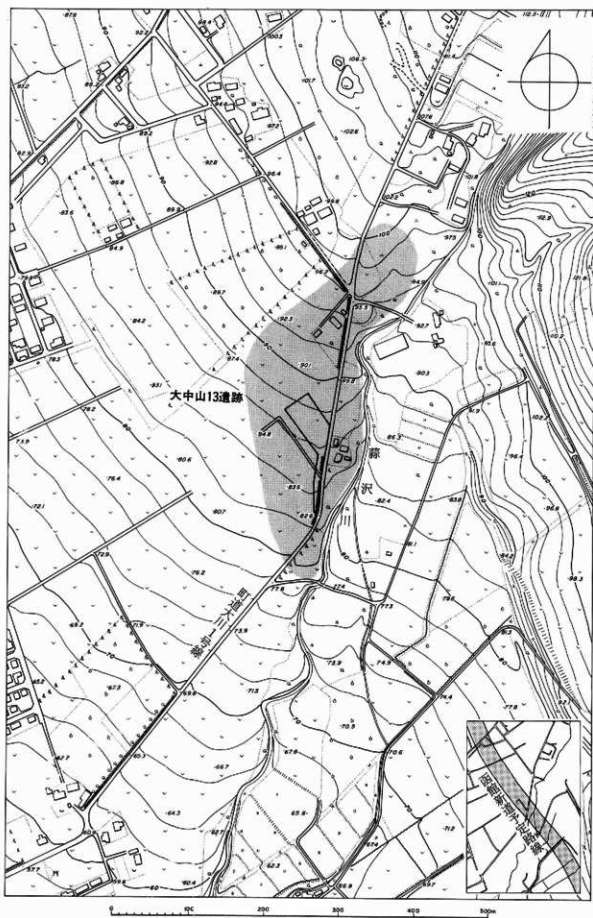
2 遺跡の位置、周辺の遺跡と歴史的環境

遺跡の位置と周辺の遺跡 大中山13遺跡の所在地は、亀田郡七飯町字大川403, 405~407, 409, 410, 413, 418番地である。大川地区は七飯町の最南部地域にあたる。横津岳南西麓に源を發し、北東-南西に流れる^{ニハクセ川}で函館市に隣接している。遺跡はJR大中山駅のほぼ東約1km、^{ニハクセ川}右岸、標高80m~100mの横津岳山系南西麓の緩斜面上に位置している。地形は北東から南西に向かってゆるやかに傾斜している。遺跡からは函館平野と函館湾を遠望することができる。左手に函館山、右手には松前半島があり、更に西から北にかけては木地挽山、仁山高原のなだらかな山なみが続き、横津岳を中心とする横津山系が連なっている。

埋蔵文化財包蔵地分布図に登録されている68か所の遺跡の半数近い27か所が、^{ニハクセ川}、大川、湯出川流域に集中している。とくに縄文時代中期の大中山1遺跡、縄文時代晩期の大中山3遺跡、武佐川遺跡などは古くから良く知られている。大川流域の大中山5遺跡と湯出川流域の大中山26遺跡は七飯町教委によって発掘調査が実施されている。大中山5遺跡は1982(昭和57)年に調査され、統縄文時代の土壌、焚火跡などが発見されている(石本 1983)。大中山26遺跡は1988(昭和63)年に調査され、縄文時代中期の竪穴住居跡10軒と土壌、焼土が発見されている(石本 1989)。本遺跡周辺の^{ニハクセ川}右岸には大中山8・14・15・16遺跡があり、縄文時代から統縄文時代の遺跡が分布している。^{ニハクセ川}左岸、タラ川流域の函館市側には、縄文時代から統縄文時代の遺跡(桔梗4・5・6遺跡)がある。また本遺跡跡のほぼ南、約2.5mのところにはサイベ沢遺跡群や西桔梗遺跡群がある。サイベ沢遺跡は、貝塚を伴う縄文時代前期~中期の集落遺跡として有名である。1957(昭和32)年に最初の発掘調査(児玉ほか 1958)が行われ、その後1966(昭和41)年(吉崎ほか 1967)、1984(昭和59)年、1985(昭和60)年(田原・鈴木 1986)に調査が重ねられている。また西桔梗遺跡群は、函館流通センター建設に伴い1972(昭和47)年、B₁・B₂・C・D・E₁・E₂・Fの各遺跡が調査され、縄文時代早期から統縄文時代の遺構、遺物が発見されている(千代編 1974)。これらの近くに所在する石川1遺跡は函館新道建設に伴い、1985、1986、1987年の3か年にわたり当センターによって発掘調査された。縄文時代早期、中期の竪穴住居跡などの遺構や遺物が発見され、また旧石器時代の焼土、石器群が発見されている。

歴史的環境 七飯町は「七飯町の遺跡」で述べたように、大沼周辺の湖沼地帯、横津岳山系の南西山麓と函館平野間の緩斜面台地状地形上に縄文時代早期から統縄文時代、據文時代の遺跡が分布している。また地名、河川名などにアイヌ名に起因するものが多く見られる。七飯という名も、ナアナイ(いくつもの川)、ヌアナイ(豊かな沢)という地形にかかわるアイヌ名に起因するものとしていわれている(「七飯町史」)。12、3世紀ごろ「和人」が侵入し、先住民アイヌの人びととの抗争というかたちで、七飯町もまた日本歴史の中に名を見せ始めるのである。七飯町には相原氏に関する言い伝えが多いという。相原氏は1456年の「コシャマインの戦い」に七飯町城袋に砦をかまえ、コシャマイン等々と戦ったとされており、その砦と思われる遺構が発見されているという。この「戦い」後、七飯町は「和人」の生活領域となり、その後松前藩政の中に組み込まれていく。以下七飯町に関する出来事を年表風に概観する。

1504年、三輪神社草創。1576年、大川神社(大中山神社)草創。1682年、七重・大川村に切支丹禁制の高札が掲げられ、1717年、渡島の幕府巡見使に対して、七重郷帳を奉っている。1786年の記録には、七重村の戸数は50戸、260人という数字が残されており、豊富な森林資源を利用し、袖夫、炭焼きなどによる生活が営まれていたものと思われる。1801年、峠下村に水田が開田され、七飯町は農業を中心として発展することとなる。1854年、神奈川条約の締結により、箱館港が薪水供給地となり、七飯村は外国人の遊歩区域となる。これによって西洋文化と直接接することとなり、更に外国船のため



図II-4 遺跡の範囲と周辺の地形図

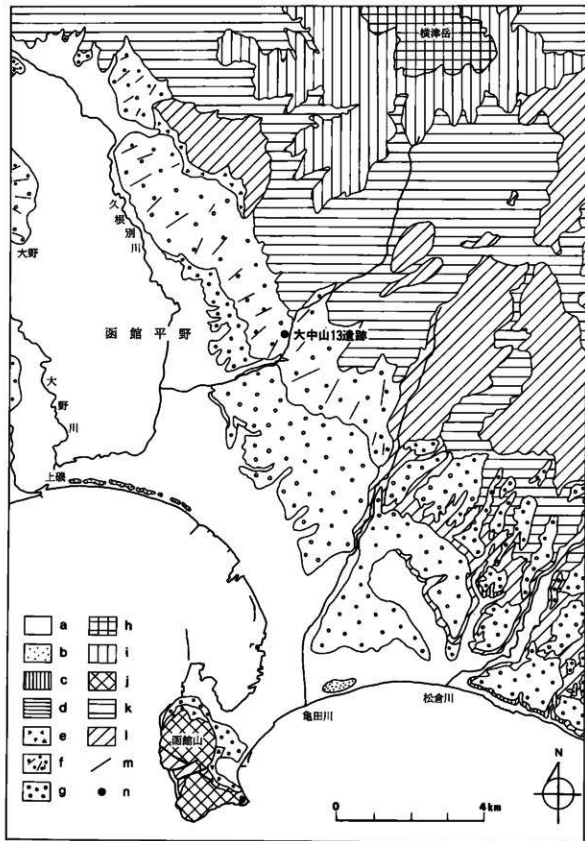
の馬鈴薯、野菜などの供給地として洋式農業が導入されていった。以後、八王子同心の入植、プロシアの商人R・ガルトネルによる開墾事業等々、温暖な気候と交通の要路にあたるという地政的好条件とが相まって道内の先進農業地帯として発展するのである。1970(明治3)年、ガルトネル租借地問題が解決すると、その地を開拓使函館出張所七重開墾場とし、その後七重農業試験場、七重勸業課試験場、七飯勸業試験場等々と改称し、1894(明治27)年、七飯種畜場が廃止されるまで農業希望者の技術指導、洋式農具の使用法の研究、米国産種苗の栽培試験、農産加工、牧畜など北海道農業の開発と普及に重要な役割を果たして来たのである。

本遺跡周辺は蒜沢川^{ニクニク川}や大川などの水系に恵まれ、標高80m～100mとやや小高い南西向きの変斜面にあたり、縄文時代早期から縄文時代へと、ほぼ継続的に生活の場として利用され、更に江戸時代末から明治初頭にかけては農、牧畜関係の基礎産業がいち早く移入され、開拓が進められていった。とくに先述したガルトネルによって租借地となり、その後七重官園へと引き継がれたことはきわめて重要な意味をもつものと言えるだろう。1875(明治8)年、エドウィン・ダンによって本格的な羊牧場が開設され、その後羊・馬などの放牧場として活用されて来た。今年度の調査区にある土塁跡とされるものは、エドウィン・ダンによる羊牧場開設時に構築されたものとされている。戦前、現町道大川1号線の西側の一部が農地として開墾され、戦後の農地開放後、畑作地として全面的に開墾されて現在に至っている。現在本遺跡周辺は、大根、人参、馬鈴薯、豆類、とうろこしなどが栽培され、早出し作物の出荷として成長している。

なお蒜沢川^{ニクニク川}の地名の由来について、次のような話しが伝えられている。

むかし、黄金を所持した武士が敵に追われて当地辺りに逃れて来た。ところが重い黄金をもってこれ以上逃れる事が出来ないと悟った武士は、カメに黄金を入れて土中深く埋め、後日のために目印として、所持していた蒜^{ニクニク}をいけて立ち去ったという。その後、その武士が黄金を取りに戻って来ることはなかったけれども、蒜^{ニクニク}は沢^{ニクニク}に繁茂し、そのためにこの辺り一帯が蒜沢^{ニクニク川}と名付けられたという(『七飯町史』)。

今も、この蒜沢川^{ニクニク川}流域は春先ともなると蒜^{ニクニク}や山菜が生い繁り、付近の人びとが山菜取りの場として親しまれている。



図II-5 遺跡周辺の地質

(長谷川・鈴木、1964；三谷塚か、1965；三谷塚か、1968；鈴木塚か、1969から引用。一部加筆・簡略化) a：沖野郎地
 b：砂丘 c：鶴島沢火山灰層 d：文井層 e：雄勝沖積物 f：扇状地堆積物 g：扇状地堆積物 h：奥平山麓堆積物
 i：奥平山麓堆積物 j：奥平山麓堆積物 k：峠下火山砕積物(松倉集積層を含む) l：その他の新第三系-買入岩類
 m：新層 n：大中山13遺跡

3 遺跡周辺の地形と地質の概要

本遺跡は函館平野の北東端の一辺に位置している。周辺には、横津岳から函館平野にかけて、山地斜面、山麓の緩斜面または扇状地、段丘および沖積低地が発達している(図II-5)。

山地部は標高1,100m~150mで、横津岳を構成する安山岩の熔岩(鈴木ほか 1969)と、これらの下位の峠下火山砕屑岩類(三谷ほか 1966)とから成っている。横津岳山頂付近は、熔岩流堆積面の保存が良い。

山麓部では、段丘との間、標高100m~50mに緩斜面が発達している。この緩斜面は、崖線および扇状地として記載されている(三谷ほか 1966; 鈴木ほか 1969)が、峠下火山砕屑岩類の露出地域にも分布するので、一部には他の営力によって形成された緩斜面も含まれていると思われる。

段丘は、標高50m~15mに発達している。瀬川(1974・1975)によれば、函館付近の平坦面は、鳴川面(標高460m~360m)、鱒川面(標高200m±)、赤川段丘(鈴蘭丘面:標高170m~100m、中野町面:標高100m~90m)、日吉町段丘(標高60m~50m)、函館段丘(標高17m~8m)、沖積段丘(標高5m±)に区分され、日吉段丘は関東地方の下末吉段丘に、鈴蘭丘面は多摩丘陵のT₁面に、中野町面はT₂面に対比されている。一般に、段丘面は降下火山灰起源のローム層に覆われる。

沖積低地は、標高20m~5m、函館から上磯、大野へかけて発達し、函館平野の大部分を占める。砂礫・砂・粘土および泥炭から構成され、沖積層の基底は、平野南部では海水準下40m±、南東部から中央部にかけては20m±、西部で10m±、北部で0-10m±とされている(三谷ほか 1966)。

以上の地形を覆って、黒ボク土中に2~3枚の降下火山灰が認められる。

本遺跡周辺の地形は標高100m~80mの緩斜面が発達する丘陵性地形である。地質構成は、新第三紀鮮新世~中新世の峠下火山砕屑岩類に属する凝灰質集塊岩を基盤岩とし、第四紀洪積世の段丘堆積物(礫・砂・シルト)および第四紀沖積世の扇状地堆積物(礫・砂・シルト)が覆っている(5万分の1地質図幅 大沼公園)。1990(平成2)年度に、函館開建が実施した地質調査(ボーリング調査)の結果によると、黒色腐植土(黒ボク、耕作土)下2m~5.4mまでは砂礫・砂・シルトからなる扇状地堆積物で、礫は安山岩質でφ10mm~100mmの円~亜円礫が主体であるという。また部分的に10cm~30cm級の玉石を含むという(調査地点は、発掘調査地区内の町道大川1号線未使用部分にある土層跡下の2地点である)。本遺跡はこの扇状地堆積物(低位段丘上の上のっている低位扇状地である)上に立地していると言えるだろう。ただ調査中第IX層、第X層で露呈した大量の礫の観察によると、扇状地堆積物に見られる礫に比して、かまじ角ばった状況を呈しているという。これらから、前述したように、崖線あるいは他の営力によって形成された緩斜面の部分にあたる可能性も考えられるという見方もあり、今後詳細な検討をする必要があるだろう。

III 土塁跡の調査

土塁跡は、調査地区の南側にあり、土塁地区と呼称した部分にあたる。町道大川1号線敷地内の未使用部分である。Nラインより北側は耕作等によって削平され、すでに消滅している。土塁跡はNラインより南側にあり、調査区外約3mのところまで現存している。ただGラインより南側はかなり崩れがひどく、高低差がはなはだしい。現存の土塁跡とされる土盛りは、巾3m～4m、高さ0.3m～1.2mの規模をもち、ほぼ南北方向にのびている。現状は雑草が生い繁り、板が数本植えられている。またナラの根株が数個残存していた。

調査は、現況の地形測量を行い(図Ⅲ-2)、次いで盛土の堆積状態などを検討するための小トレンチを4か所(南から小トレンチ1・2・3・4とする)設定し、まずトレンチ調査を実施した。断面観察の結果は以下のとおりである(図Ⅲ-3・4)。

小トレンチ1：第Ⅵ層上のやや東寄りに巾約1m、高さ約0.3mの盛土(土層Ⅲ、以下盛土①とする)と、その上に汚れたボロボロの土(土層Ⅰ'、以下盛土②とする)が厚く覆っている。また盛土①の西側には第Ⅶ層中まで掘り込まれた落ち込み(以下溝状落ち込みとする)が見られる。

小トレンチ2：第Ⅳ層上の東側に巾約1.5m、高さ約0.6mの盛土①があり、その上に盛土②がみられる。盛土①の西側には第Ⅷ層中まで掘り込まれた溝状落ち込みが見られる。

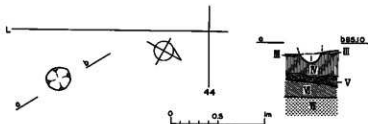
小トレンチ3：第Ⅳ層上のやや東側に巾約2m、高さ約0.4mの盛土①があり、その上に盛土②が厚く覆っている。盛土①の西側には第Ⅷ層中まで掘り込まれた溝状落ち込みが見られる。

小トレンチ4：第Ⅳ層上の東側に巾約2m、高さ約0.6mの盛土①があり、その上に盛土②が厚く覆っている。

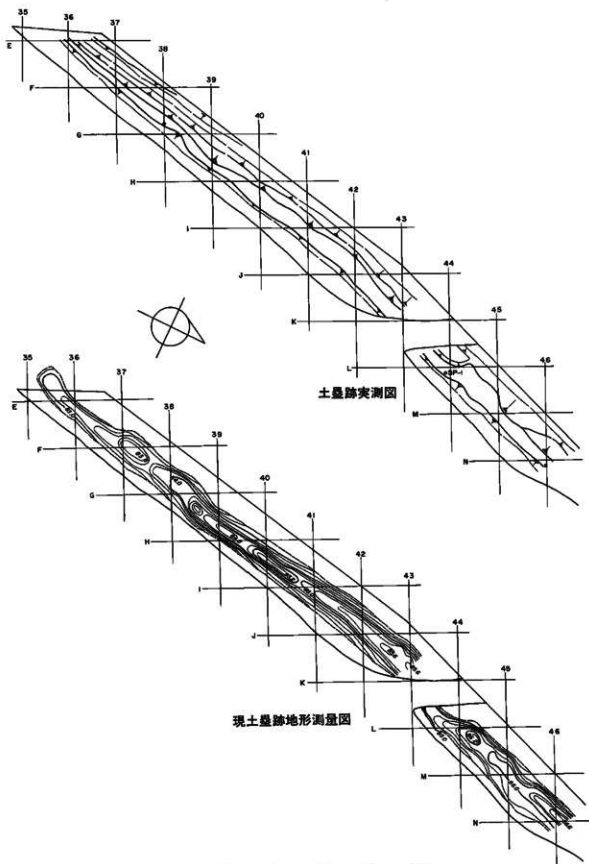
また小トレンチ2・4の断面で、盛土①の上面から掘り込まれている杭状の小ピットを検出した。盛土②の下層や溝状落ち込みの底辺付近、第Ⅳ層中から遺物が出土した。

トレンチ調査および断面観察から以下の所見を得る。

1. 大きく分けて、二時期の盛土がある。盛土②と溝状落ち込み中からは縄文時代の遺物とともにビンの破片やビニール袋などのごく新しい廃棄物状のものも出土している。
2. 盛土①、②の下は攪乱等を受けていない自然堆積で、とくに第Ⅵ層は縄文時代、縄文時代の良好な遺物包含層である。
3. 盛土①は、溝状落ち込みが掘られる前に、第Ⅱ層、第Ⅲ層を混合した状態で構築されたものと思われる。
4. 小トレンチ2・4で検出された小ピットは盛土②上からの掘り込みではなく、盛土①上面から掘り込まれたものである。
5. 盛土①の構築時期を決定し得る遺物等は出土していない。



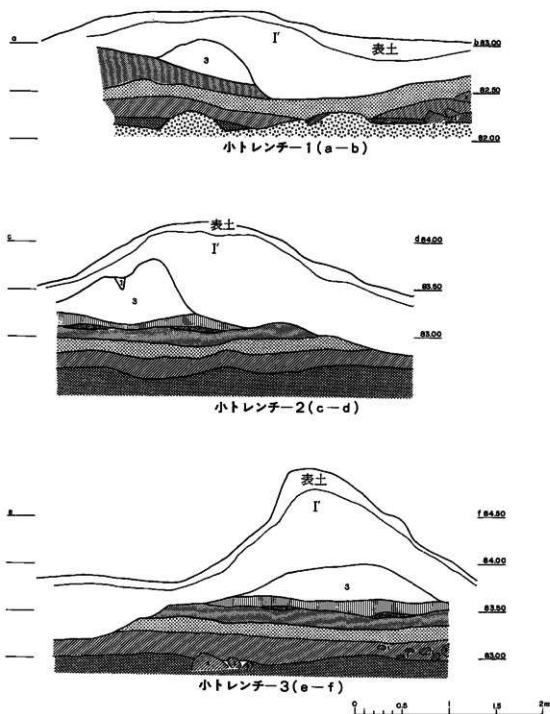
図Ⅲ-1 SP-1 実測図



圖III-2 土壘跡 突測圖

以上の所見に加え、溝状落ち込みは戦前畑地開墾時に側溝として掘開したもので、盛土②はその時の揚げ土であるという土地所有者などの話から、もともとあった土層跡は盛土①に相当するのではと想定する。

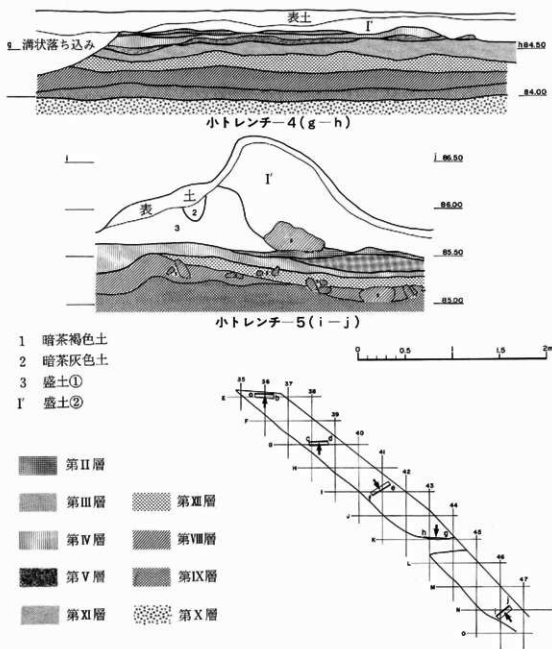
以上の結果と想定から、表土、盛土②の上・中層、溝状落ち込み内堆積土は重機で除去し、盛土①を全体的に検出する(図III-2)。これによると、巾1m~2m、高さ0.4m~0.6mの盛土①が第II層あるいは第IV層上にあり、ほぼ南北方向にのびているのを確認する。盛土①は暗褐色土でボロボロし



図III-3 小トレンチ断面実測図(1)

ており、第III層が混入している。盛土①の上面から5cm~10cmくらいづつ掘り下げ小ピット等の検出作業を行う。M-43の調査中、径約0.3m、深さ約0.1mの打ち込みと思われる小ピット(SP-1、図III-1)を検出した。覆土1は第IV層>第III層の混合土である。小トレンチ-2・4の断面で確認した小ピットとSP-1は、盛土①の構築時のものかと思われる。なお小トレンチ-4検出の小ピットとSP-1との距離は約14m、SP-1と小トレンチ-2検出の小ピットの距離は約40mである。

盛土①中およびその周辺から盛土①の構築時期を決定し得る遺物などは出土していない。ただ言い伝えや歴史資料などから推定すると、この盛土①が明治初年に構築された土塁跡の可能性があるとと言えるだろう。



図III-4 小トレンチ断面実測図(2)

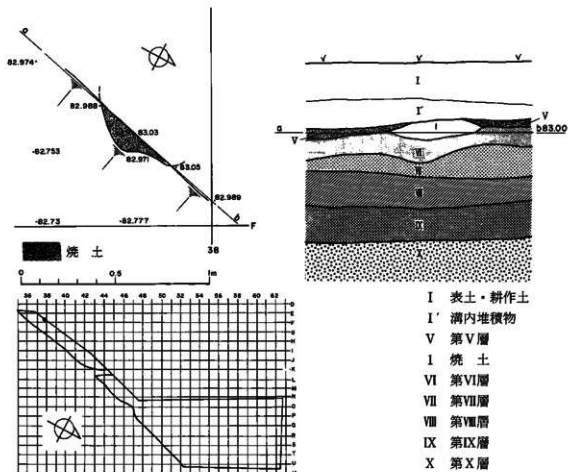
IV 縄文時代・続縄文時代の調査

1 第VI層の調査

第VI層は土塁地区にプライマリーな状態で確認される。遺物は出土位置、レベルを記録して取り上げ、順次掘り下げて調査を行う。第VI層は縄文時代早期、前期、後期、続縄文時代の遺物包含層である。遺構は焼土が1か所検出されている。また第VI層上面～上層中で検出された一括出土遺物6か所、礫6個とフレイク集中はともに続縄文時代(恵山式土器期)のものである。一括出土遺物は、横倒し、あるいは直立した土器が押しつぶされた状態で出土している。一括出土遺物2・5では土器の上に礫がのっている。明確な掘り込みは確認できなかったが、このような出土状態は墓である可能性も考えられる。礫が単独で出土した6か所も人為的に持ち込まれたものと考えられることから、これらを遺構扱いとして記載した。

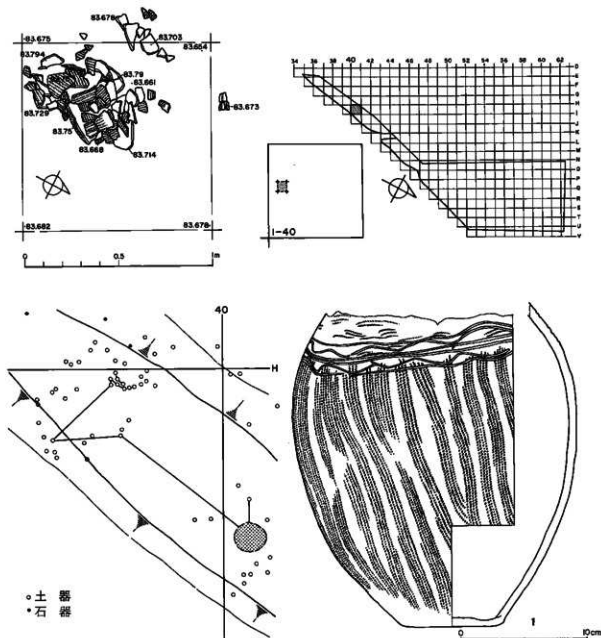
(1) 遺構と遺構出土の遺物

焼土(F-2)(図IV-1、図版9-2) F-37に位置する。溝によって南半分は削平されており、溝の北壁面でその断面を検出する。北側部分は調査区外にあるため全体は不明である。明確な掘り込みは見られないが、わずかにくぼんでいる。粘質の明橙色焼土で、層厚は約10cmである。第VI層上にあり、また同層より恵山式土器が多数出土していることから考えると、続縄文時代のものと思われる。



図IV-1 F-2 実測図

一括出土遺物 1 (図IV-2・3 図版9-3・4・5) 調査区の南東側I-40区の南東壁付近、第VI層上面から検出された。この部分は、土塁跡によって包含層が比較的良好に残されていた箇所である。遺物が出土した箇所は、戦後に植樹された部分でもあり、その直下の根の間から1個体分の土器が、横倒しのおぼれた状態で発見された。掘り込みなど遺構の構築跡は確認されなかった。検出された遺物(図IV-3)は第V群に属する土器で、一部の破片は隣接するI-39区で出土したものと接合している。ただし、口縁部は欠失している。器形は体部上半部に最大径をもつ壺で、底部は平底である。頸部には横走する縞縄文、体部には縦走する縞縄文が施され、軽いナデ調整が加えられている。頸部下半には、沈線で区画された二段の波状の沈線文が加えられている。胎土は砂粒が多い。器面調整は比較的丁寧である。内面には少量の炭化物の付着が見られる。

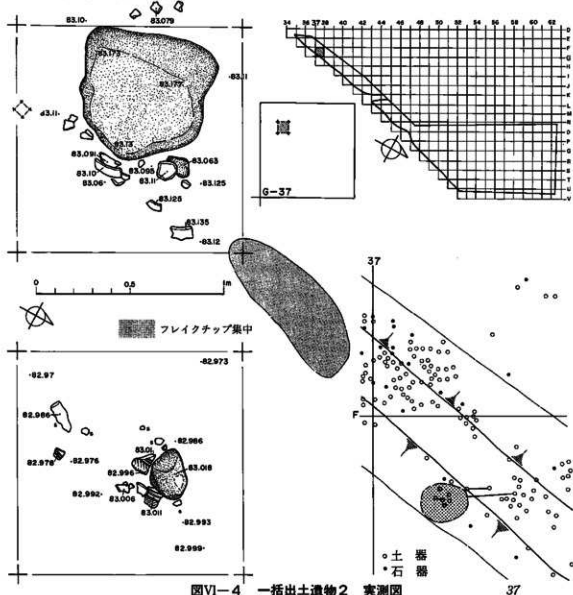


図IV-2 一括出土遺物 1 実測図

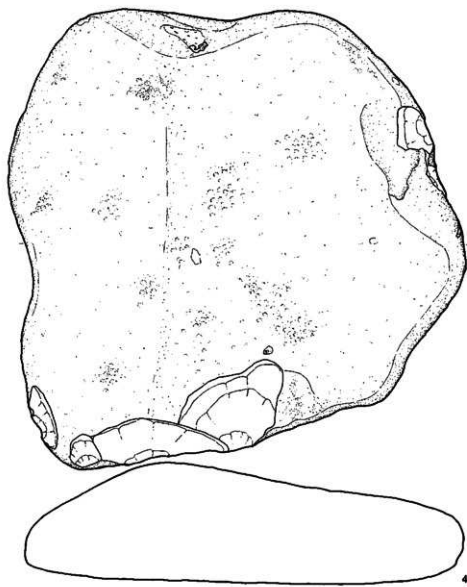
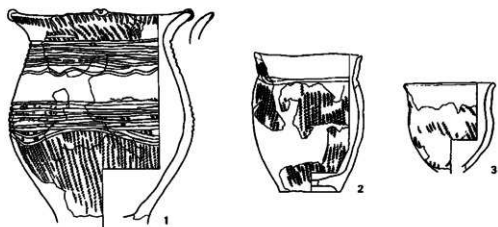
図IV-3 一括出土遺物 1 出土の土器

一括出土遺物2 (図IV-4・5 図版10-1・2・3・4・5) G-37の第VI層上面で検出する。東側は側溝により若干削平されている。ほぼ水平状態の石皿(図IV-5-4)の周辺から土器片が突き刺さった状態で出土している。直立した土器の上に石皿をのせ、つぶれたかのように見える。40cm×60cmの範囲にまとまっている。約50cmほど北側には90cm×30cmの範囲にフレイク・チップの集中がある。3個体分の土器片があり、周辺の第VI層出土の土器片と接合する。出土総数は55点で、その内訳は土器48点、フレイク3点、石皿1点、礫3点である。出土した土器はすべてV群土器である。

1は底部を欠失するが、壺形土器である。体部は中央部に最大径をもち、球形状を呈する。口縁はゆるやかな波状で、4か所に突起をもつ。口唇部断面は尖っており、突起部に「U」字状の小さな貼り付けが加えられている。頸部から体部上半には沈線文に区画された無文帯がある。上方の沈線は7条からなり、最下位は波状である。下方の沈線は7条からなり、2本一組の波状である。体部下半は縞縄文である。器面調整は内外面とも丁寧である。2は壺形土器で、体部上半部に最大径をもつ。口唇部内面に調整が加えられ、頸部に1条の沈線が施されている。口縁部、体部は縞縄文である。器面調整は内外面とも粗雑で、胎土に砂粒を多く含む。底部は揚げ底である。3は底部を欠失する壺形土器である。体部上半にくびれをもち、不規則な縞縄文が施されている。器面調整は内外面とも粗雑で、胎土には砂粒が多く含まれる。



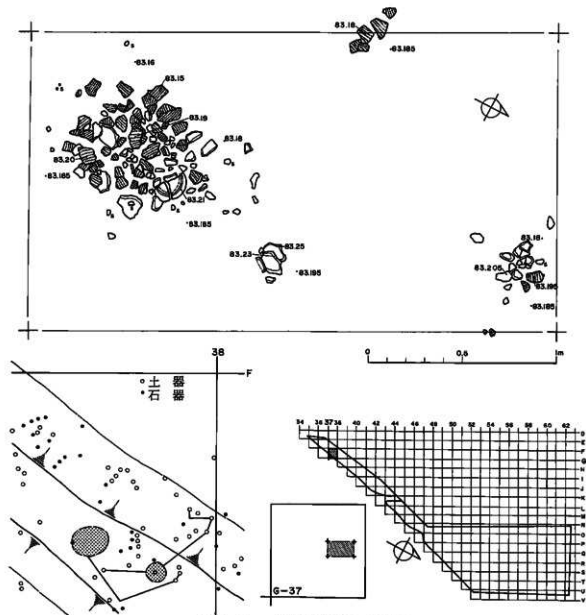
図VI-4 一括出土遺物2 実測図



图IV-5 一括出土遺物2 出土の遺物

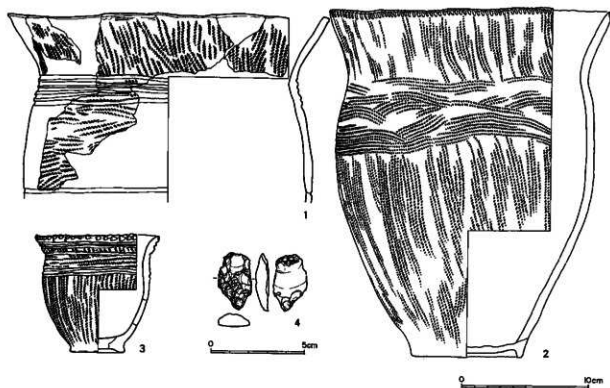
一括出土遺物3 (図IV-6・7 図版11-1・2・3・4) G-37の第VI層上面で検出する。横例しのまま押しつぶされた様な状況を呈している。50cm×50cmの範囲にまとまっている。3個体分の土器片があり、その周辺の第VI層出土の土器片と接合する。出土総数は231点で、その内訳は土器217点、スクレイパー1点、フリイク・チップ13点である。出土した土器はすべてV群土器である。

1は体部下半を欠失する壺形土器である。口唇は調整を加えられ、角型である。口縁部は縦走する縄縄文、頸部と体部には横走する縄縄文に、沈線文が加えられている。頸部には5条の沈線文があるが、体部は不明である。2は体部上半に最大径をもつ壺形土器である。底部は揚げ底である。口唇は尖り、棒状工具による刻目文が加えられている。口縁部と体部には縦走する縄縄文が施されている。体部上半には、横走する縄縄文で区画された波状の縄縄文が加えられている。器面調整は比較的丁寧で、口縁部や体部には縄文施文後、軽いナデ調整が加えられている。胎土には砂粒が多い。3は壺形土器である。口唇は尖り、横位に刺突文(押し引き文)が加えられている。底部は揚げ底である。口縁部と体部には縦走する縄縄文が施されている。頸部は沈線文で区画され、横走する縄縄文が施されて

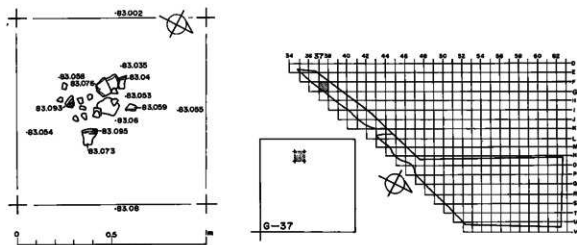


図IV-6 一括出土遺物3 実測図

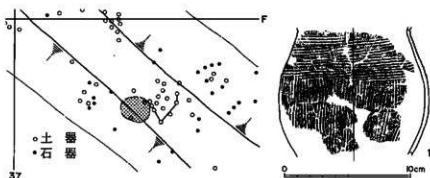
いる。器面調整は比較的丁寧で、体部は縄文施文後、軽いナデ調整が加えられている。胎土には砂粒が多く含まれる。4はスクレイパーである。縦長裂片を素材とし、刃部が尖頭状に作出されている。二次加工は背面にのみ施され、主剝離面は平坦である。石材はめのう質頁岩である。



図IV-7 一括出土遺物3 出土の遺物



図IV-8 一括出土遺物4 実測図(1)



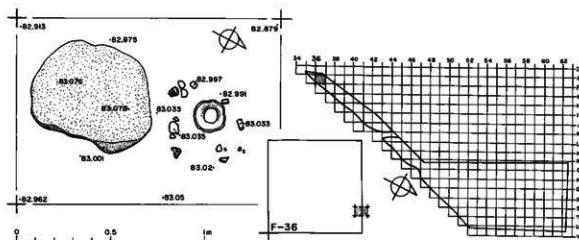
図IV-9 一括出土遺物4 実測図(2)と出土の土器

一括出土遺物4 (図IV-8・9、図版10-6) G-37の第VI層上層中で検出する。一括出土遺物2の周辺を約10cmほど掘り下げたところで、内面を上に向けた状態の土器片のまとまりが出土する。20cm×30cmの範囲にまとまっている。ほぼ1個体分の土器片があり、周辺の第VI層出土の土器片と接合する。出土総数は24点で、すべて土器である。V群土器である。

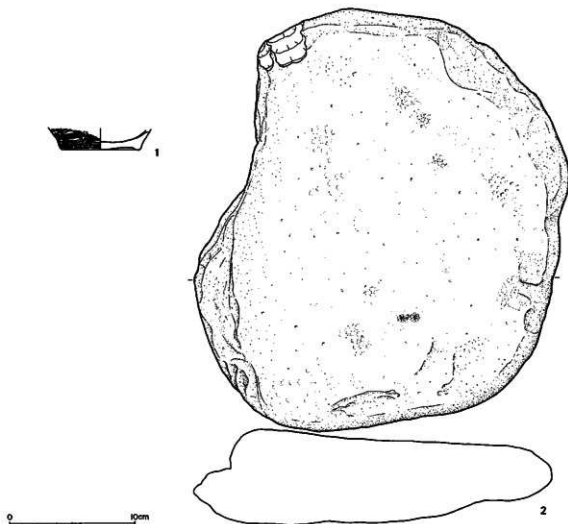
1は体部が球形状を呈する壺形土器と思われる。体部は縦走する縄文が施されている。上半には横走する縄文が加えられている。器面調整は比較的丁寧で、体部には縄文施文後、軽いナデ調整が加えられている。胎土には砂粒が多く含まれている。

一括出土遺物5 (図IV-10・11 図版12-1・2) F-36・37の第VI層上層中で検出される。ほぼ水平状態にある石皿(図IV-10)の北側周辺に土器片がちらばった状態で出土する。また内面を上に向けた状態で底部破片が出土している。40cm×60cmの範囲にまとまっている。出土総数は17点で、その内訳は土器が14点、フリック・チップ2点、石皿1点である。出土した土器はすべてV群土器である。土器は細片が多く接合できなかった。

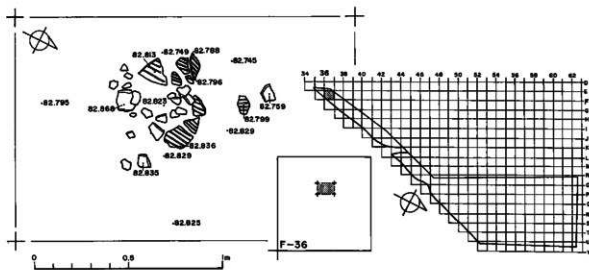
1は揚げ底の破片である。体部には縄文が施されている。底部内面の調整は粗雑で、指頭痕が認められる。胎土には砂粒が多く含まれる。



図IV-10 一括出土遺物5 実測図



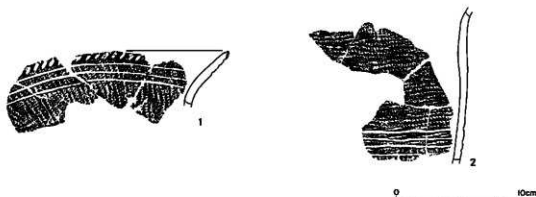
図IV-11 一括出土遺物5 出土の遺物



図IV-12 一括出土遺物6 実測図

一括出土遺物6 (図IV-12・13 図版12-2) F-36の第VI層上層中で検出する。外面を上に向けた状態で出土している。40cm×50cmの範囲にまとまっている。出土総数は38点で、その内訳は土器36点、フリイク・チップ2点である。出土した土器はすべてV群土器である。

1と2は同一個体である。1は口唇断面が尖り、棒状工具による刻目文が加えられている。口縁部の地文は縞縄文で、3条の沈線文が加えられている。2は体部上半の破片で、横走る縞縄文が施され、沈線文が加えられている。



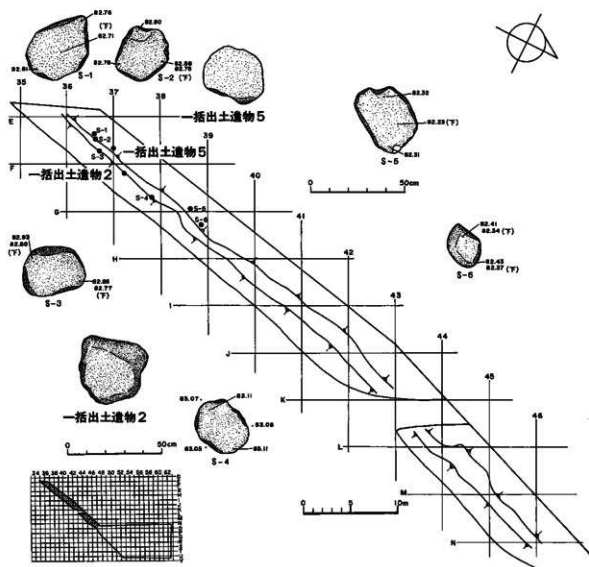
図IV-13 一括出土遺物6 出土の土器

礫出土状況 (図IV-14・15 図版12-3) 第VI層上面および第VI層上層中から台石が5個、礫が1個出土した。一括出土遺物2・5の石皿2個を加えると8個となる。F-36で4個、G-37で2個、G-38で1個、H-38で1個である。S-1~6は、それらの下やごく近い周辺に土器などが伴わない。礫が単独でほぼ水平の状態出土している。S-5は土塁跡のトレンチ調査の際その南面断面で検出され、掘り込み面の有無を観察し、検討したけれども、掘り込みは認められなかった。ほかの5個と一括出土遺物2・5についても精査し、検討したが掘り込みは認められなかった。

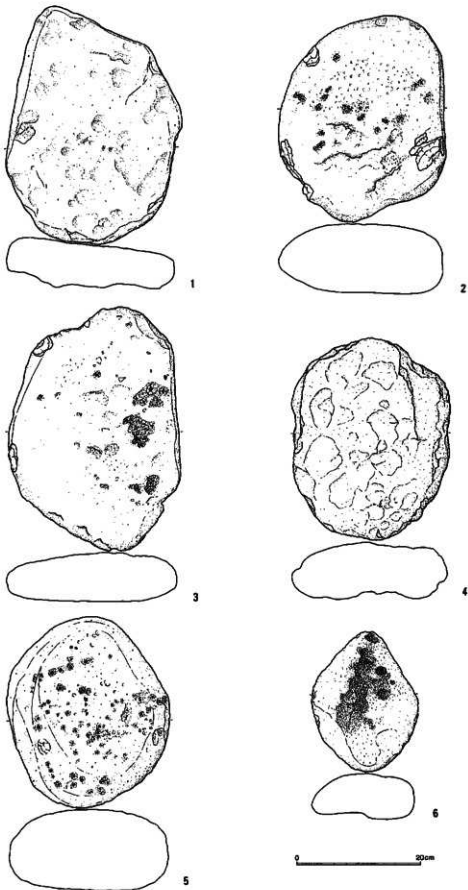
これら8個の石皿、台石、礫は安山岩の自然礫で、明確な使用痕などは認められない。ほぼ扁平なもので、形状は楕円形に近い。重さは、一括出土遺物2 (18.4kg)とS-6 (3.3kg)を除いてほぼ10kg~14kgである。長さはほぼ30cm~39cm (S-6は22.3cm)、巾はほぼ26cm~29cm (S-6は17.1cm、一括出土遺物2は36cm)である。出土状況などから見ると、明らかに人手によって持ち込まれたものであり、一括出土遺物と同様に、墓の可能性も考えられる。

図番号	出土グリッド	出土層位	大きさ	長さ	重さ	材質	備考
S-1	F-36	第VI層上層中	38.3cm×28.3cm	7.9cm	12.7kg	安山岩	台石
S-2	〃	〃	32.8×26.8	11.1	14.2	〃	〃
S-3	〃	〃	39.0×27.7	7.8	12.5	〃	〃
S-4	G-37	〃	32.3×25.1	9.3	10.5	〃	礫
S-5	G-38	第VI層上面	30.6×26.2	13.0	13.2	〃	台石
S-6	H-38	第VI層上層中	22.3×17.1	8.2	3.3	〃	〃
一括出土遺物2	G-37	第VI層上面	36.3×36.1	9.5	18.4	〃	石皿
〃 5	F-36	第VI層上層中	33.3×29.6	7.5	10.6	〃	〃

表IV-1 遺物集中地区出土掲載石皿等一覽



図IV-14 出土位置図



図IV-15 礫出土状況 出土の石皿、台石、礫

フレイク集中 (図IV-16・17 図版13・14)

遺物は、プライマリーな層がかろうじて残されていたG-37区の第VI層上面、土塁跡頂部付近から若干傾斜した部分にかけて80×70cmの範囲内に集中して検出された。掘り込みなどは確認されなかった。出土した遺物総数は586点をかぞえ、総重量では760.0gを量る。器種別の内訳は、石鏃2点、石核3点、Uフレイク1点、フレイク・チップ580点である。石材はめのう、めのう質頁岩、硬質頁岩の3種に分類されるが、接合されたフレイク・チップを観察すると、同一母岩であっても箇所によって異なる石質を有している。剝片の大きさは、1.0cmに満たないものから7.0 cm前後のものまであり、接合状況から4乃至5個体の母岩から剝片剝離が行なわれたと推察される。時期については、伴出する土器が得られていないが、層位的に見て統縄文時代のもと考えられる。以下、掲載遺物について記述する。

石鏃 (1・2, 図版13-2)

2点とも有茎鏃である。1は尖頭部と基部を欠失するが、長さ3.1 cmを測る狭長なタイプのもの。石材は黒色の硬質頁岩で、同色同質のものは石核とした6の左側面の表裏に一部認められるのみである。2は尖頭部を欠失したもの。1より小型であるが同タイプのものである。石材は黒色のめのう質頁岩である。この石材も同色同質のものは、フレイクとした17のみである。

剝片・石核接合資料 (3~5, 図版13-3)

3はフレイクが22点接合したもので、母岩の表皮部分にあたる。総重量は84.7gを量る。現存する接合資料から予測される原材の形状は、扁平礫と考えられる。剝片剝離は打面作出後、数枚のフレイクを剝取しては再び打面を移動しており、上下左右に打面が観察される。石材は灰褐色のめのうである。4はフレイク20点、石核1点が接合したもので、総重量は132.3gである。原材の形状は角礫状をなしており、打面は数か所に見られる。接合資料の内部は、数点のフレイクと石核のみで空洞があることから、石器製作によって剝片が小片化したものと考えられる。石材は灰色のめのうである。5はフレイクが42点接合した資料で、総重量は73.0gを量る。原材の形状は扁平の角礫である。石核とは接合しなかったため、母岩の内部には空洞があり表皮部分だけの接合資料である。打面の作出は上下左右に見られるが、比較的連続した剝片剝離が行われているのは実測図の右側面からである。石材は表皮部分が褐色、内面は乳白色で中心に向かい次第に鼠色になるめのう質頁岩である。

石核 (6・10, 図版14)

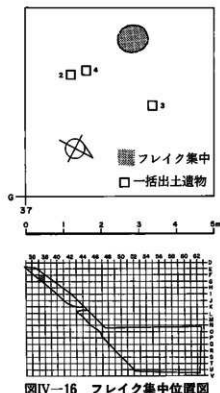
3点出土したうち1点は4と接合。6・10は、ともに同色同質のフレイクが多量にあるものの接合しなかったもので残核の状態のもと考えられる。石材は、6が茶色、褐色、黒色が縞状になっためのう質頁岩、10が灰色、褐色が混在しためのうである。

Uフレイク (8, 図版14)

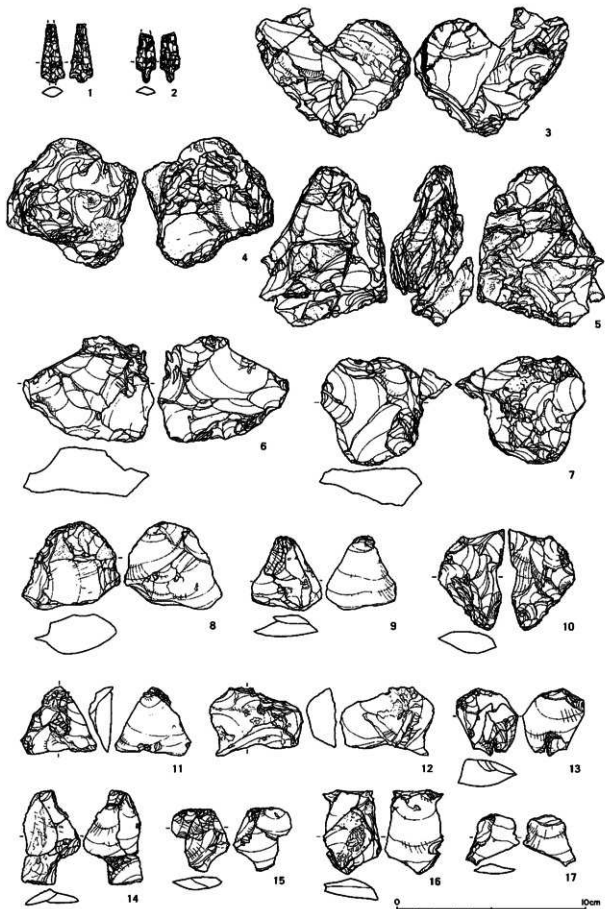
8は母岩の表皮部分の剝片で、実測図左側縁に使用痕が観察される。石材はめのうである。

フレイク (7・9・11~17, 図版14)

比較的大きめのフレイクを9点図示した。石材は7・17がめのう質頁岩、9・11~16がめのう。



図IV-16 フレイク集中位置図



図IV-17 フレイク集中 出土の石器と剥片接合資料

(2) 第VI層出土の遺物

土器 (図IV-18・19・20・21・22 図版15・16-1)

本層から468点出土している。その内訳はI群土器(15), IV群土器(61), V群土器(392)である。I群土器とIV群土器は本層下部, V群土器は第V層直下から第VI層上部にかけて多く出土する傾向が窺えた。I群土器は, 第VII層出土のものと明確な違いは認められず, 同一個体の可能性があるものもある。IV群土器は土器地区中央部の比較的狭い範囲から, V群土器は土器地区南側部分からまとまって出土している。

I群土器 (11・12)

11は自縄自巻的な原体を回転施文した縄文が施され, 縄端圧痕文が加えられている。12は無文地に縄端圧痕文が加えられている。VII層出土の図IV-27-4と同一個体の可能性がある。

IV群土器 (1・13~21)

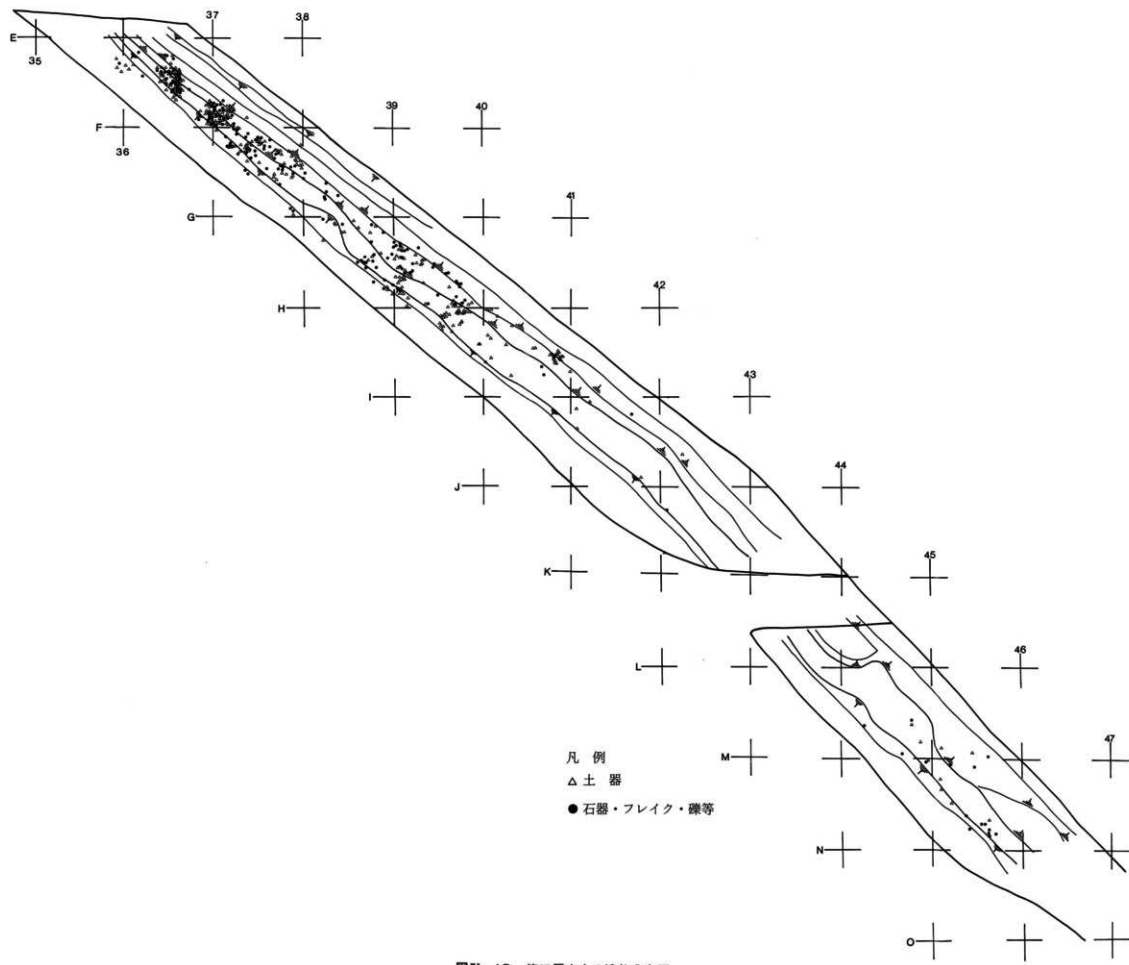
IV群土器は, いくつかに分けられる。

1は曲線的な太い沈線文や指頭圧痕文が多用されているもので, 体部上半でわずかにくびれる器形である。口縁は緩やかな波状である。口唇端部に指頭による押圧が刻み目状に加えられている。体部は不規則な無節の斜行縄文上に曲線的な太い沈線文が加えられている。胎土は少量の砂粒を含む。内面調整は丁寧である。ニセコ式に相当するものと思われる。13~15は無文地に細い沈線文が加えられたもので, 13は口唇直下に文様帯を区画する横位の沈線が施され, 文様帯に斜位の沈線文が加えられている。14は数条の横位沈線に縦位の「S」字状の沈線文が加えられている。15は無文地に弧状の沈線文が施されている。トリサキ式と思われる。16は網目状捻糸文施文後にナデ調整が加えられている。胎土は砂粒・小礫を多く含む。器面調整は内外面とも丁寧である。涌元式である。17~21は縄文のみのもので, 17は波状の口縁部破片で, 不規則な斜行縄文が施されている。内面はササラ状工具による粗雑な調整である。胎土は小礫を多量に含む。18はやや内湾気味の口縁部破片である。器面調整が粗雑なため口縁部上部に接合部分が認められる。体部には不規則な斜行縄文が施されている。内面調整は粗雑である。胎土は小礫を含む。19~21は体部破片である。19・20は不規則な斜行縄文, 21は結束羽状縄文である。

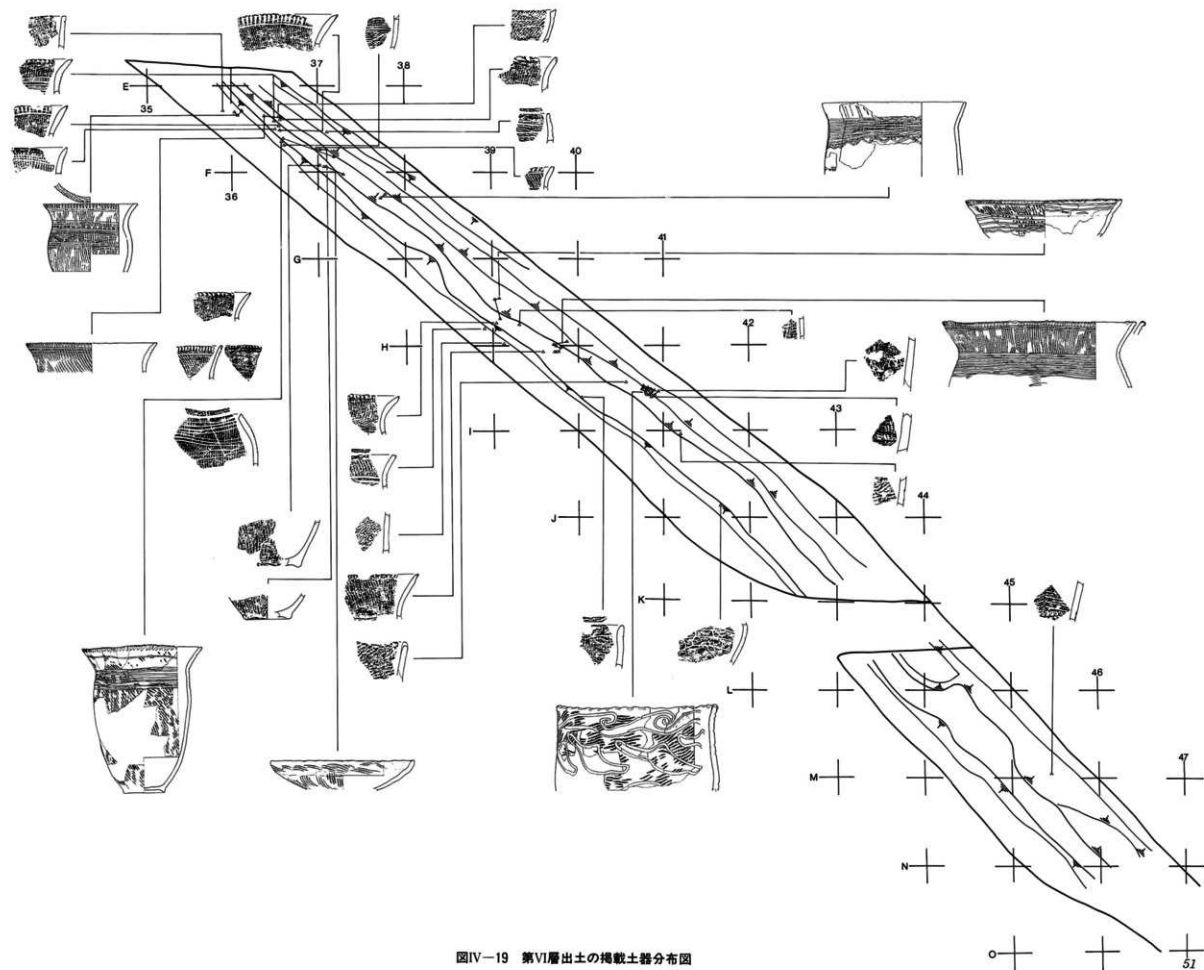
V群土器 (2~10・22~40)

壺形土器 (2~7・22~40)

2は体部上半にくびれをもつ。口唇端部に斜行縄文, 外面に縦位の縄文が施され, 口唇に刻目文が, 頸部上半は2~3条の沈線の区画, 頸部下半には沈線と短刻線に区画された2本一組の鋸歯状の沈線文が加えられている。胎土は少量の砂粒を含む。内面調整は丁寧である。3はくびれの弱い口縁部で, 口唇に刻目文が加えられている。口縁部には斜行縄文, 体部下半には横走する不規則な縄文が施され, 口縁部に1条, 頸部下半に7ないし8条の横環する沈線文が加えられている。体部上半は無文である。底部は揚げ底である。4は口縁部の外反が弱い。外面に不規則な縄文を施文後, 頸部に9~10条の横環する沈線文を施し, その下端にほぼ2本一組の鋸歯状の沈線文が加えられている。体部上半は無文でわずかに横走する縄文が施されている。胎土は砂粒が多く, 脆弱である。5は口縁部破片で, 不規則な斜行縄文が施された後, 口唇に刻目文が, 口縁部直下に3条の沈線文が加えられている。胎土は砂粒が多く, 脆弱である。6は口頸部破片で, 口唇端部に刻み目が加えられた2個一対と思われる貼付瘤をもつ。口唇に刻み目をもち, その直下に2条の沈線文が加えられている。口頸部は縦走する縄文が施されている。頸部下半には8条の横位の沈線文が施され, その下位に横走する縄文が施されている。7は体部に不規則な縦走する縄文が施されている。口唇に刻み目が加えられている。22~25・



図IV-18 第VI層出土の遺物分布図



図IV-19 第VI層出土の模範土器分布図

29・30は口唇に刻みが加えられ、直下に横環する1～3条の沈線が加えられている。26は口唇部直下に3条の沈線文が施されている。27・28・32は口唇に刻みを持ち、頸部に沈線文が施されているもので、32の頸部には横走する沈線文が施されている。31は口唇に刻みを持ち、頸部下半に横走する縄文が施されている。33・34は口唇に刻みが加えられたもの。35～37は横走する縄文上に沈線文が施されたもので、36・37は同一個体と思われる。38は切り出し状の口縁部で、縦走する縄文上に沈線に区画された文様帯に3本一組の波状の沈線文が加えられている。39は切り出し状の口縁部で、斜行縄文上に沈線文が加えられている。10・40は底部破片で、体部は縄縄文である。

浅鉢形土器(8)

8は、口唇端部や外面に斜行縄文、ナデ調整が加えられたのち、口唇に刻目文が、その直下には1条、口縁部内面には2条の沈線が加えられている。頸部下半には横走する4条の沈線と波状の沈線が施されている。胎土は少量の砂粒を含む。

皿形土器(9)

9は底部を欠失する。口縁部は斜行縄文、体部は縄縄文を施文後、ナデ調整が加えられている。胎土は砂粒が少ない。内面の一部に指痕痕が認められるが調整は丁寧である。炭化物の付着は認められない。縄文・胎土からI～IV層出土の図IV-32-59と同一個体と思われる。

石器(図IV-18・23・24 図版16-2)

第VI層からは374点の石器等が出土した。内訳は石核4点、Uフレイク5点、Rフレイク4点、フレイク・チップ323点、石斧1点、たたき石2点、くぼみ石2点、台石5点、礫△9点、礫・礫片16点、その他(自然遺物等)3点である。以下、図示した遺物について記述する。

Uフレイク(1～3)

1～3はいずれも縦長剥片を素材とし、片側縁部に若干の使用痕を残している。石材は1・3がめのう質頁岩、2が硬質頁岩である。

Rフレイク(4・5)

4はめのうを石材とした石器片の可能性が。5は硬質頁岩の縦長剥片を素材としたもので、横方向に大きな二次剝離が見られる。

石核(6・7)

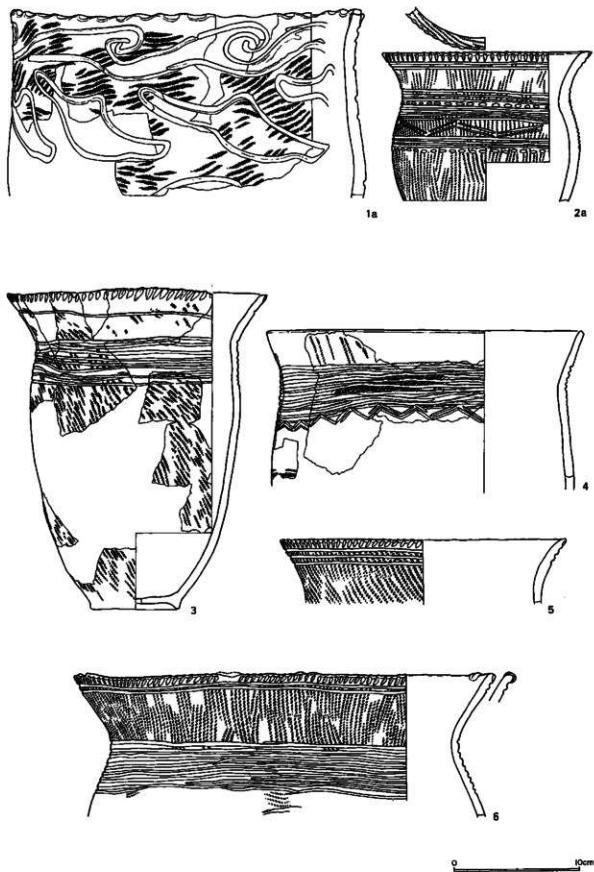
2点とも残核と思われる。石材は6が灰色のめのう、7は乳白色のめのうである。

石斧(8)

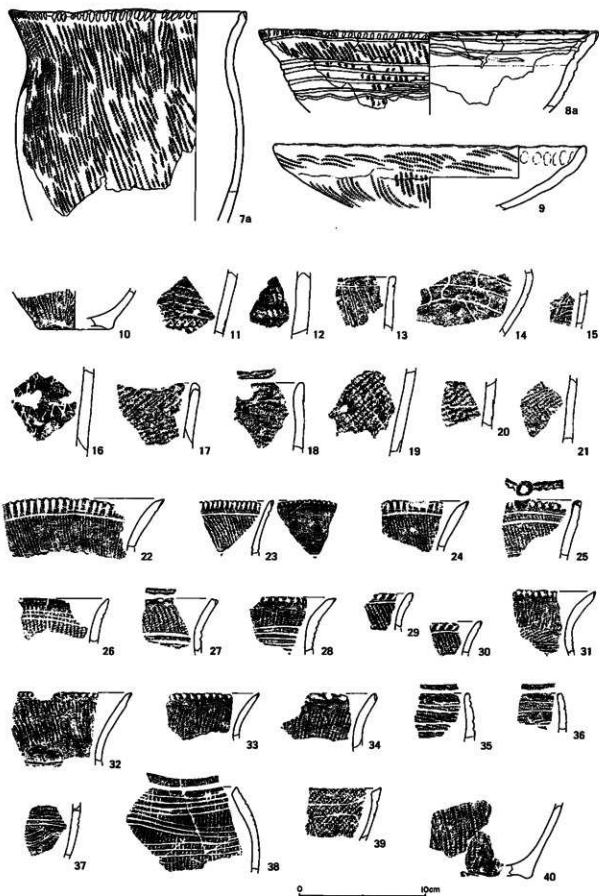
8は、第VI層中から出土した刃部破片と盛土中から出土した基部破片が接合したものである。成形は周囲を剝離調整した後、全面を研磨している。石材は砂岩である。

たたき石(9)

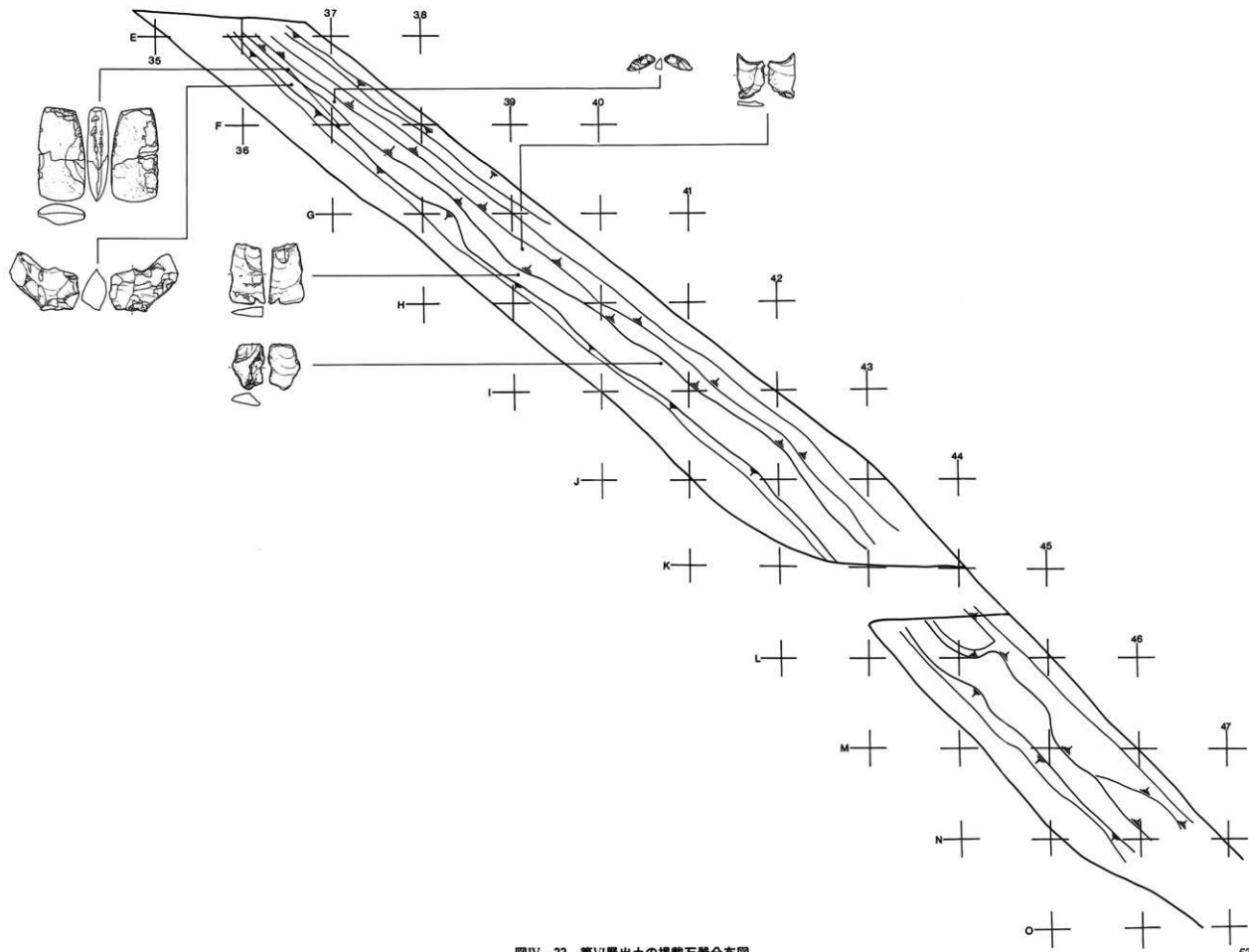
9は三角形の自然礫をそのまま使用したもので、3か所の頂点にたたき痕が見られる。石材は安山岩である。



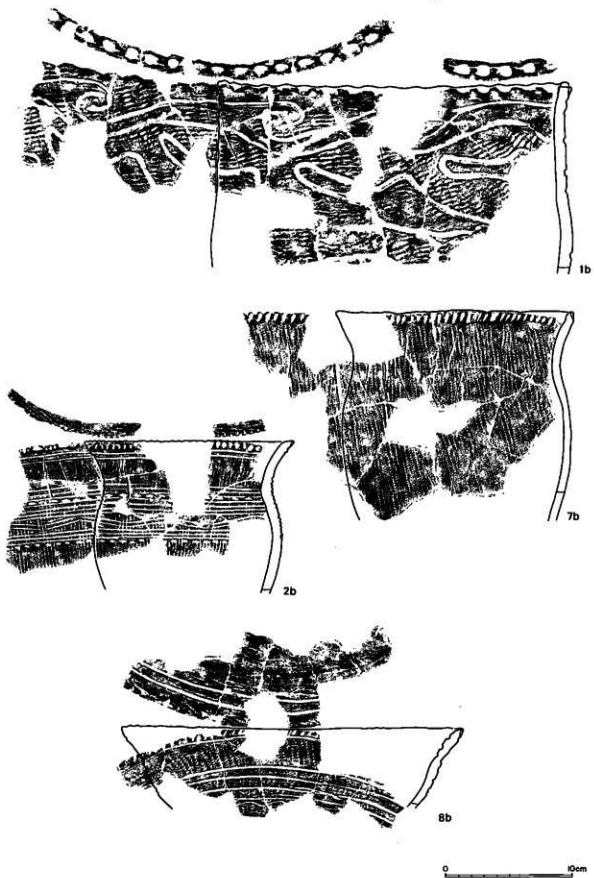
図IV-20 第VI層出土の土器(1)



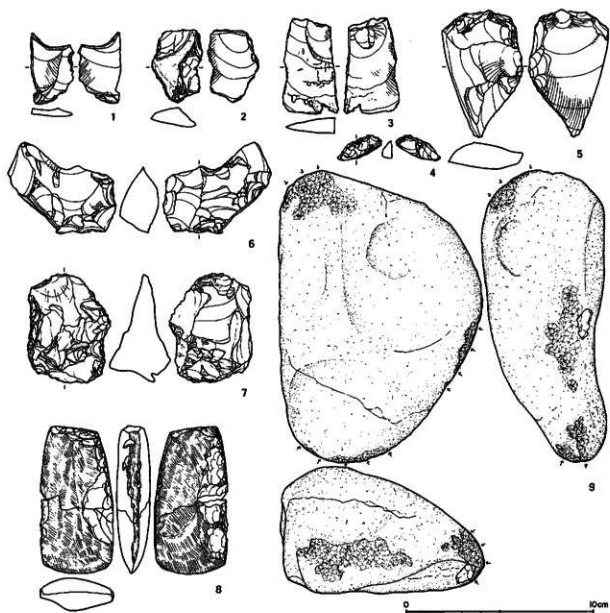
図IV-21 第VI層出土の土器(2)



図IV-23 第VI層出土の掲載石器分布図



図IV-22 第VI層出土の土器(3)



図IV-24 第VI層出土の石器

2 第Ⅷ層の調査

第Ⅷ層は土塁地区にプライマリーな状態で確認される。遺物は出土位置、レベルを記録して取り上げ、順次掘り下げて調査を行う。第Ⅷ層は縄文時代早期の遺物包含層である。遺構は検出されていない。遺物はJライン←→Nライン、42ライン←→40ラインの範囲でもも出土している。

(1)第Ⅷ層出土の遺物

土器 (図Ⅳ-25・26・27 図版17-1・2)

本層から66点出土している。その内訳はI群土器(58)、IV群土器(5)、V群土器(3)である。IV群土器、V群土器は、木根や小動物等による攪乱のための混入と思われる。分布は、大きくF・G-36・37とJ~M-41~45に集中する。集中毎の明確な文様構成・胎土の違いは認められなかった。器形は、復原個体がなく不明である。いずれも器厚はやや厚手である。

I群土器 (図Ⅳ-27-1~12)

1~3は口縁部破片である。1は口縁端部に縄端疔痕文、口縁部に2条の縄線文と縄端疔痕文が加えられている。体部は菱目状の捺糸文が施されている。器面調整は丁寧である。2は口唇部断面が尖るものである。体部の縄文は乱れ、自縄自巻的な原体を回転施文したものである。器面調整は粗雑である。3は口唇端部に縄端疔痕文、口縁上部に数条の絡糸体疔痕文が加えられている。器面調整は粗雑で凹凸している。4~12は体部破片である。4は無文地に、絡糸体疔痕文が施されている。5~12は、いずれも自縄自巻的な原体を回転し、菱目条の縄文が施され、7~11には縄端疔痕文が加えられている。12は短縄文が加えられている。器厚はやや厚手である。

石器 (図Ⅳ-25・26・27 図版17-3)

第Ⅷ層からは28点の石器等が出土した。内訳は、つまみ付ナイフ3点、Rフレイク1点、フレイク・チップ20点、すり石1点、礫△1点、礫・礫片2点である。これらは出土層位、地点等から前述したI群土器に伴うものと考えられる。以下、掲載遺物について記述する。

つまみ付ナイフ (13~15)

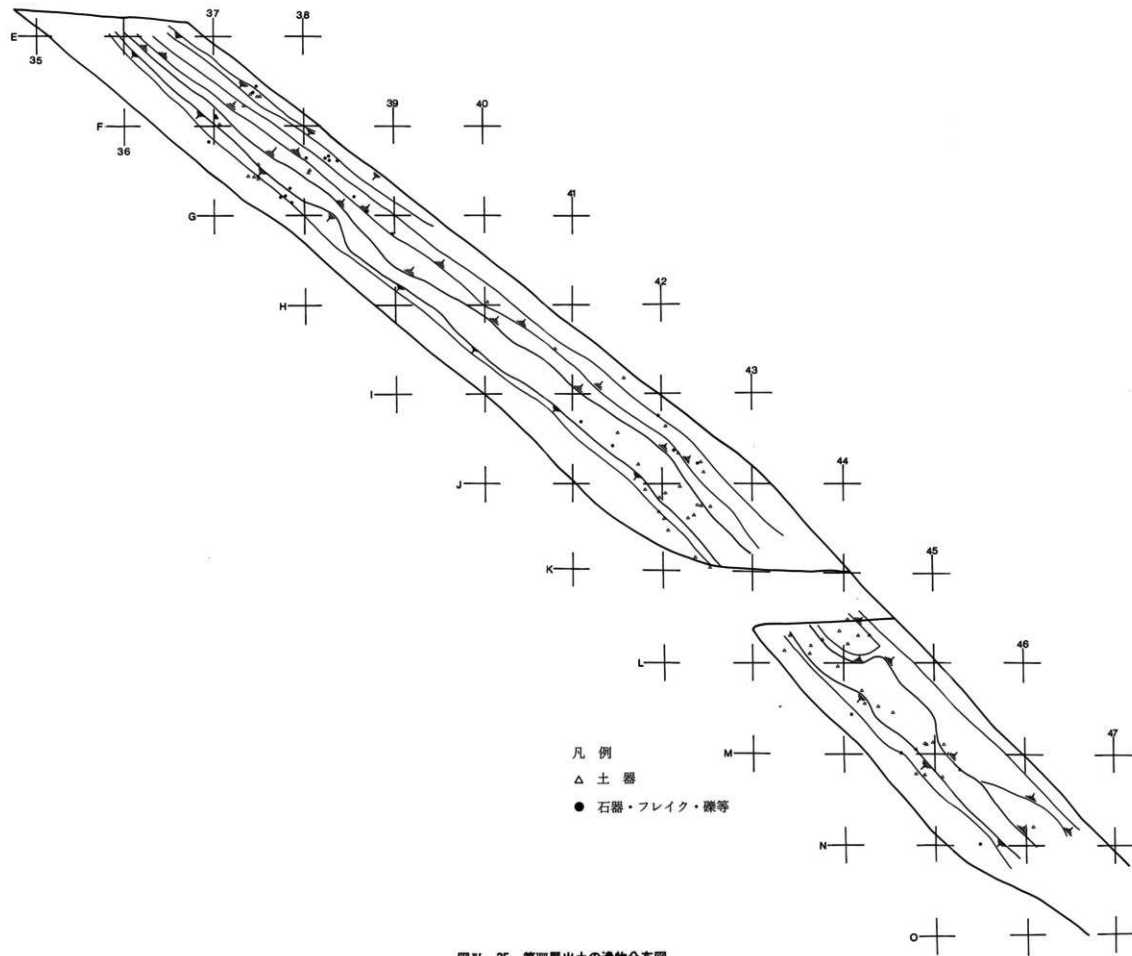
13は縦長剥片を素材とした硬質頁岩製のものである。形態は先端部が平坦で幅広となり厚さは0.4cmである。つまみ部分はバルブ側に作出され、頂部にはプラットホームが残されている。二次加工は背面全体と主剝離面つまみ部側縁および右側縁部に施されているが、背面周辺と主剝離面の右側縁部は細加工である。刃部は背面右側縁に施され、若干内湾している。14も縦長剥片を素材とした硬質頁岩製のものである。形態は上半部を欠失しているものの13と同じタイプのものである。二次加工は背面全体と主剝離面の周辺に細加工が施されている。刃部は13ほど明瞭に加工・使用痕を有しておらず、先端部周辺に若干細加工が施されているのみである。15も縦長剥片を素材とした硬質頁岩製のもので、つまみ部にはバルブ、プラットホームを残している。形態は13・14とは異なり、先端部は平坦だが幅は1.0cm足らずである。また、断面形も三角形となり、稜線は若干右による。二次加工は背面全体と主剝離面つまみ部および右側縁に施される。刃部は背面の右側縁にあり、張り出す。刃角は高い。

Rフレイク (16)

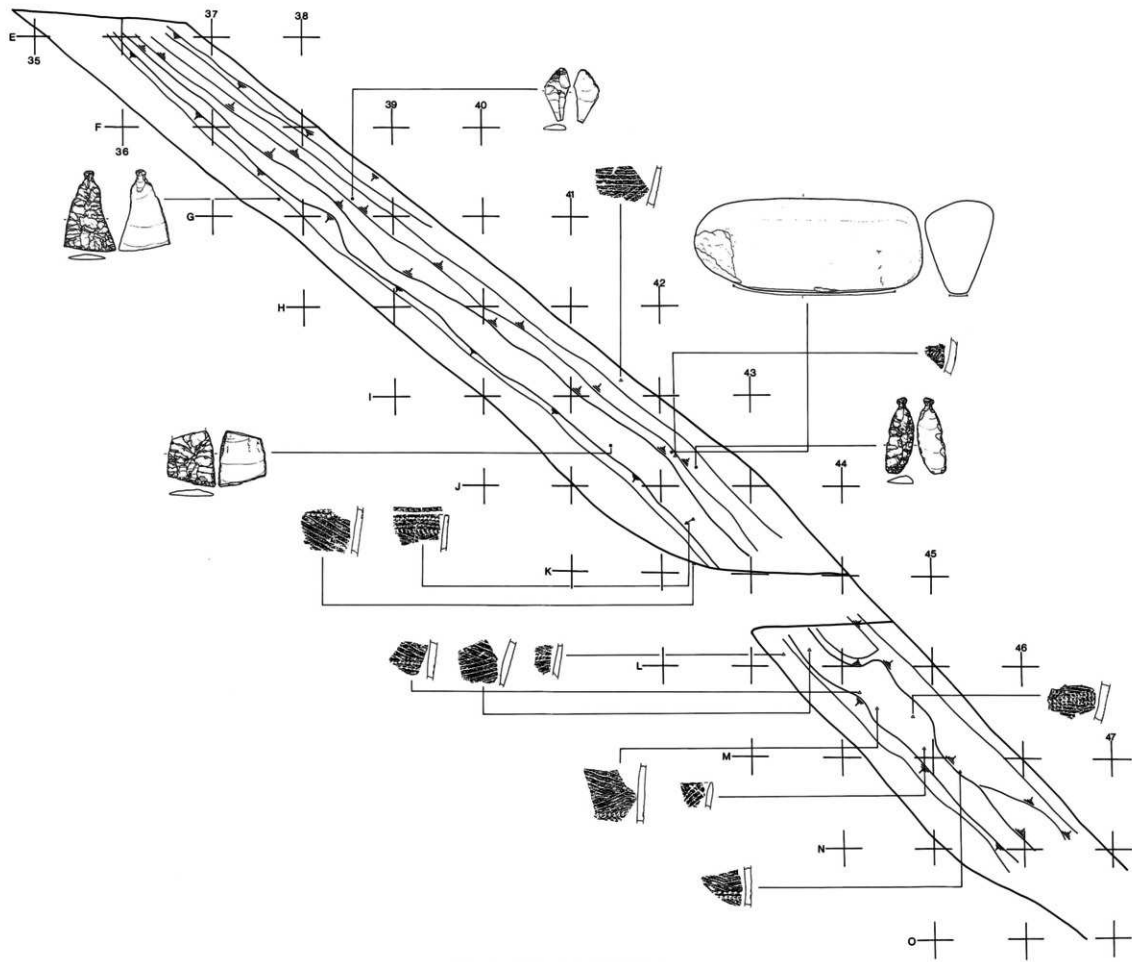
縦長剥片を素材とした硬質頁岩製のものである。背面上部は打面調整による加工痕で、二次加工痕は主剝離面の右側縁に若干残されているだけである。

すり石 (17)

断面形が三角形をなす砂岩製のものである。加工は左側縁に形成のためと思われる打ち欠きが施

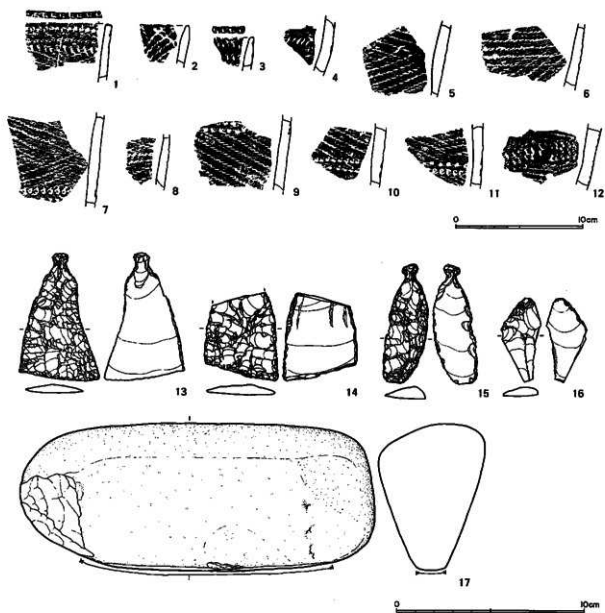


図IV-25 第八層出土の遺物分布図



図IV-26 第Ⅶ層出土の播磨遺物分布図

されているだけで、自然礫の形状をあまり変えていない。すり面は最大幅1.5cm程度である。



図IV-27 第Ⅶ層出土の遺物

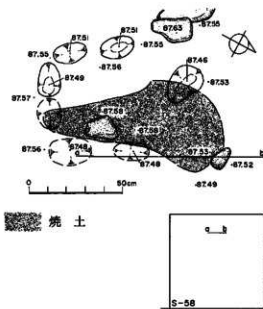
3 第I層～第IV層, 第IX層・第X層の調査

第I層は表土, 耕作土, 盛土等である。A・B地区は地山直上まで削平, 耕作によって攪乱されており, 遺物は細片化している。土墨地区の第I層は溝の掘り揚げ土と耕作土の移入土であるため, 第II層～第X層の土が混在しており, 第II層, 第IX層は基本的に無遺物層である。第VII層は水成二次堆積と考えられることから, 出土遺物は二次堆積物である。F-1は第X層上面で検出されたものである。第X層までの調査終了後, 2m×1mの小トレンチをほぼ10m 間隔に設定し, 旧石器確認調査を行う。遺構, 遺物は発見されなかった。

(1) 遺構

焼土 (F-1) (図IV-28, 図版18-1)

S-58の第X層上面で検出される。96cm×50cmの範囲に, 第X層が火を受けて赤橙色化している。周辺に火を受けたと思われる礫が数個あり, また焼土のまわりには炉石の抜き取り痕かと思われる浅いくぼみが発見されている。これらから見て, 1m×0.5mで, 南北に長い長方形の石組み炉があったものと推測される。構築時期は不明である。周辺から細片化したV群土器が出土していることから, 縄文時代のもと考えられる。



図IV-28 F-1 実測図

(2) 第I層～IV層出土の遺物

土器 (図IV-29・31・32 図版19・21)

I層～IV層から3,475点(表採を含む)出土している。その内訳はI群土器(25), II群土器(10), III群土器(6), IV群土器(160), V群土器(3,274)があり, このほか陶器類(169)が出土している。IV群土器とV群土器は, 調査区南側の土墨地区と耕作で地山まで攪乱されている東側の調査区境界部分とに遺物の集積が認められる。

I群土器 (7～9)

7は自縄自巻の原体を回転施文した縄文が施され, 縄端圧痕文が加えられている。8, 9は自縄自巻の原体を回転し, 2本一組の縄文が施されている。

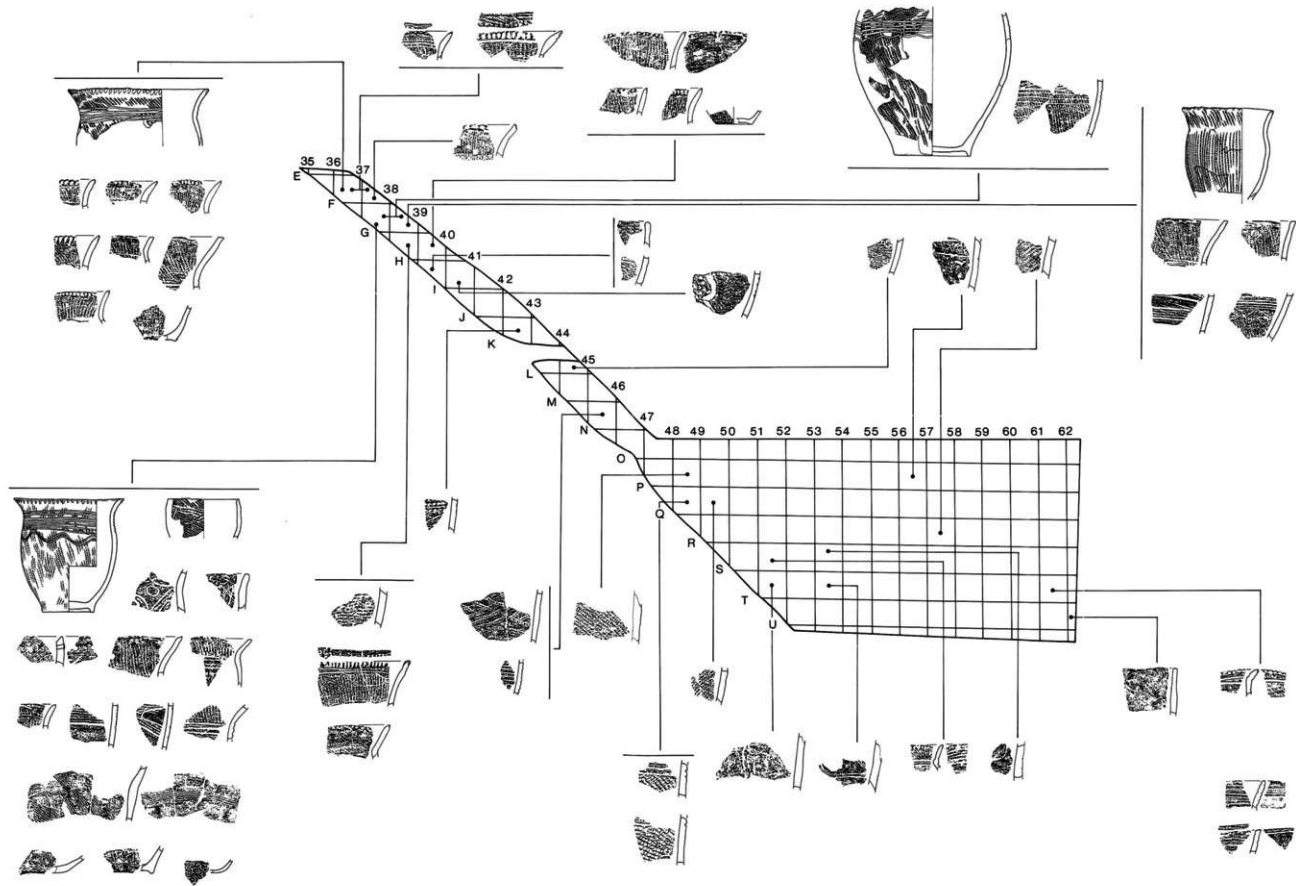
II群土器 (12)

12は複節縄文のみのものである。内面調整は丁寧でミガキ調整が施されている。

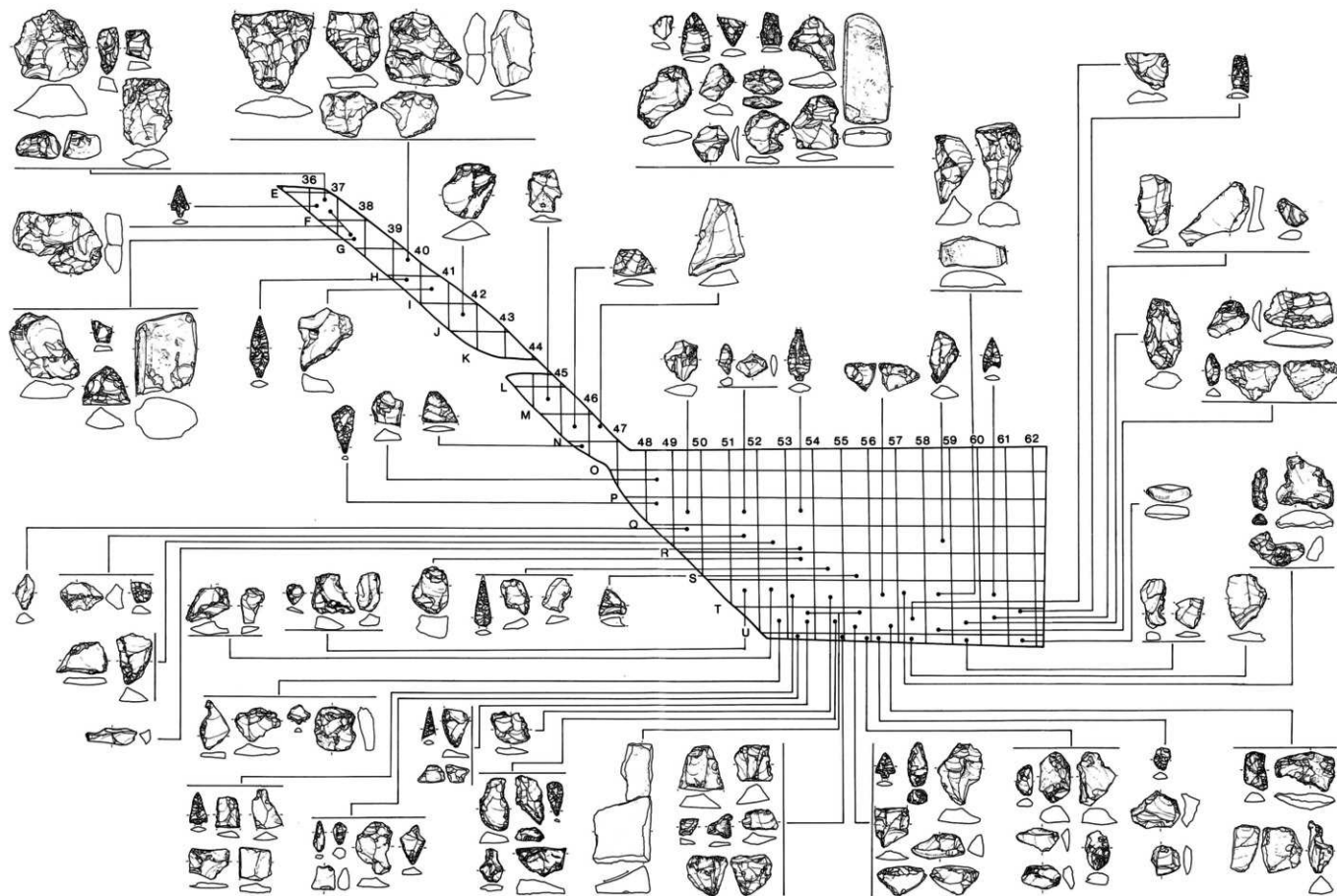
III群土器 (10・11)

10・11は同一個体で, 斜行縄文上に棒状工具による沈線文が加えられている。胎土は繊維・砂粒が多く, 脆弱である。調整は粗雑である。

IV群土器 (13～25)



図IV-29 第1層～第IV層の埴輪土器出土分布図



図IV-30 第I層～第IV層の掲載石器出土分布図

a類 (13~24)

13・14は斜行縄文が施された体部破片で、余市式と思われる。15~18は無文地に細い沈線文が加えられたもので、15は鋭く先端が尖った施文具で横位に沈線文が施されている。調整は内外面とも比較的丁寧である。16~18は2本一組の沈線で曲線的な文様が描かれている。トリサキ式と思われる。21・23は撚糸文が施されたもので、21は口唇端部・体部に網目状撚糸文が施されている。口唇部断面は丸味をもつ。内面調整は粗雑で、第VI層出土(図IV-21-16)のものとはやや異なる。23は不規則な単軸撚糸回転文と思われる。涌元式に相当するものと思われる。19は櫛状工具で下書きし、半截竹管状工具で刺突文を加えた後、太い沈線文で縁取りしている。大津式である。20・22・24は明瞭に帰属する時期を判定することが出来なかったものである。20は無文のもので、口唇断面は丸味をもち、内外面とも調整は粗雑である。胎土は砂粒が多い。22・24は縄文のみのもので、22は縄文が施されたのち、ナデ調整が加えられている。胎土には砂粒を多く含む。調整は内外面とも粗雑である。24は複節の斜行縄文が施されている。内面調整は丁寧である。

b類 (25)

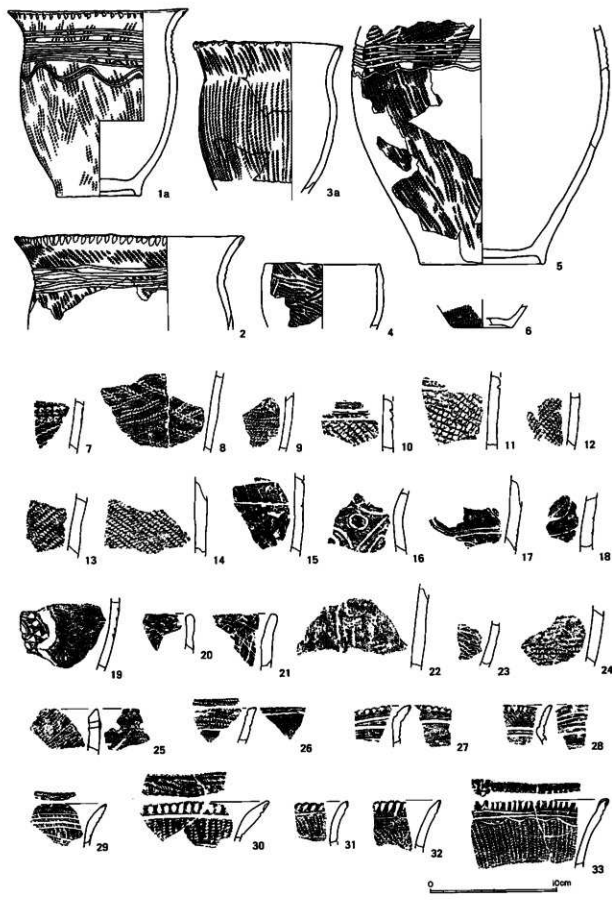
25は内面からの円形刺突文が加えられたもので、本遺跡から1点出土している。口唇部断面は切り出し状である。斜行縄文が施されている。胎土は少量の砂粒を含む。調整は比較的丁寧である。

V群土器 (1~6, 26~62)

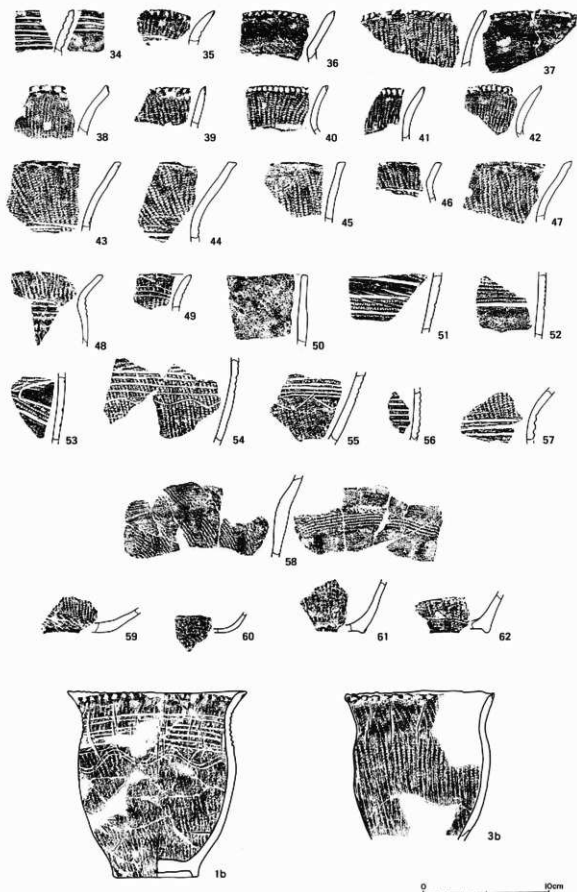
壺形土器 (1~3, 5, 6, 26~54, 56~62)

1は小型の壺形土器である。口唇断面は尖る。器面に縦走する縞縄文が施され、軽いナデ調整が加えられたのち、口唇部に篋状工具による横位からの刻みが、頸部には7条の沈線が、肩部分には2本一組の波状の沈線文が加えられている。内面調整は粗雑で、底部は揚げ底である。胎土は砂粒を含む。2は器面に斜行縄文が施され、軽いナデ調整が加えられたのち、口唇部に棒状工具による刻み、頸部下半には5条の沈線が加えられている。胎土は砂粒を含む。調整は粗雑である。3は口縁部にはやや斜位気味に、体部には縦走する縄文が施された後、口唇部に篋状工具による横位からの刻みが加えられている。5は頸部には横走ぎみに、体部には縦走ぎみの縞縄文が施されたのち、肩部分に横環する4条の沈線と、その下位に波状の沈線文が加えられている。

26~28・34は口縁部内面に沈線文が加えられているもので、26は口唇端部に縄文、体部には縄文を施文後に沈線で縁取りを加えている。このような体部文様はG-37・38に多く認められ、51~53は同一個体の可能性がある。27は口縁は波状で、突起をもつ。口頸部は幅の狭い頸部をもつものと思われる。口唇には棒状工具による刻みが加えられている。やや幅広いの頸部は無文で、沈線によって区画されている。内外面とも調整は丁寧である。28は内面に5条の沈線が加えられている。口縁部には斜行縄文が施され、口唇に棒状工具による刻み、頸部に沈線文が加えられている。34は内面に3条、外面は無文地上に7条の沈線文が加えられている。29~33・35は口唇部には刻み、口縁部上部に沈線文が加えられたものである。29は口唇端部に縄文が施され、外面は縄文が施されたのち、口唇には刻み、口唇直下に4条の沈線が加えられ、頸部には2本一組の鋸歯状の沈線文が加えられている。31は小型の壺形土器と思われる。33は縦走する縞縄文を施文後、口唇に貼付瘤と棒状工具による刻みを加え、その直下に2条の沈線と波状の沈線文が加えられている。36~42は口唇部に刻み目のみが施されたものである。36の頸部下半には沈線文が加えられている。37は口縁部内面にわずかに縦走する縄文が認められる。これは、器面調整に用いられた縄文が内面調整が粗雑なため残ってしまっただけのものと思われる。41は頸部下半に横走する縄文が施されている。43~48は口唇に刻み目をもたないものである。45・47の頸部下半には沈線が加えられている。49は口縁部に沈線文のみが加えられているものである。



図IV-31 第I層～第IV層出土の土器(1)



図IV-32 第I層～第IV層出土の土器(2)

50は無文のもので、IV群土器の可能性もある。51～58は口頸部ないし体部破片である。51～53は縄文を施文後に沈線で縁取りを加えている。26と同一個体の可能性がある。54は体部下半に斜位の縄文、下半に縦走する縄文が施され、4条の横環する沈線と波状の沈線が加えられている。56は無文地に沈線のみが施されたものである。58は外面に縦走する縞縄文が、内面に横走する縞縄文が施されている。6・60～62は底部破片である。60は丸底、61・62はやや揚げ底気味である。

鉢形土器（4・55）

4は小型のものである。口唇部は尖る。縄文は口縁部は斜位に、体部は、横走気味に方向を変え施文している。胎土に砂粒を多く含む。内面調整は比較的丁寧である。55は体部に縦走する縄文が施され、体部上半に横走する5条の沈線と鋸歯状の沈線文が加えられている。

皿形土器（56）

56は縄文・胎土から第VI層出土の図IV-21-9と同一個体と思われる。底部から大きく開き気味に立ち上がる。体部に縦走する縞縄文、底部付近に斜行の縞縄文を施文したのち、ナデ調整が加えられている。胎土は砂粒が少ない。内面調整は丁寧である。炭化物の付着は認められない。

石器（図IV-30・33・34・35 図版21・22）

第VI・VIII層以外から出土した石器等は、3,928点をかぞえる。その内訳は石鏃10点、石槍1点、石錐4点、つまみ付ナイフ1点、スクレイパー43点、楔形石器2点、石核81点、Uフレイク55点、Rフレイク11点、フレイク・チップ3,527点、石斧6点、たたき石2点、砥石6点、礫△137点、礫・礫片29点、その他13点である。これらの石器等は特に集中して出土したという傾向はなく、耕作された調査区内に散在して検出された。しかし、遺物の出土分布図からは、比較的調査区の東側に多く出土するという傾向が窺える。さらにIV群・V群土器の出土分布に重なる傾向も認められることから、石器等の多くがIV群・V群土器に伴う可能性が強いと思われる。

石鏃（1～9）

9点図示した。1・2は無茎鏃、3～9は有茎鏃である。1は基底部が深く湾入したもので、両側縁が張り出し、基部左先端が再加工のため短い。二次加工は背面全面と主剝離面の周辺に施されている。石材は、めのう質頁岩である。2は尖頭部および左側縁を欠失している。二次加工は、1と同様に主剝離面を残しており、基底部は若干湾入する。石材は硬質頁岩である。3～5・9は明瞭なかえしを有するものである。基部は、4以外欠失しているもの棒状になると思われる。石材は3がめのう質頁岩、4・5・9が硬質頁岩である。7・8は3～5ほどかえしがきつなく、狭長なタイプのものである。6も先頭部しか残っていないが同タイプのものであろう。石材は、いずれも硬質頁岩。

石槍（10）

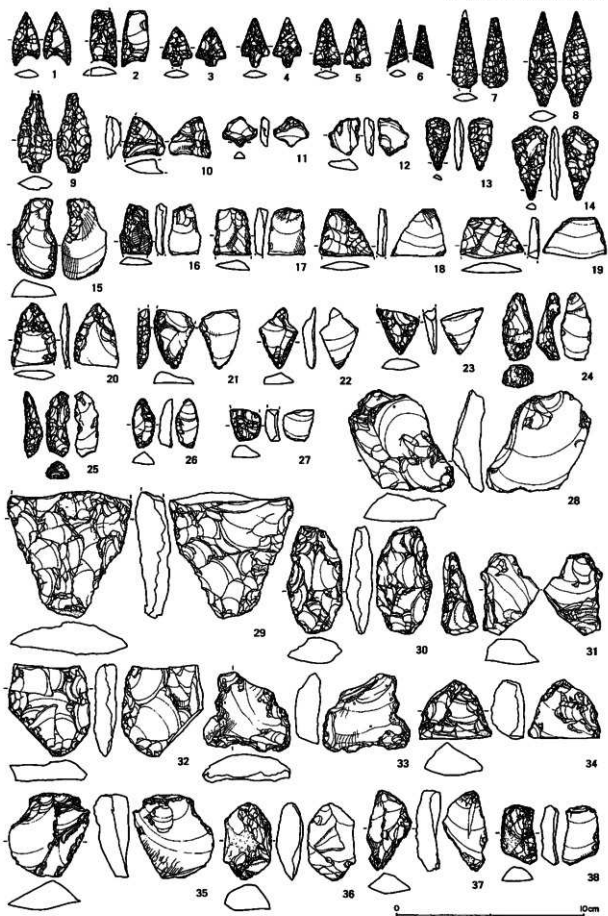
10は尖頭部・基部ともに欠失しており、形状は不明である。断面形は、主剝離面が比較的平坦なため三角形になるものと思われる。石材は硬質頁岩。

石錐（11～14）

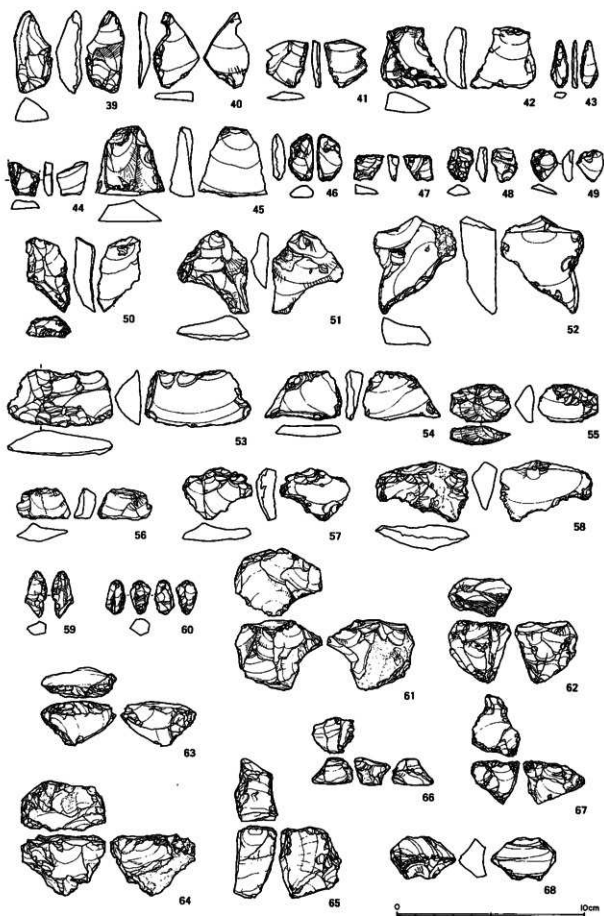
4点とも図示した。11は剥片の一端に刃部を作出したものである。二次加工は背面の刃部周辺と主剝離面の上部に施されるのみである。12は礫片の一端に刃部が作出されており、先端部は摩滅している。13・14は、両面に二次加工が施された扁平なタイプのものである。先端部は比較的鋭利で、二次加工は細かい。石材は11・14が硬質頁岩、12・13が珪質頁岩である。

つまみ付ナイフ（15）

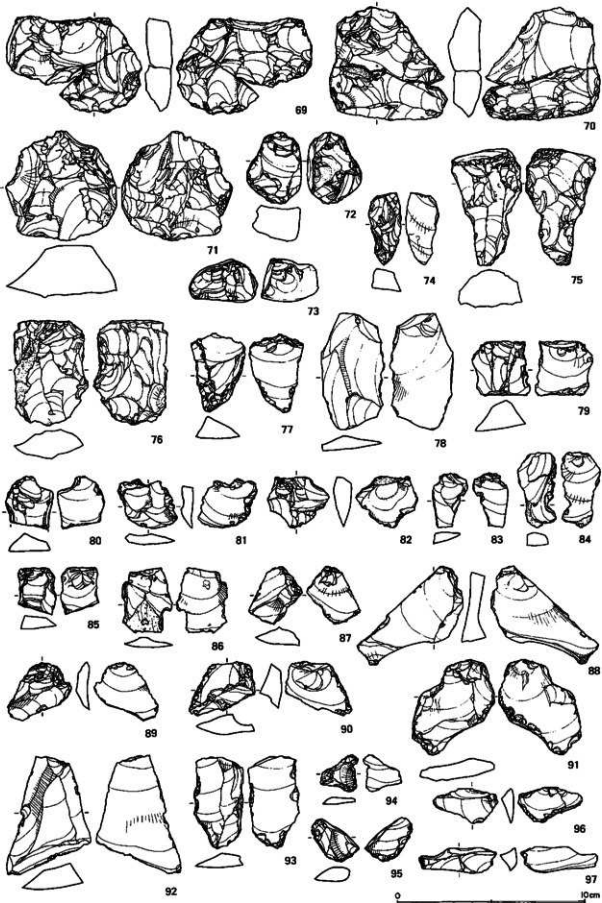
15は縦長剥片を素材としたもので、背面上部にはバルブが残されている。二次加工は、背面周辺と



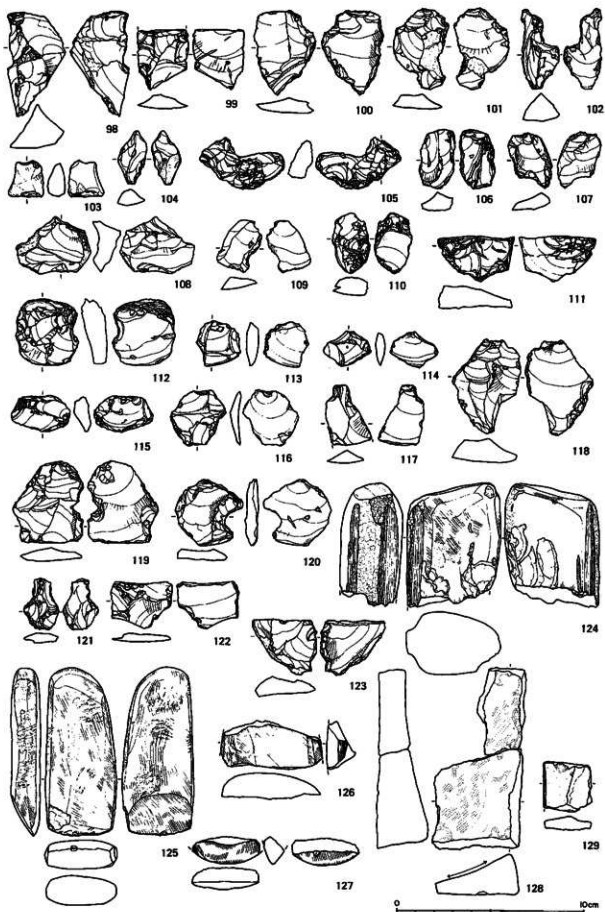
図IV-33 第I層～第IV層出土の石器(1)



図IV-34 第I層～第IV層出土の石器(2)



図IV-35 第I層～第IV層出土の石器(3)



主剥離面のつまみ部に若干施される。刃部は背面左側縁に作出され、緩くカーブする。刃角は高い。第VIII層から出土するものとは形状を異にし、所謂「靴形石器」と呼ばれるものと類似する。石材はめのである。

スクレイパー (16~58)

全点図示した。16~23はスクレイパーとしたものの、ナイフ的な形状を示すものである。このうち16・17は縦長剥片を素材とし、柄部を有したものである。二次加工は背面のみに施され、周辺は細加工である。石材は16がめのう、17が硬質頁岩である。18~23は縦長剥片を素材とし、明瞭な柄部はなく、槍形になるものである。二次加工は18・19・23が背面全体に、20~22が背面と主剥離面の周辺に施される。石材は全て硬質頁岩である。24~27は縦長剥片を素材としたもののうち、刃角の高い刃部を有するもので、断面形は三角形状になる。石材は24・26が珪質頁岩、25・27がめのうである。28~52は縦長剥片を素材としているものの、形状が不定形で、比較的刃角の低い刃部が周辺に施されているものである。このうち、29は出土した剥片石器の中でもっとも大きいものであるが、二次加工は粗く明瞭な刃部が作出されていないため、未成品の可能性がある。石材は28~30・32・35・40・44・45・52が硬質頁岩、34・37・39・41~43・46・50がめのう質頁岩、31・33・36・38・49・51がめのう、48が珪質頁岩である。53~58は横長剥片を素材としたものである。形状は不定形で、刃部は周辺の一部に作出される。石材は53が硬質頁岩、54がめのう質頁岩、55・56が珪質頁岩、57・58がめのうである。

楔形石器 (59・60)

59はめのう質頁岩製のもので、上部に潰れ痕が認められる。60は六角形状の断面を有し、上下ともに潰れ痕が認められる。石材はめのである。

石核 (61~76)

16点図示した。ほとんどのものは表皮部分を残しており、原材は小型の角礫、および円礫と思われる。剥片剥離は打面作成後に打撃面を移動しているものが多く、ほとんどのものは立方体状の残核であるが、69~71のような扁平なものも一部見受けられる。石材は61~63・66・67・69~71・74がめのう、64・65・75・76がめのう質頁岩、68が珪質頁岩、72・73が硬質頁岩である。

Uフレイク (77~115)

55点出土したうち、39点を図示した。分布は土壘地区南端にわずかあるものの、調査区の東側に偏っている。形態的特徴は特に認められないため、剥片の打面を上にして図示した。使用痕は側縁部や先端部に刃潰れ状になって認められるものが多い。石材は図示した39点のうち、硬質頁岩が15点、めのうが10点、めのう質頁岩が9点、珪質頁岩が5点である。

Rフレイク (116~123)

11点出土したうち、8点を図示した。分布は出土数量が少ないが、ほかの石器等と一致する。形状はUフレイク同様に不定形なものも多く、剥片の一部にあまり明瞭ではない二次加工がわずかに施されている。石材は、めのうが4点、硬質頁岩が3点、めのう質頁岩が1点である。

石斧 (124~127)

6点出土したうち、125以外はすべて破片である。124は擦り切りのある石斧の未成品、もしくは破損品と思われる。125は板状礫を素材としたもの。刃部は片刃で、刃こぼれが認められるものを入念に研磨が施されている。刃部以外の成形は、周辺に軽い研磨と敲打が施されるのみである。127は凸状の刃部を有した破片で、両面とも入念に研磨されている。石材はいずれも緑色泥岩である。

砥石 (128・129)

6点出土したうちの3点は、土塁地区の盛土中から検出されたもので近・現代のもの可能性もあるため掲載しなかった。128・129は調査区の東側、発掘区境界付近から出土したものである。いずれも板状礫を利用したもので、砥面を一面ずつ有している。128の砥面は凹状に窪んでおり、使用痕は顕著である。129は128より粒状性の細かい砥石である。石材は2点とも砂岩である。

表-1 出土遺物一覧

種 類	出土場所	一括出土遺物	包 含 層				表 採	合 計
			I・IV層	VI層	VII層	計		
I群土器			22	15	58	95	3	98
II群土器			10			10		10
III群土器			6			6		6
IV群土器			156	61	5	222	4	226
V群土器		542	2,967	392	3	3,362	307	4,211
陶磁器類等			154			154	15	169
土器等合計		542	3,315	468	66	3,849	329	4,720
石鏃		2	10			10		12
石槍			1			1		1
石鏃			3			3	1	4
つまみ付ナイフ			1		3	4		4
スクレイパー		1	38			38	5	44
楔形石錐			2			2		2
石核		3	63	4		67	18	88
Uフレイク		1	50	5		55	5	61
Rフレイク			6	4	1	11	5	16
フレイク・チップ		600	3,271	323	20	3,614	256	4,470
石斧			5	1		6	1	7
たたき石				2		2	2	4
くぼみ石				2		2		2
すり石					1	1		1
台石・石皿		2		5		5		7
砥石			6			6		6
有為の鏃		2	116	9	1	126	21	149
鏃・鏃片		1	27	16	2	45	2	48
その他			13	3		16		16
石器等合計		612	3,614	347	28	4,012	316	4,942

表-2 一括出土遺物実測土器一覧

挿 図	図 版	番 号	層 位	発掘区	遺物番号	分 類	大 小 (cm)			破片数	備 考
							口径	底径	器高		
IV-3	9-5	1	VI層上	I-39	16~22, 24, 34	V	(-)	8.2	(25.3)	147	一括出土遺物 1
IV-5	10-3	1	VI層	I-40	39, 62	V	14.0	(-)	(16.5)	28	一括出土遺物 2
			盛土	G-37	9, 65						
			V層直下	#	32						
			盛土	F-36	4						
					一括2-1						
		# 2-3									
		# 2-5									
		# 2									
IV-5	10-4	2	盛土	G-37	9	V	8.5	4.8	11.0	22	一括出土遺物 2
			VI層下	#	136, 137						
			VI層	#	149						
IV-5	10-5	3	盛土	G-37	一括2-5	V	7.0	(-)	(6.7)	9	一括出土遺物 2
			VI層中	#	一括2-1						
				#	2-3						
					65						
					127, 128						
IV-8	11-2	1	V層直下	G-37	52, 54, 55	V	25.5	(-)	(13.5)	20	一括出土遺物 3
			盛土	#	65						
					一括3-1						
IV-8	11-3	2	VI層直下	G-37	1, 2	V	9.7	4.4	9.4	25	一括出土遺物 3
			V層上	#	104, 105						
IV-8	11-4	3	V層直下	G-37	1, 2, 3	V	22.3	8.9	27.3	144	一括出土遺物 3
			盛土	#	62, 65						
			VI層上	#	99						

表-3 一括出土遺物掲載拓本一覧

押印	図版	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合関係	備考
IV-9	10-6	1	G-37	27, 65, 35, 36	盛土・V層直下	V		一括出土遺物 4
				82, 122	V層上・VI層中			#
IV-11	12-2	1	F-37	55	V層直下	V		一括出土遺物 5
IV-13	12-2	1	F-36	4, 64	盛土・V層直下	V		一括出土遺物 6
IV-13	12-2	2	F-36	69	V層直下	V		#

表-4 一括出土遺物掲載石器一覧

()は、現存値

押印	図版	番号	発掘区	遺物番号	層位	器種名	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
IV-5	12-3	2	G-37	8	VI層上	石皿	36.3×36.1×9.5	18,400.0	安山岩	一括出土遺物 2
IV-4	11-4	4	G-37	4	VI層上	スクレイパー	3.0×1.7×0.62	3.4	燧石頁岩	一括出土遺物 3
IV-11	12-3	5	F-36	1	VI層上	石皿	33.3×29.6×7.5	10,600.0	安山岩	一括出土遺物 5

表-5 遺物集中地区出土掲載石器等一覧

()は、現存値

押印	図版	番号	発掘区	遺物番号	層位	器種名	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
IV-15	12-3	1	F-36	216	VI層上	台石	38.3×28.3×7.9	12,700.0	安山岩	S-1
#	#	2	#	217	#	#	32.8×26.8×11.1	14,200.0	#	S-2
#	#	3	#	218	#	#	39.0×27.7×7.8	12,500.0	#	S-3
#	#	4	G-37	130	#	鏃	32.3×25.1×9.3	10,500.0	#	S-4
#	#	5	G-38	27	#	台石	30.6×26.2×13.0	13,200.0	#	S-5
#	#	6	H-38	52	#	#	22.3×17.1×8.2	3,300.0	#	S-6

表-6 フレイク集中出土掲載石器・接合資料等一覧

()は、現存値

押印	図版	番号	発掘区	遺物番号	層位	器種名	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
IV-17	13-2	1	G-37	31	VI層	石鏃	(3.1)×1.2×0.5	(1.4)	硬質頁岩	尖頭部・基部欠失
#	#	2	#	#	#	#	(2.6)×1.0×0.4	(0.7)	硬質頁岩	尖頭部欠失
#	13-3	3	#	30	#	剥片接合資料	6.7×8.1×2.1	84.7	めのう	剥片22点接合
#	#	4	#	29-30	#	剥片・石鏃接合資料	6.8×6.9×4.9	133.3	#	剥片3点・石鏃1点接合
#	#	5	#	30	#	剥片接合資料	8.4×6.8×4.4	73.0	硬質頁岩	剥片42点接合
#	14-1	6	#	29	#	石核	5.4×6.8×2.4	87.5	#	#
#	#	7	#	30	#	フレイク	6.9×5.6×2.0	65.2	#	#
#	#	8	#	28	#	Uフレイク	4.5×4.9×2.1	40.3	めのう	#
#	#	9	#	30	#	フレイク	3.9×3.7×1.1	14.0	#	#
#	#	10	#	29	#	石核	5.1×3.1×1.2	18.3	#	#
#	#	11	#	30	#	フレイク	3.6×4.0×1.2	10.0	#	#
#	#	12	#	#	#	#	3.6×4.9×1.5	21.6	#	#
#	#	13	#	#	#	#	3.5×3.3×1.4	15.2	#	#
#	#	14	#	#	#	#	5.0×3.1×0.9	11.2	#	#
#	#	15	#	#	#	#	3.3×3.0×0.7	5.3	#	#
#	#	16	#	86	#	#	4.5×3.1×1.1	17.0	#	#
#	#	17	#	30	#	#	2.7×2.8×0.5	2.7	硬質頁岩	#

表-7 第VI層出土掲載実測土器一覧

押印	図版	番号	層位	発掘区	遺物番号	分類	大きさ(cm)			破片数	備考
							口徑	底径	高さ		
IV-20	15-1	1a	VI層	I-40	32,34,35,41,44,45,47,49,50,51	IV a	28	(-)	(14.3)	16	
			VI層	I-40	63,64						
			盛土	I-40	7						
			#	F-36	3						
IV-20	15-2	2a	盛土	G-37	6	V	16.5	(-)	(11.6)	14	
			VI層下	F-36	205,214,215						
			盛土	F-36	4, 21						
IV-20	15-3	3	盛土	G-37	17	V	20.6	7.0	25.2	32	
			#	F-36	3, 4, 15, 25, 21						
			V層直下	F-36	44						
			VI層上	F-36	140						
			I層	G-37	14						
			盛土	G-38	1						

IV-20	15-4	4	盛土	G-37	21, 62, 65	V	25.0	(-)	(12.0)	16
			V層直下	G-37	48					
			VI層上	G-37	93					
IV-20	15-5	5	盛土	G-38	1	V	22.6	(-)	(5.0)	6
			V層直下	F-36	43, 66					
IV-20	15-6	6	VI層中	I-39	35, 36, 37, 38	V	33.0	(-)	(11.3)	24
			盛土	I-39	1, 4, 19					
			VI層上	I-39	14					
			VI層	I-39	23					
			V層上	I-39	39					
			I層	H-39	24					
			V層上	H-39	35					
			盛土	H-39	19, 26					
			V層上	H-39	44					
			IV-21	15-7	7a					
VI層	F-36	20								
VI層直上	F-36	209								
IV-21	15-8	8a	盛土	F-36	15	V	27.0	(-)	(6.1)	11
			I層	H-38	11					
			V層上	H-39	57, 59					
			VI層	H-39	73					
			盛土	F-36	3					
IV-21	15-9	9	#	H-38	8	V	24.8	(-)	(5.0)	11
			#	G-37	17					
			IV層下	F-37	39					
			V層直下	F-37	86					
			VI層上	F-37	110					
			盛土	F-36	3, 4					
			#	F-37	6					
			VI層	F-36	20					
			盛土	G-37	9, 21					
			VI層上	G-37	76					

表-8 第VI層出土掲載拓本一覽

押印	図版	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合関係	備考
IV-21	16-1	10	F-36	97	VI層上	V		
#	#	11	M-45	7	#	I		
#	#	12	I-40	33	VI層	#		
#	#	13	F-35	4	VI層下	IVa		
#	#	14	J-41	15, 17	VI層	#		
#	#	15	H-39	102	VI層下	#		堂林式の可能性もある。
#	#	16	I-40	39, 42	VI層	#		円筒土層下層C式の可能性がある。
#	#	17	#	71	V層上	#		
#	#	18	#	54	VI層	#		
#	#	19	I-39	12	#	#		
#	#	20	J-41	14	#	#		
#	#	21	H-39	67	VI層上	#		
#	#	22	F-36	176	VI層	V		
#	#	23	#	192	VI層下	#		
#	#	24	#	47	V層直下	#		
#	#	25	I-39	29	VI層上	#		
#	#	26	F-36	20, 213	VI層・VI層下	#		
#	#	27	H-38	47	#	#		
#	#	28	F-36	135, 137	VI層上	#		
#	#	29	F-37	95	V層直下	#		
#	#	30	F-37	55	V層直下	#		
#	#	31	H-39	75	VI層上	#		
#	#	32	I-39	26	#	#		

#	#	33	F-36	208	VI層下	V		
#	#	34	#	202	#	#		
#	#	35	F-37	126	VII層上	#		
#	#	36	F-36	20	VI層	#		
#	#	37	#	172	#	#		
#	#	38	#	81, 174	V層直下・VI層	#		
#	#	#	F-37-G-37	125, 6	VII層下・盛土	#		
#	#	39	F-36	196	VI層下	#		
#	#	40	F-37	73, 78	V層直下	#		

表-9 第VI層出土掲載石器一覧

()は、現存値

押印	図版	番号	発掘区	遺物番号	層位	器種名	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
IV-24	16-2	1	H-39	61	VI層上	Uフレイク	3.7×2.3×0.4	3.7	砂岩	
#	#	2	I-40	60	VI層	#	3.8×2.7×1.0	10.3	硬質頁岩	
#	#	3	H-39	77	VI層上	#	5.0×2.9×0.8	11.9	砂岩	
#	#	4	F-36	101	#	Rフレイク	1.4×2.4×0.5	1.2	めう	石器片?
#	#	5	N-45	7	VII層	#	6.6×4.2×1.4	34.5	硬質頁岩	
#	#	6	F-36	119	VI層上	石核	4.8×5.7×2.0	39.6	めう	
#	#	7	#	19	VI層	#	5.8×4.4×3.2	59.8	#	
#	#	8	G-37 F-36	# 181	盛土 V層	石斧	7.7×3.8×1.7	76.1	砂岩	
#	#	9	H-39	94	#	たたき石	15.3×10.9×6.6	1,319.0	安山岩	

表-10 第VII層出土掲載石本一覧

押印	図版	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合関係	備考
IV-27	17-2	1	K-42	9, 14	VII層	I		
#	#	2	M-44	17	VII層中	#		
#	#	3	L-44	9	VII層下	#		
#	#	4	J-42	4	#	#		
#	#	5	L-43	3	VII層中	#		
#	#	6	I-41	1	VII層下	#		
#	#	7	M-44	21	VII層中	#		
#	#	8	L-43	5	#	#		
#	#	9	K-42	12	#	#		
#	#	10	M-44	25	VII層下	#		
#	#	11	N-45	33	VII層	#		
#	#	12	M-44	15	VII層中	#		

表-11 第VIII層出土掲載石器一覧

()は、現存値

押印	図版	番号	発掘区	遺物番号	層位	器種名	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
IV-27	17-3	13	G-37	154	VIII層	つまみ付ナイフ	6.6×4.2×0.4	10.5	硬質頁岩	
#	#	14	J-41	22	VIII層中	#	(4.7)×3.9×0.6	(9.6)	#	上半部欠失
#	#	15	J-42	8	#	#	6.3×2.3×0.7	7.9	#	
#	#	16	G-38	21	VIII層	Rフレイク	4.4×2.1×0.5	3.5	#	
#	#	17	J-42	5	VIII層下	すり石	7.8×18.8×5.6	1,211.0	砂岩	

表-12 第I～IV層出土掲載実測土器一覧

押印	図版	番号	層位	発掘区	遺物番号	分類	大きさ(cm)			破片数	備考
							口径	底径	高さ		
IV-31	19-1	1a	盛土	G-37	27	V	14.2	6.8	14.8	34	
#	19-2	2	盛土	F-36	3	V	18.0	(-)	(6.6)	3	
#	19-3	3a	盛土	G-38	1	V	11.8	(-)	(11.5)	16	
#	19-4	4	I層	G-37	14	V	9.0	(-)	(5.1)	3	
				6							
#	19-5	盛土 I層 盛土	G-37 # G-38	# I 1, 3		V	19.0	10.0	18.0	40	

表-13 第 I~IV層出土掲載拓本一覧

押印	図版	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合関係	備考
IV-31	20	6	H-39	17	盛土	V		
#	19-6	7	K-42	1	#	I		
#	#	8	N-45	1	#	#		
#	#	9	L-44	8	風倒木	#		
#	#	10	Q-48	13	I層	III		
#	#	11	#	#	#	#		
#	#	12	Q-49	5	#	IV a		
#	#	13	R-57	2	#	#		
#	#	14	P-48	1	#	#		
#	#	15	P-56	2	#	#		
#	#	16	G-37	2	盛土	#		
#	#	17	T-53	17	I層	#		
#	#	18	S-63	7	#	#		
#	#	19	I-40	17	盛土	#		
#	#	20	I-39	2	#	#		
#	#	21	G-37	21	#	#		
#	#	22	T-51	13	I層	#		
#	#	23	I-39	10	盛土	#		
#	#	24	H-38	5	#	#		
#	#	25	G-37	15	I層	IV b		
#	20	26	表押	72	-	V		
#	#	27	T-61	4	I層	#		
#	#	28	S-51	8	#	#		
#	#	29	F-36	4	盛土	#		
#	#	30	F-36 G-37	15, 24	#	#		
#	#	31	F-36	73	IV層下	#		
#	#	32	#	3	盛土	#		
#	#	33	H-38	3, 8	#	#		
IV-32	#	34	表押	61	-	#		
#	#	35	F-36	4	盛土	#		
#	#	36	H-38	29	V層上	#		
#	#	37	H-39	30, 31	#	#		
#	#	38	F-37	1	盛土	#		
#	#	39	H-39	48	V層上	#		
#	#	40	F-36	15	盛土	#		
#	#	41	H-39	38	V層上	#		
#	#	42	F-36	4	盛土	#		
#	#	43	G-38	1	#	#		
#	#	44	F-36	14	#	#		
#	#	45	G-38	1	#	#		
#	#	46	F-36	15	盛土	#		
#	#	47	G-37	9	#	#		
#	#	48	#	17	#	#		
#	#	49	#	21	#	#		
#	#	50	U-62	3	I層	#		
#	#	51	G-38	3	盛土	#		
#	#	52	G-37	14	I層	#		
#	#	53	#	21	盛土	#		
#	#	54	G-37 G-38	17, 6	#	#		
#	#	55	#	1	#	#		
#	#	56	N-45	16	風倒木	#		
#	#	57	G-37	21	盛土	#		
#	#	58	#	6, 17	#	#		
#	#	59	#	65	#	#		
#	#	60	#	21	#	#		
#	#	61	F-36	72	IV層下	#		
#	#	62	G-37	9	盛土	#		

表-14 第I~IV層出土掲載石器一覧

()は、現存値

種別	型版	番号	発掘区	遺物番号	層位	器種名	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備 考
IV-33	21	1	T-60	12	I層	石鏃	2.8 × 1.4 × 0.4	1.1	めの質頁岩	
		2	U-61	1		石鏃片	(2.9) × (1.3) × 0.4	(1.8)	硬質頁岩	尖頭部~基部欠失
		3	U-55	33		石鏃	(2.1) × 1.6 × 0.4	(0.3)	めの質頁岩	
		4	F-37	5	盛土		2.6 × 1.4 × 0.4	0.9	硬質頁岩	
		5	T-53	6	I層		2.6 × 1.4 × 0.4	1.0		
		6	U-53	15		石鏃片	(2.3) × 1.1 × 0.4	(0.6)		尖頭部・基部欠失
		7	S-54	6		石鏃	(3.7) × 1.3 × 0.4	(1.5)		
		8	I-39	6	盛土		5.0 × 1.5 × 0.6	3.2		
		9	Q-53	5	I層		4.2 × 1.8 × 0.7	4.2		尖頭部欠失
		10	S-55	3		石鏃片	2.1 × 2.1 × 0.7	2.7		尖頭部・基部欠失
		11	U-52	15		石鏃	1.6 × 1.8 × 0.3	1.2		
		12	表探	49	-		2.0 × 1.5 × 0.5	1.8	珧質頁岩	
		13	U-54	9	I層		2.7 × 1.2 × 0.2	1.2		
		14	Q-48	3			3.9 × 1.8 × 0.3	2.7	硬質頁岩	
		15	U-54	8		つまみ付ナイフ	4.2 × 2.3 × 0.9	9.1	めのう	
		16	表探	37	-	スクレイパー	2.6 × 1.7 × 0.4	2.4		下半部欠失
		17	T-53	12	I層		2.5 × 2.0 × 0.5	3.1	硬質頁岩	
		18	O-45	1	風倒木		(2.5) × 2.8 × 0.4	(2.9)		
		19	N-45	15			(2.1) × 3.3 × 0.5	(3.8)		
		20	表探	38	-		(3.4) × 2.3 × 0.5	(3.8)		
		21	U-53	19	I層		3.1 × 2.1 × 0.6	4.4		上半部欠失
		22	H	4			3.2 × 2.0 × 0.6	3.0		
		23	表探	68	-		(2.4) × 2.3 × 0.6	(2.5)		
		24	U-55	10	I層		3.6 × 1.6 × 1.2	4.5	珧質頁岩	
		25	T-57	1			3.5 × 1.2 × 0.9	2.9	めのう	
		26	U-58	4			2.6 × 1.2 × 0.7	1.4	珧質頁岩	
		27	R-51	6			1.7 × 1.6 × 0.7	2.0	めのう	上半部欠失
		28	C-37	4	盛土		5.3 × 5.6 × 1.4	35.3	硬質頁岩	
		29	H-39	3			(6.7) × 6.5 × 1.7	(66.9)		上半部欠失
		30	U-59	2	I層		5.7 × 2.9 × 1.3	22.1		
		31	V-55	13			4.3 × 3.1 × 1.3	17.3	めのう	
		32	H-29	13	盛土		4.8 × 4.3 × 1.0	27.3	硬質頁岩	
		33	T-57	1	I層		4.2 × 4.6 × 1.3	27.1	めのう	
		34	G-37	4	盛土		3.1 × 3.8 × 1.7	20.1	めの質頁岩	
		35	J-41	24	I層以上		4.4 × 4.3 × 1.5	24.6	硬質頁岩	
		36	V-55	13	I層		4.1 × 2.5 × 1.4	14.0	めのう	
		37	R-58	2			4.2 × 2.4 × 1.1	8.8	めの質頁岩	
		38	U-56	6			3.1 × 1.9 × 0.8	5.3	めのう	
IV-34		39	U-55	17			4.2 × 1.9 × 1.3	9.2	めの質頁岩	
		40	U-52	2			4.0 × 2.4 × 0.5	3.9	硬質頁岩	
		41	V-59	6			2.5 × 2.2 × 0.4	2.4	めの質頁岩	上半部欠失
		42	T-51	4			3.2 × 3.4 × 1.1	11.8		
		43	V-53	8			2.5 × 1.4 × 0.3	0.6		
		44	G-37	23	盛土		(1.7) × 1.6 × 0.4	(1.5)	硬質頁岩	上半部欠失
		45	V-54	1	I層		(3.7) × 3.6 × 1.1	(12.3)		下半部欠失
IV-36	21	46	V-55	5	I層	スクレイパー	2.5 × 1.3 × 0.7	2.3	めの質頁岩	
		47	V-64	1			1.3 × 1.5 × 0.5	1.2		
		48	V-56	7			1.7 × 1.3 × 0.6	0.7	珧質頁岩	
		49	T-51	2			1.7 × 1.4 × 0.5	0.7	めのう	
		50	U-54	17			3.9 × 2.3 × 1.2	7.3	めの質頁岩	
		51	表探	66	-		4.3 × 3.7 × 0.9	10.9	めのう	
		52	I-40	6	盛土		5.1 × 4.3 × 1.4	34.2	硬質頁岩	
		53	U-58	4	I層		2.9 × 5.6 × 1.3	22.9		
		54	R-52	1			2.6 × 4.0 × 0.6	6.9	めの質頁岩	
		55	表探	37	-		2.0 × 3.1 × 1.0	3.8	珧質頁岩	
		56	V-54	1	I層		1.6 × 2.8 × 0.9	3.1		
		57	U-52	2			2.6 × 3.7 × 0.9	7.3	めのう	
		58	U-56	6			3.2 × 4.9 × 1.3	13.5		
		59	Q-51	4		楔形石器	2.5 × 1.2 × 0.7	1.9	めの質頁岩	上部に横れ痕
		60	V-53	4			1.8 × 1.1 × 0.9	1.6	めのう	上下に横れ痕
		61	H-39	4	盛土	石核	3.7 × 4.6 × 3.5	47.3		
		62	V-54	10	I層		3.2 × 3.3 × 2.0	20.6		
		63	U-55	19			2.3 × 4.0 × 1.6	12.2		
		64	U-58	10			3.2 × 4.5 × 2.7	37.6	めの質頁岩	
		65	U-56	12			3.9 × 2.2 × 3.3	30.1		

IV-36	#	66	U-53	12	#	#	1.4 × 2.1 × 1.9	4.8	めのもう	
#	#	67	T-56	2	#	#	2.2 × 2.5 × 3.2	14.7	#	
#	#	68	R-51	12	#	#	2.3 × 3.5 × 1.4	8.8	珪質頁岩	
IV-35	#	69	F-37	12	盛土	#	5.0 × 7.1 × 1.4	48.4	めのもう	
#	#	70	H-39	12	#	#	6.0 × 6.2 × 1.7	58.5	#	
#	#	71	F-36	9	#	#	5.8 × 5.9 × 2.6	80.0	#	
#	#	72	S-53	5	I層	#	3.8 × 2.9 × 1.8	25.6	珪質頁岩	
#	#	73	F-36	1	盛土	#	2.3 × 3.6 × 3.0	27.2	#	
#	#	74	#	9	#	#	3.7 × 1.7 × 1.2	8.0	めのもう	
#	#	75	T-58	4	I層	#	6.1 × 3.7 × 2.0	42.3	めのみ頁岩	
#	#	76	F-36	9	盛土	#	5.5 × 3.9 × 1.5	34.3	#	
#	22-1	77	R-52	5	I層	Uフレイク	4.0 × 2.8 × 1.2	12.8	めのみ頁岩	
#	#	78	H-39	20	盛土	#	6.2 × 3.3 × 0.8	16.9	硬質頁岩	
#	#	79	V-54	3	I層	#	2.9 × 3.0 × 1.6	14.7	#	
#	#	80	P-48	2	#	#	(2.6) × 2.5 × 0.9	(5.1)	#	下半部欠失
#	#	81	T-54	7	#	#	2.6 × 3.1 × 0.6	4.2	#	
#	#	82	Q-49	17	#	#	2.7 × 3.3 × 0.9	6.1	めのもう	
#	#	83	T-52	8	#	#	2.8 × 1.8 × 0.6	2.0	珪質頁岩	
#	#	84	V-59	5	#	#	4.0 × 2.0 × 0.7	5.4	めのもう	
#	#	85	F-36	29	IV層下	#	2.4 × 2.0 × 0.7	4.3	#	
#	#	86	M-44	2	盛土	#	3.4 × 2.6 × 0.5	4.3	めのみ頁岩	
#	#	87	表採	41	-	#	3.0 × 2.8 × 0.9	5.0	#	
#	#	88	U-60	13	I層	#	5.2 × 5.6 × 1.3	17.0	硬質頁岩	
#	#	89	U-58	5	#	#	3.1 × 3.3 × 0.7	4.0	#	
#	#	90	T-52	8	#	#	2.8 × 3.5 × 1.2	7.6	珪質頁岩	
IV-37	22-1	91	表採	50	-	Uフレイク	5.0 × 4.3 × 1.2	24.0	めのみ頁岩	
#	#	92	N-46	1	盛土	#	6.2 × 4.5 × 1.2	29.5	硬質頁岩	
#	#	93	U-60	6	I層	#	4.9 × 2.6 × 0.8	11.1	#	
#	#	94	V-54	3	#	#	2.0 × 1.9 × 0.4	1.0	珪質頁岩	
#	#	95	U-60	6	#	#	2.3 × 2.5 × 0.8	3.5	めのもう	
#	#	96	V-55	7	#	#	1.9 × 3.4 × 0.6	1.6	硬質頁岩	
#	#	97	R-53	6	#	#	1.3 × 4.0 × 0.8	3.8	めのもう	
IV-36	#	98	T-58	3	#	#	5.6 × 3.1 × 2.3	24.9	めのみ頁岩	
#	#	99	U-55	21	#	#	3.1 × 2.7 × 0.7	6.2	硬質頁岩	上半部欠失
#	#	100	V-57	8	#	#	4.4 × 3.2 × 0.8	12.1	#	
#	#	101	V-53	10	#	#	4.2 × 2.9 × 0.8	10.0	めのもう	
#	#	102	U-56	2	#	#	4.2 × 2.0 × 1.5	7.0	めのみ頁岩	
#	#	103	V-53	14	#	#	1.9 × 1.9 × 0.9	3.8	硬質頁岩	
#	#	104	R-49	2	#	#	2.8 × 1.5 × 0.8	2.8	#	
#	#	105	T-57	9	#	#	2.8 × 4.5 × 1.2	10.7	めのみ頁岩	
#	#	106	T-51	15	#	#	3.1 × 1.8 × 1.0	5.9	硬質頁岩	
#	#	107	S-54	2	#	#	2.8 × 2.3 × 0.9	5.4	めのみ頁岩	
#	#	108	V-56	3	#	#	2.9 × 3.9 × 1.4	12.2	めのもう	
#	#	109	S-54	2	#	#	2.7 × 2.3 × 0.6	3.1	#	
#	#	110	V-55	12	#	#	3.2 × 1.9 × 0.9	4.2	珪質頁岩	
#	#	111	U-54	7	#	#	2.4 × 4.0 × 1.2	10.3	めのみ頁岩	
#	#	112	U-52	18	#	#	3.5 × 3.3 × 1.3	19.0	硬質頁岩	
#	#	113	V-56	3	#	#	2.4 × 2.3 × 0.6	3.6	めのもう	
#	#	114	Q-51	6	#	#	1.9 × 2.5 × 0.5	2.1	#	
#	#	115	V-55	7	#	#	1.9 × 3.1 × 0.8	4.4	珪質頁岩	
#	#	116	表採	21	-	Rフレイク	2.9 × 2.9 × 0.5	3.7	めのもう	
#	#	117	T-53	11	I層	#	(3.2) × 2.5 × 0.7	(3.8)	硬質頁岩	
#	#	118	U-55	16	#	#	5.0 × 3.6 × 1.3	16.8	めのもう	
#	#	119	表採	13	-	#	4.4 × 3.7 × 0.7	11.4	硬質頁岩	
#	#	120	#	39	-	#	3.5 × 3.6 × 0.6	6.5	めのもう	
#	#	121	U-54	20	I層	#	2.7 × 1.9 × 0.5	2.6	めのみ頁岩	
#	#	122	T-53	11	#	#	2.5 × 3.3 × 0.5	3.3	硬質頁岩	
#	#	123	U-57	11	#	#	2.9 × 3.4 × 1.0	10.3	めのもう	
#	22-2	124	G-37	16	盛土	石弁(未成品)	(6.5) × (5.0) × (3.4)	(187.8)	緑色泥岩	下半部欠失
#	#	125	表採	62	-	石弁	9.0 × 3.8 × 1.6	100.4	#	
#	#	126	T-58	5	I層	石弁片	(2.5) × (5.3) × (1.4)	(21.8)	#	刃部・基部欠失
#	#	127	V-61	3	#	#	(1.5) × (3.6) × (1.1)	(5.4)	#	刃部のみ
#	#	128	U-58	3	#	磁石	(9.6) × (4.7) × 2.7	(77.1)	磁石	
#	#	129	T-53	7	#	#	(2.6) × (2.7) × (0.8)	(6.9)	#	

引用、参考文献

- 赤木駿介 1984 『エドウィン・ダンの生涯』 講談社
- 青森県立郷土館 1979 『鉄II遺跡発掘調査報告書』
- 石本省三 1983 『大中山5遺跡』 七飯町教育委員会
- 石本省三 1986 『七飯本町1・2遺跡』 七飯町教育委員会
- 石本省三 1989 『大中山26遺跡』 七飯町教育委員会
- 石本省三 1989 『緑町1遺跡』 七飯町教育委員会
- 石本省三 1990 『古峠炭窯跡—七飯町峠下における白炭窯の発掘調査』 七飯町教育委員会
- 石本省三 1991 『長万川遺跡』 七飯町教育委員会
- 石本省三 1991 『上藤城7遺跡』 七飯町教育委員会
- 加藤邦雄・内山真澄ほか 1983 『瀬棚南川』 瀬棚町教育委員会
- 児玉作左衛門ほか 1958 『サイベ沢遺跡』 市立函館博物館
- 鈴木守ほか 1969 5万分の1の地質図幅「東海」北海道開発庁
- 鈴木守・国府谷盛明 1964 『北海道亀田郡七飯町の地質』 七飯町
- 瀬川秀良 1974 『日本地形誌 北海道地方』 朝倉書店
- 瀬川秀良 1974 『西枯梗遺跡と段丘形成について』『西枯梗』 函館開闢発事業団
- 芹澤長介編 1979 『峠下聖山遺跡』 七飯町教育委員会
- 高倉新一郎編 1962 『エドウィン・ダン 日本における半世紀の回想』 エドウィン・ダン顕彰会
- 高橋和樹・内山真澄ほか 1976 『瀬棚南川遺跡』 瀬棚町教育委員会
- 高橋正勝 1979 『峠下遺跡の発掘調査』 七飯町教育委員会
- 高橋正勝ほか1980 『アヨロ』 北海道先史学協会
- ダン道子 1968 『明治の牧場』 ダン道子後援会
- 田原良信 1985 『サイベ沢遺跡』 函館市教育委員会
- 田原良信・鈴木正勝 1986 『サイベ沢遺跡II』 函館市教育委員会
- 千代肇編 1974 『西枯梗』 函館開闢発事業団
- 千代肇・石本省三ほか 1981 『尾白内』 森町教育委員会
- 七飯町 1976 『七飯町史』
- ヘレン・ダン・スミス 1979 『あるお雇い外国人の生涯』 日本経済新聞社
- 北海道総務部文書課編 1965 『北海道の夜明け』『開拓につくした人びと 2』 北海道
- 財北海道埋蔵文化財センター 1986 『木古内町 建川1・新道4遺跡』 財北海道埋蔵文化財センター 調査報告第33集
- 財北海道埋蔵文化財センター 1987 『木古内町 建川2・新道4遺跡』 財北海道埋蔵文化財センター 調査報告第43集
- 財北海道埋蔵文化財センター 1988 『函館市 石川1遺跡』 財北海道埋蔵文化財センター 調査報告第45集
- 財北海道埋蔵文化財センター1988 『函館市 枯梗2遺跡』 財北海道埋蔵文化財センター 調査報告第46集
- 三谷勝利ほか 1966 5万分の1地質図幅「大沼公園」北海道立地下資源調査所
- 吉崎昌一ほか 1979 『聖山—北海道亀田郡七飯町における縄文時代遺跡の調査』 七飯町教育委員会

V ま と め

検出された遺構は、焼土跡2か所と土塁跡である。また遺構扱いとした一括出土遺物6か所、礫出土が6か所、フレイク集中1か所が検出されている。焼土跡と一括出土遺物などは統縄文時代のものである。出土土器の90%近くが統縄文時代の恵山式土器である。ほかに縄文時代早期、前期、中期、後期の遺物が出土している。生活の痕跡を示すものは焼土跡と一括出土遺物などであり、今年度の調査区は遺跡の周縁部にあたるのではないかと思われる。調査区の東側には一段高まった部分があり、また南側には一段低くなった部分がある。ともに蒜沢川寄りにあり、統縄文時代の遺物が濃密に散布している。地形、遺物の散布状況などから推測するならば、本遺跡の中心部は、より蒜沢川寄りに存在するのではないかと思われる。

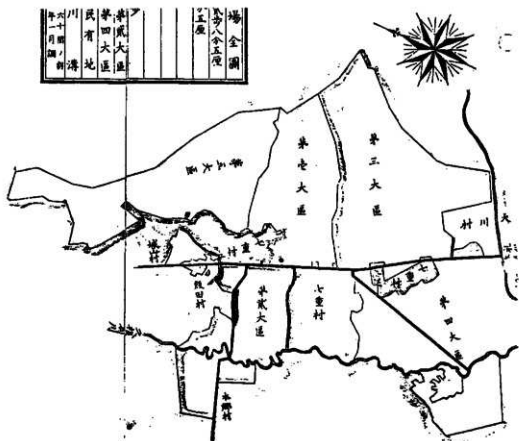
1 土塁跡について

調査によって現土塁跡下に巾1m～2m、高さ0.4m～0.6mの若干の高まりをもつ盛土が検出された。現土塁跡とされるものは、戦前畑地開墾時に側溝を掘開した際、その土を盛土したものであるという証言を得た。とすれば現土塁跡下に検出された低い盛土が、伝えられるようなエドウィン・ダンが構築した土塁跡の一部なのであろうか。

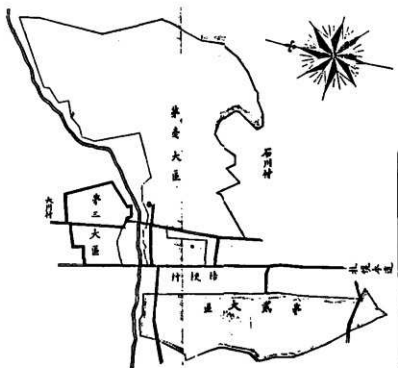
北海道に羊が移入されたのは、1874(明治7)年、米国産細羊が東京から七重に移入されたのが最初とされている。1875(明治8)年、桔梗野七重試験場属地748町余歩が牧場用地とされ、翌1876(明治9)年、桔梗野牧羊場として開場した。1985年5月から10月までエドウィン・ダンは七重官園において、羊の育生にも力を入れ、羊舎、放牧場、牧草地などの整備等を行った。1978(明治11)年、大川村一本粟の地、71町5反8畝21歩を放牧場とする。これが現在の土塁跡に囲まれた範囲にあたるものである(図V-1・2)。「開拓使事業報告 第2巻之内 七重勸業試験場」の附図 桔梗の牧羊場全図によると、上記の範囲が「牧場及運動場」とされている。この図の「形状」に「土塁」という項が見える。この「土塁」は「大川村一本粟放牧場」にはなく、蒜沢川の南、札幌新道(現一般国道5号)の東側の一面にある「牧草園」や「牧場及運動場」をめぐるものとして表示されている(図V-3)。ここでいう「土塁」がどのようなものかはっきりしない。一方エドウィン・ダンに関する資料の中に、彼が羊牧場などに「土塁」を構築したという記述は見あたらない。ただ、牧場などに柵もなく、土地が荒されるおそれがあるため「牧柵」を作って放牧場を整備した事が彼自身によっても語られている。また「七重官園写真帖」には、当時の様子を語るいろいろな場面の写真があり、その中に桔梗牧羊場を撮影したものも含まれている。これによると「牧柵」をめぐるし、わずかに土盛りしている様子うかがうことができる。

調査区周辺が牧羊場として利用されるのは1878年以降のことである。当時ここに土塁を構築したという事実は見あたらない。また1896(明治29)年発行の国土地理院5万分の1地形図「無澤峠」には調査区周辺に「盛土部」の図示はなく、1945(昭和20)以降は国土地理院発行5万面の1地形図「大沼公園」に「盛土部」が図示されている(図V-4・5・6)。

1876年以降エドウィン・ダンは札幌から度々七重に来て、牧羊等を指導していることから考えると、今回の調査で検出された「土塁」跡(盛土①)は1878年放牧場として開設された時、あるいはそれ以降の「牧柵」の跡、または「牧柵」構築に伴う土盛跡の一部と考えることが出来るかも知れない。



図V-1 開拓使勸業七重試験場全圖（「明治11年開拓使七重勸業試験場一覽表」より）



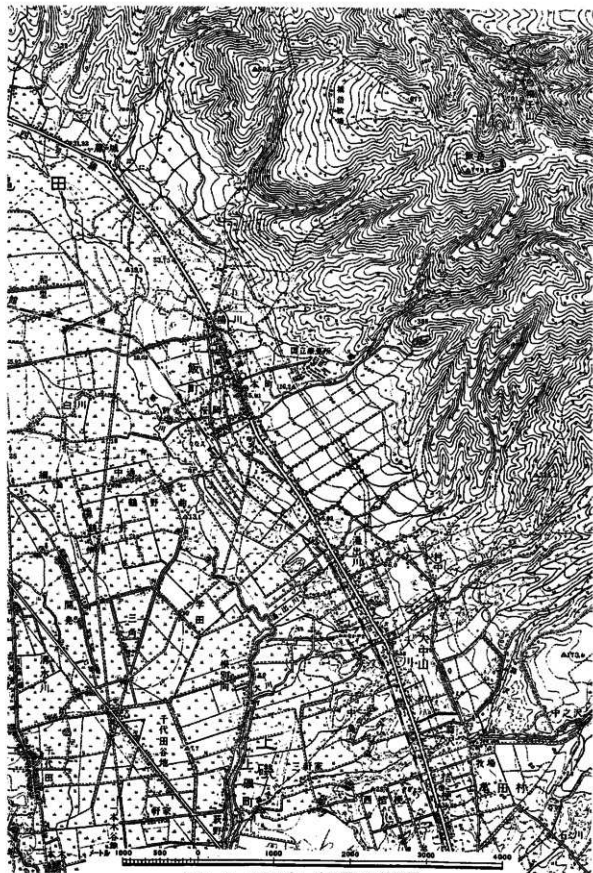
図V-2 開拓使勸業試験場属地枯梗村牧羊場全圖
（「明治11年開拓使七重勸業試験場一覽表」より）



図V-4 明治29年 遺跡周辺の地形図
 (この地形図は国土院発行5万分の1地形図「無澤時」を
 利用したものである。



図V-5 昭和20年 遺跡周辺の地形図
 (この地形図は、国土地理院発行5万分の1地形図
 「大府公圖」を利用したものである。)



図V-6 昭和34年 遺跡周辺の地形図
 (この地形図は、国土地理院発行5万分の1地形図
 「大相公園」を利用したものである。



図V-7 現状の土塁跡 測量図

2 土器等について

今回の調査で出土した土器等は4,720点である。

層別内訳は、第I～IV層出土(表採を含む)は3,644点(77.2%)、第VI層出土(遺物集中を含む)は1,010点(21.4%)、第VII層出土は66点(1.4%)である。第VI・VII層出土の遺物数は少ない。これは第VI・VII層が土塁地区のみに残存し、比較的狭い範囲に限られたことによるものと思われる。

なお、先述のように第VII層から少量の土器片・フレイクが出土している。第VII層上部のものは第VI層で、第VII層中から下部については第VIII層で集計している。各層毎の出土土器の分類別内訳は下記の通りである。

出土層位	I群土器	II群土器	III群土器	IV群土器	V群土器	陶磁器類	計
第I～IV層	25 (0.6%)	10 (0.3%)	6 (0.16%)	160 (4.4%)	3,274 (90%)	169 (4.6%)	3,644 (77.2%)
第VI層	15 (1.4%)	0	0	61 (6.0%)	934 (92.4%)	0	1,010 (21.4%)
第VII層	58 (87.9%)	0		5 (7.6%)	3 (4.5%)	0	66 (1.4%)
計	98	10	6	226	4,211	169	4,720

各土器群の特徴

各土器群について各層毎・異層間の接合関係の図化を試みた(図IV-19・図IV-29・図IV-30)。その結果、復原土器や破片は、近接した異層間接合や同層周辺遺物との接合関係が認められるのみであった。したがって、この様に遺物の散在的接合が認められなかったことから、第VI・VII層の遺物は比較的原位置を保っていたものと思われる。

I群土器は、出土状況から第VII層が本来の包含層と思われる。出土量自体は少ない。分布は、ほぼ土塁地区に限られ、2つのブロックに分けられそうである。しかし、ブロック間の器形・文様構成等には違いは認められなかった。いずれも比較的器壁が厚く、太めの原体でやや乱れ気味の羽状縄文が施されたものが多い。2本一組の捻糸文的なものもある。口縁部・体部に数条一組の縄端丘文が多用されるものが多い。これらから東廻路IV式のやや新しい段階のものと思われる。

II群土器はA・B地区南側から出土し、単軸捻糸回転文のものと複節斜行縄文のものがある。前者については小破片が多いため掲載出来なかった。複節斜行縄文のものについては円筒土器上層式の可能性があるが、調整・胎土が単軸捻糸回転文のものと類似したことから本群で扱った。

III群土器は、II群土器と同様にA・B地区南側から出土している。2本一組の沈線が認められ、調整がやや粗雑になることから、覆林式に相当するものと思われる。

IV群土器はa類の後期前葉のものがほとんどで、1点だけb類が出土している。a類には余布式、涌元式、トリサキ式、大津式がある。a類はバリエーションが多い割にはいずれも量的には少ない。涌元式が一個体分土塁地区からまとまって出土している。b類は堂林式である。

IV群土器はおもに土塁地区・A地区から出土している。土塁地区においてIV層中位からの出土が確認されている。

V群土器は、ほぼ調査区全域に認められた。小破片が多いが底部破片では51個体、口縁部破片では112個体分が出土している。分布は土塁地区南側とA・B地区東側の調査区境界部分との2つのブロックに分けられる。しかし、A・B地区東側は耕作による攪乱が地山までおよび、土器片は小破片で磨滅が著しいものがほとんどで、器形や文様構成を知ることのできるものは少なく、ブロック間の比較ができなかった。

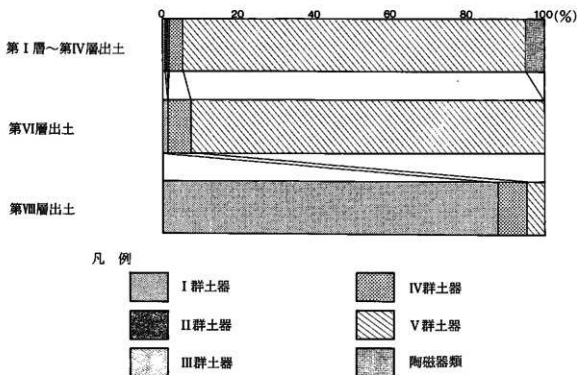
V群土器には、南川III群土器に類似した文様構成をもつもの(図IV-5-1・図IV-31-27)と南

川IV群土器に類似したものがあ。主体は南川IV群土器である。器種には変形・壺形・浅鉢形・皿形、ミニチュア土器がある。

本遺跡の南川IV群土器に類似したものには、壺形土器が多く、器形は明瞭な頸部や肩をもたず、口縁部から体部上半にかけ緩やかにくびれ、大きく外反した比較的幅広の口縁部をもつ。体部最大径は、体部中央にある。底部はほとんどのものが揚げ底である。文様構成は、口縁部・体部には縦走ないし斜行気味の縄文が、頸部には横走の縄文が加えられ、頸部ないし頸部下半に数条の沈線文が施されているものが多い。また、肩部分や頸部の沈線最下部に鋸歯状の沈線文が加えられているものもある。

施文順序は、口唇部に刻み目を加えた後、器面に縄文を施し、無文帯作出のためや器面調整のため軽くナデ調整が施され、頸部に横走の縄文・横環する沈線文・波状ないし鋸歯状の縄文・沈線文が加えられ、さらに軽くナデ調整が施されている。そして、波状ないし鋸歯状の文様が描かれているものには、文様施文後に沈線で縁取りを加えられているものもある。南川III群土器に類似した文様構成をもつものもあるが、それすら、口縁部から頸部の内面や肩部文様帯は、緩やかに体部へと移行する。また、頸部無文帯もやや内湾気味であることなどから、文様構成において古い様相を示すものがあるが、器形からみると南川III群土器のうちでも新しい段階のものと考えられる。

V群土器は、遺構に伴っていないが、各器種の復原土器は比較的狭い範囲から得られている。南川III群土器の新しい段階と思われるものもあるが、南川IV群土器のまとまった資料といえる。



図V-8 各層毎の出土土器分類別内訳

3 石器等について

本遺跡で出土した遺物数9,662点のうち、石器等は4,942点(51%)であった。層位別内訳は、第I～IV層出土(表採を含む)が3,928点(79%)、第VI層(一括遺物・フレイク集中の石器等も含む)が986点(20%)、第VIII層が28点(1%)である。第VI層および第VIII層の遺物が少ないのは前項にも記述したように、当該層が土墨地区にしか残存しておらず、それが全面積の約20%程度だからである。

第I～IV・VII層から出土した石器等の多くは、第I層か土墨地区に認められた盛土、あるいは表採のものであって、それ以外には攪乱等の影響のために第II～VII層から出土したものが少量ある。分布は図IV-30で示したように土墨地区と調査区の東側に偏る傾向が見られる。

包含層全体から見られる器種別頻度は、フレイク・チップが圧倒的に多く全体の90%を占める。剥片石器・礫石器はそれぞれ1%前後しかなく、ほかには石核・Uフレイク・Rフレイク・礫等が数%見られるだけである。剥片石器の数量は全体で67点出土しており、内訳は石鏃(12点)、石槍(1点)、石錐(4点)、つまみ付ナイフ(4点)、スクレイパー(44点)、楔形石器(2点)である。このうち第VI層からはスクレイパーが1点、第VIII層からはつまみ付ナイフが3点出土しているだけである。礫石器は27点出土しており、石斧(7点)、たたき石(4点)、くぼみ石(2点)、すり石(2点)、台石(5点)、石皿(2点)、砥石(6点)がある。しかし、第VIII層からはすり石が1点検出されただけであった。

時期については、第VIII層から出土した石器等が少量ではあるが形態的な特徴や、出土位置からみてI群土器に伴うものと思われる。また第VI層出土の石器等は、IV群・V群土器に伴うものと考えられるが、V群土器の出土量が圧倒的に多いことから判断して、石器等の大半はV群土器に伴うものと思われる。

今回の調査から窺える石器等の特徴は、まだ遺跡の主体部と考えられる部分を調査してないので不明な点が多いが、剥片石器、礫石器が共に少なかったこと、フレイク類が圧倒的に多かったこと、石核の出土量もやや目立つことなどが上げられる。しかも、フレイク類の石材もめのう、めのう質頁岩、硬質頁岩が多く、これらは比較的近いところに産地があると予想される。

4 大中山13遺跡の火山灰について

1. はじめに

本遺跡では、黒ボク土中に三層の火山灰が認められた。ここでは主に鉱物組成上の特徴を記載し、既知の火山灰との対比を行う。発掘層位の第Ⅲ層と第Ⅴ層が火山灰である。また、第Ⅳ層基底部附近にも火山灰薄層がまれに認められる。火山灰試料は発掘グリッドM-43の地質断面から採取した(図V-9)。第Ⅲ層には白っぽい黄褐色(10YR5/4)のシルト質降下火山灰である。黒ボク土中では白色に見える。耕作により削割や攪乱を受けていることが多く、保存は悪い。保存の良い場所ではレンズ状に産出することが多く、最大層厚10cmである。第Ⅳ層基底部附近の火山灰は砂質の降下火山灰で、層厚数mmである。第Ⅴ層は、黄色味の強い褐色(10YR4/6)や暗褐色(7.5YR3/3)を呈するシルト質降下火山灰である。かなり土壌化が進んでいる。層厚10cm±で断続的に産出する。

2. 試料の処理

火山灰試料は次の手順で処理し検鏡した。水洗→6% H₂O₂・10% HCl 処理→水洗→乾燥→篩分け→粒径1/8-1/16mm(第Ⅳ層基底部附近の火山灰については粒径1/4-1/8mm)についてプレパラート作製(封入剤カナダバルサム)→偏光顕微鏡下で200粒以上検鏡(植物起源粒等も含む)→各鉱物の粒数%を求め鉱物組成とする。

3. 結果

各火山灰の鉱物組成を表V-1に、火山ガラスのスケッチを図V-10に示す。第Ⅲ層は主に火山ガラスから成り、ついで斜長石が多い。火山ガラスはM型が多くついでL-C型が多い。第Ⅳ層基底部附近の火山灰は、主に斜長石から成り、ついで角閃石が多い。角閃石は緑色種と褐色種が認められ、緑色種がやや多い。軽石粒が比較的多い。第Ⅴ層はほとんど火山ガラスから成り、アルカリ長石を含む。火山ガラスはL-C型が多く、ついでF型・M型が多い。土壌化が進んでいるため、プラントオパールが比較的多く含まれる。

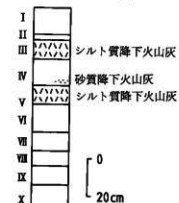
4. 対比と問題点

これらの火山灰は、本遺跡周辺で見い出される火山灰と、鉱物組成・産出層準等から以下のように対比される。

第Ⅲ層は、知内-函館地域で現作土層直下に産出する白色の火山灰(湯の里3遺跡の「Yn-b」,

矢不來2遺跡の「Yf-a」, 新道4遺跡の「Sm-a」, 石川1遺跡の「上位の火山灰」(北海道埋蔵文化財センター, 1986・1987a, b・1988b)等)に対比される。また、伊達市周辺においても認められる(北海道埋蔵文化財センター, 1991)。この火山灰は、町田(1986)の記載の火山灰に対比することができ、「駒ヶ岳dテラフの細粒部分」とされている。

第Ⅳ層基底部附近の火山灰は、札苅遺跡の「St-b」, 新道4遺跡の「Sm-b」, 矢不來天満宮跡の「砂質火山灰」, 石川1遺跡の「中位の火山灰」(北海道埋蔵文化財センター, 1986a・1987b・1988a, b)等)に対比される。



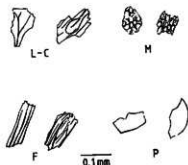
図V-9 M-43における火山灰層序
(I-Xは4-5ページ参照)

表V-1 火山灰の鉱物組成 (粒数 %)

試料	アルカリ長石	斜長石	角閃石	斜方輝石	単斜輝石	斜方鉄鉱物	火山ガラス	軽石	スコリア	風化鉱物粒	プラントオパール	不明	検数
M-43 III 層		16.1		0.4	0.8	1.1	81.6						261
M-43 砂質火山灰		46.1	19.4	1.4	2.8	5.6	0.4	13.7	3.9	6.0		0.7	284
M-43 V 層	5.7	0.7	0.4			0.7	86.4				6.1		279

第V層はほとんど火山ガラスから成り、アルカリ長石を含む特異な火山灰である。これは、町田ほか (1981)・町田ほか (1984) の「白頭山-苫小牧火山灰 (B-Tm)」に対比される。

駒ヶ岳周辺の遺跡発掘調査では、作土層直下の白色火山灰がKo-d (駒ヶ岳火山灰d層)、その下位の褐色の火山灰がKo-e (駒ヶ岳火山灰e層) とされることが多いようである。本遺跡の第V層の火山灰は、従来Ko-eとされてきた火山灰に相当するらしい。しかし本遺跡の第V層は、佐々木ほか (1970) によって示されたKo-eの鉱物組成とは全く異なっている。Ko-eの再検討が今後の課題である。



図V-10 火山ガラスのスケッチと火山ガラス型 (試料: 第V層)

引用文献

- 北海道埋蔵文化財センター (1986a): 木古内町札苅遺跡. 128pp.
 北海道埋蔵文化財センター (1986b): 知内町湯の里3遺跡. 54pp.
 北海道埋蔵文化財センター (1987a): 上磯町矢不來2遺跡. 91pp.
 北海道埋蔵文化財センター (1987b): 木古内町建川2・新道4遺跡. 614pp.
 北海道埋蔵文化財センター (1988a): 上磯町矢不來天満宮跡. 89pp.
 北海道埋蔵文化財センター (1988b): 函館市石川1遺跡. 320pp.
 北海道埋蔵文化財センター (1991): 伊達市牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡・谷藤川遺跡. 220pp.
 町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981): 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, Vol.51, No.9, pp.562-569.
 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984): テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカatalog—. 古文化財編集委員会編「古文化財の自然科学的研究」, 984pp., 同朋舎: pp.865-928.
 町田 洋 (1986): 恵山町・日ノ浜砂丘1遺跡の火山灰層. 日ノ浜砂丘1遺跡, 172pp., 恵山町教育委員会: pp.129-133.
 佐々木竜男・片山雅弘・音羽道三・天野洋司 (1970): 渡島半島の火山灰について. 北海道農業試験場土性調査報告, 第20編, pp.255-281.

(花岡正光)

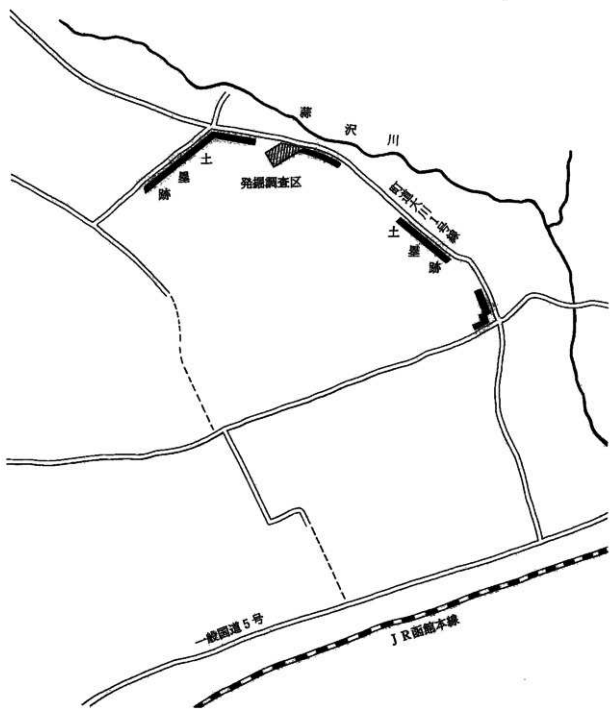
写 真 图 版

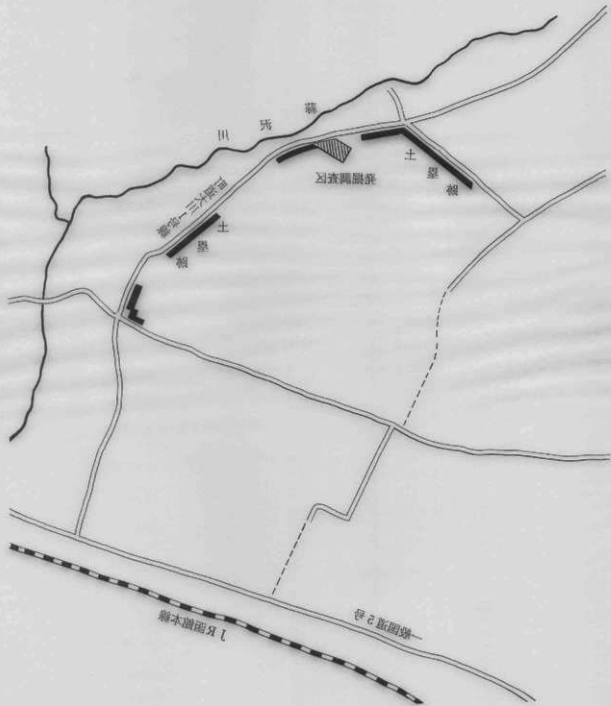


1 遺跡遠景 (セスナ：北から)



2 赤松並木 (一般国道5号：北西から)

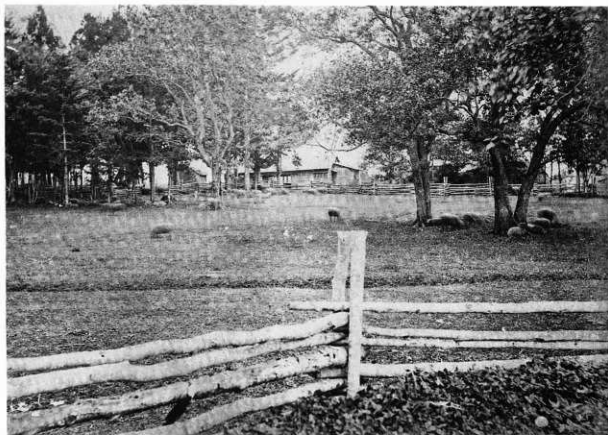






遺跡周辺の航空写真 (昭和51年国土地理院撮影：上空より)

図版 3 明治初期の綿羊放牧場



1 桔梗綿羊放牧場の牧欄 (明治初期:『七重官園写真帖』より複写)



2 桔梗綿羊放牧場 (明治初期:『七重官園写真帖』より複写)



1 土塁跡 (南から)



2 土塁跡 (北から)



3 土塁跡 (東から)



図版 5 調査区内の土塁跡



1 地形測量風景 (北東から)



2 トレンチ調査 (南西から)



3 小トレンチ-4の土層断面 (北から)



土塁跡全景 (北から)

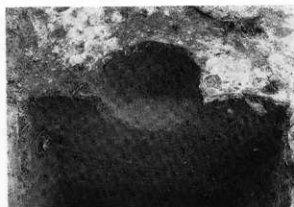
図版7 土塁跡の調査



1 地形測量風景 (北から)



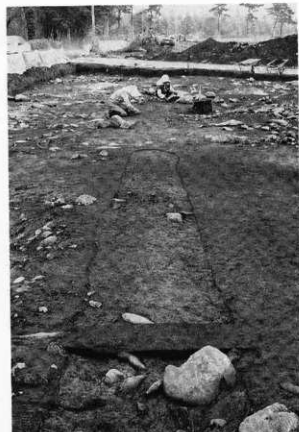
2 SP-1 土層断面 (北から)



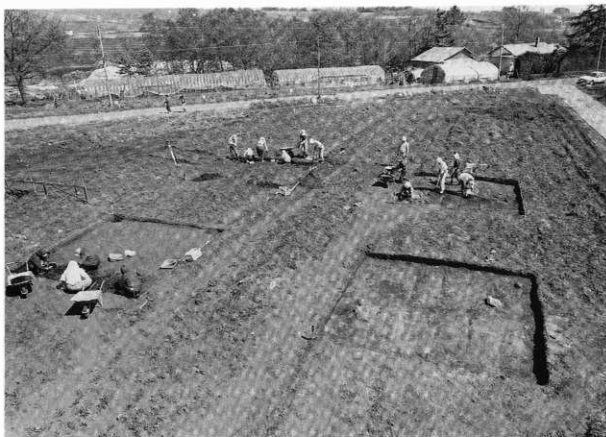
3 SP-1 完掘 (北から)



4 溝跡確認 (北から)



5 溝跡の調査風景 (北から)



1 25%調査風景 (北西から)

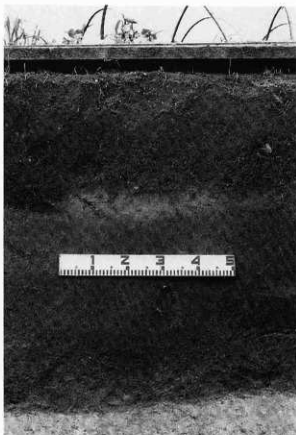


2 包含層調査 (北から)

図版9 第Ⅵ層の調査(1)



1 調査風景(南から)



2 F-2 土層断面(東から)



3 一括出土遺物1の出土状況①(北東から)



4 一括出土遺物1の出土状況②(北東から)



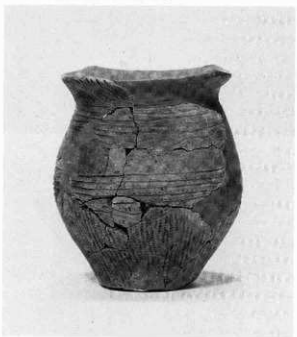
5 一括出土遺物1の土器(図W-3)



1 一括出土遺物2の出土状況①(南東から)



2 一括出土遺物2の出土状況②(北東から)



3 一括出土遺物2の土器(図IV-5-1)



4 一括出土遺物2の土器(図IV-5-2)



5 一括出土遺物2の土器(図IV-5-3)



6 一括出土遺物4の土器(図IV-9)

図版11 第Ⅵ層の調査(3)



1 一括出土遺物3の出土状況(北から)



2 一括出土遺物3の土器(図N-7-2)



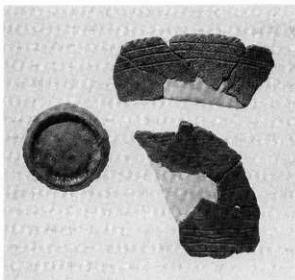
3 一括出土遺物3の土器(図N-7-1)



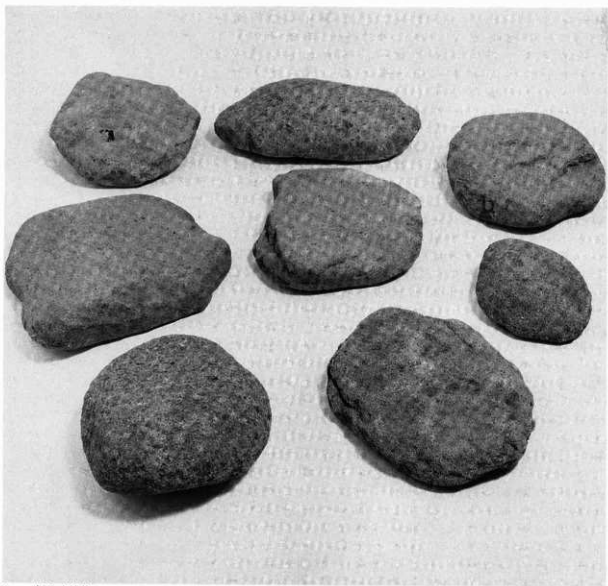
4 一括出土遺物3の遺物(図N-7-3・4)



1 一括出土遺物5の出土状況(南西から)



2 一括出土遺物5・6の土器(図Ⅳ-11-1、図Ⅳ-13-1・2)

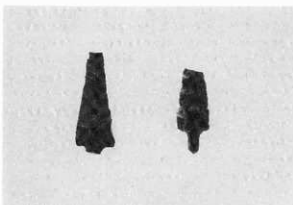


3 一括出土遺物2(図Ⅳ-5-4)・5(図Ⅳ-11-2)、第Ⅵ層出土の礫石器(図Ⅳ-15)

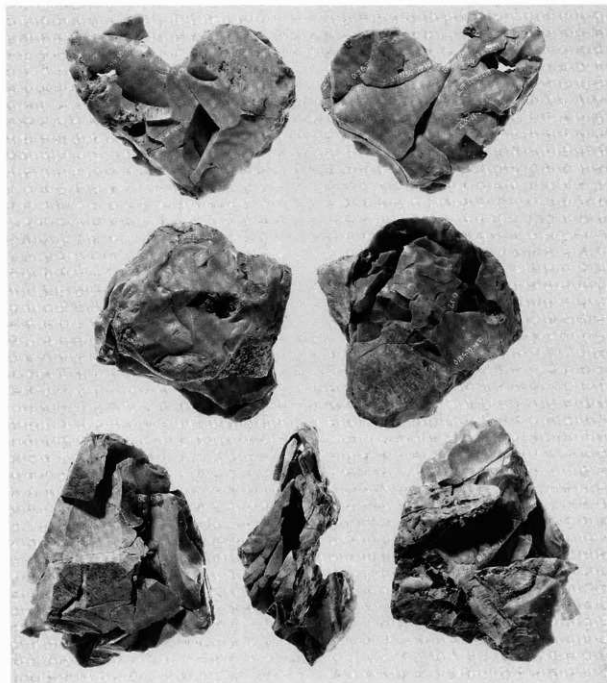
図版13 第Ⅶ層の調査(5): フレイク集中①



1 出土状況 (南から)



2 石核 (図W-17-1・2)



3 剥片・石核接合資料 (図W-17-3・4・5)



出土製片 (図IV-17)

図版15 第Ⅵ層出土の遺物(1)



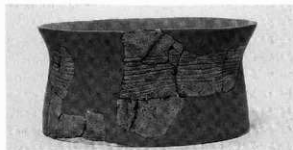
1 図Ⅳ-20-1a



2 図Ⅳ-20-2a



3 図Ⅳ-20-3



4 図Ⅳ-20-4



5 図Ⅳ-20-5



6 図Ⅳ-20-6



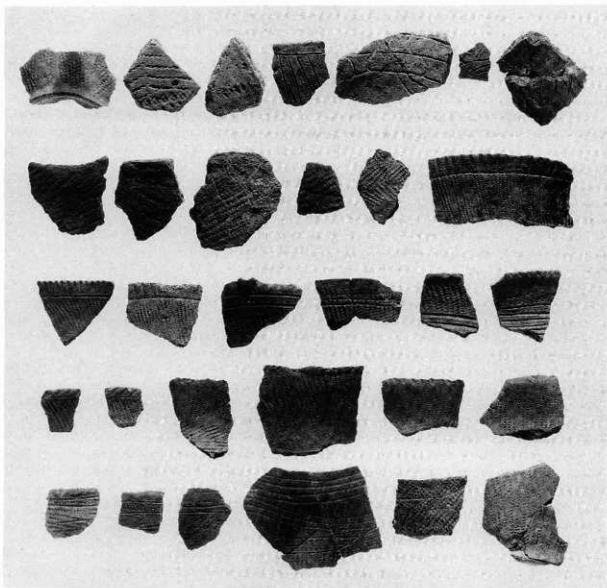
7 図Ⅳ-21-7a



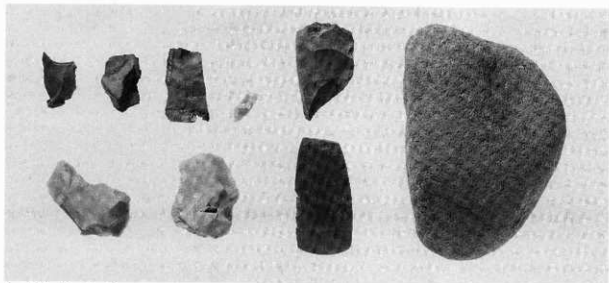
8 図Ⅳ-21-8a



9 図Ⅳ-21-9

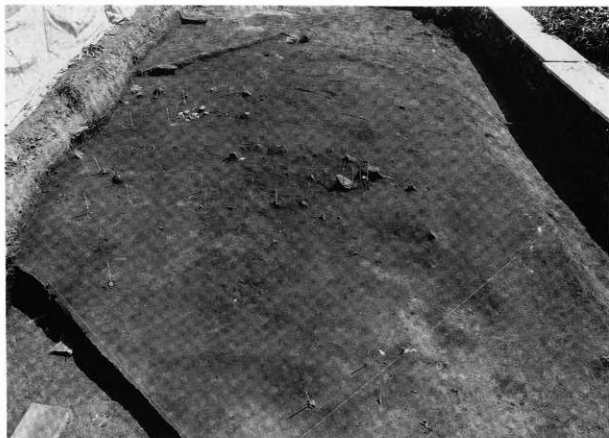


1 図Ⅳ-21-10~40



2 図Ⅳ-24-1~9

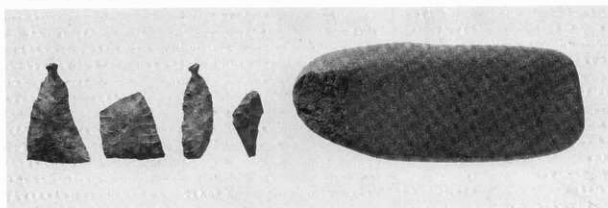
図版17 第Ⅷ層の調査



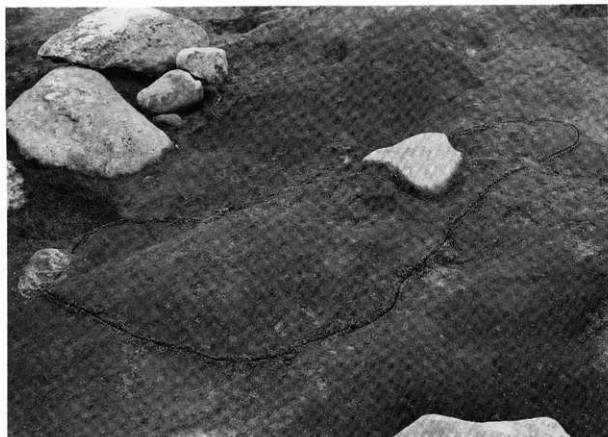
1 J-41 遺物出土状況 (北から)



2 図Ⅳ-27-1~12



3 図Ⅳ-27-13~17



1 F-1 確認 (北西から)

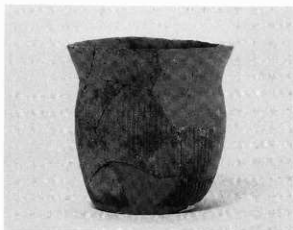


2 第I層調査風景 (北から)

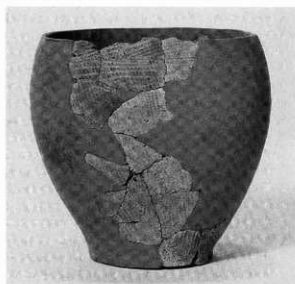
図版19 第I層～第IV層の出土遺物(1)



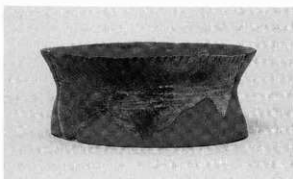
1 図IV-31-1a



2 図IV-31-3a



3 図IV-31-5



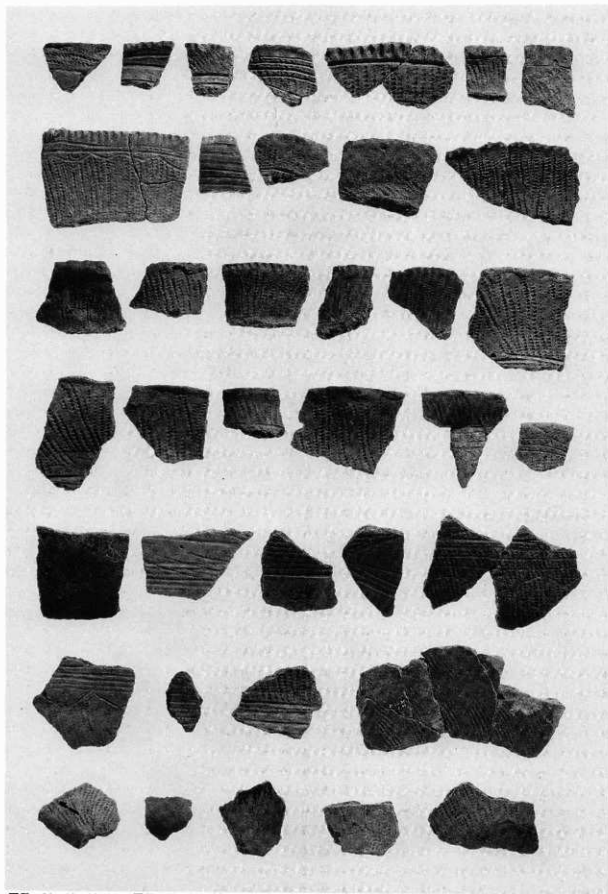
4 図IV-31-2



5 図IV-31-4

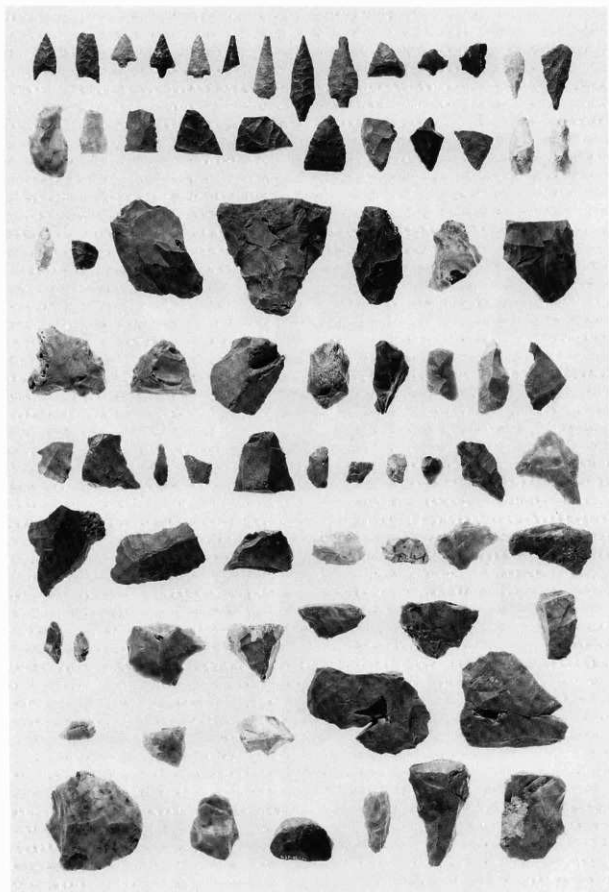


6 図IV-31-7～25

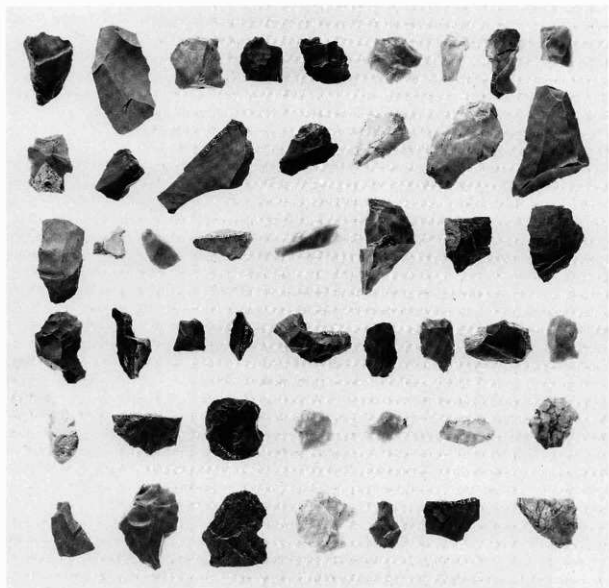


図Ⅳ-31-26~33・6・図Ⅳ-32-34~62

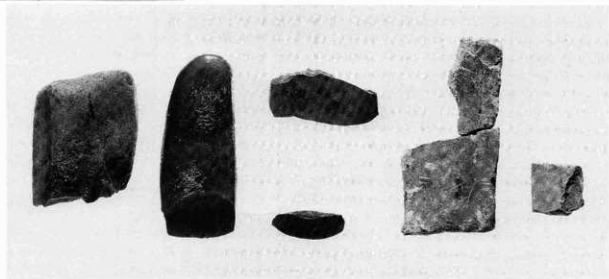
図版21 第I層～第IV層の出土遺物(3)



図IV-33-1～図IV-35-76



1 図Ⅳ-35-77～図Ⅳ-36-123



2 図Ⅳ-36-124～129

北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第78集

七飯町

大 中 山 13 遺 跡

一般国道5号函館新道(自専道)工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成4年3月27日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒064 札幌市中央区南26条西11丁目

☎011(561)3131

印 別 岩橋印刷所

〒063 札幌市西区西町南18丁目1番34号